

スラヴ学論集

Slavia  
Iaponica

Studies in Slavic Languages and Literatures

第 24 号

日本スラヴ学研究会

2021



まえがき

企画編集委員長 三谷恵子

2020年は文字通り「コロナ」で世界中が埋め尽くされた一年でした。本研究会でも、2020年3月末に予定していた研究発表会が、新型コロナウイルス感染症拡大を受けて中止になり、6月に開催するはずだった日本ロシア文学会との合同シンポジウムも延期を余儀なくされ、半ば活動が停止したような状況となりました。

このような中、長年本会の会員として活動に参加くださっていた、飯島周先生が2020年9月にご逝去されました。飯島先生は、東京大学で言語学を学ばれ、その後はチェコ・ボヘミア研究に進まれ、この道で数多くの業績を残されました。飯島先生の翻訳でチャペックなどのチェコ文学をはじめて知った日本人も少なくないことでしょう。チェコ文学、チェコ文化の日本への紹介を続けられ、日本とチェコの友好の発展に貢献され、そして最後までご自分の仕事への意欲を持ち続けられていた飯島先生のお姿は、私たちの目に今も焼きついています。心からご冥福をお祈りいたします。

その飯島先生のご業績をふり返り、また、いつも穏やかな眼差しで若手の研究を見守ってくださった先生を偲ぶため、2020年12月に、飯島先生追悼シンポジウムをオンラインで開催しました。コロナ禍で社会全体も私たちの研究もさまざまな負の影響を受けましたが、オンライン会議の普及は、新しい研究公開のツールとして私たちが手にした、唯一の評価できるものかもしれません。シンポジウムは60名近い参加者を集めての開催となりました。もちろん飯島先生のご人徳がなければ、これほどの盛会にはならなかったことはいまでもありません。

本論集24号には、過去の講演の記録2本、論文1本、飯島先生追悼記事、それにコロナ禍に関連して、パンデミックにちなんだ論文2本を掲載しました。今号も多彩な記事が並びましたが、研究論文が1本というのは寂しいところです。次号では多くの会員からの論文投稿を期待します。



# 目 次

## スラヴ学論集 2021 年 (第 24 号)

### 【飯島周先生追悼文】

チェコスロヴァキア軍団側から見たヤロスラフ・ハシェク	
——飯島周さんを偲びつつ .....	長與 進..... 7
飯島周先生追悼——飯島周先生のお人柄とお仕事	
.....	石川 達夫.....23
ボガトウイリヨフの戦中・戦後	
——プラハ学派とソ連のスラヴ学 .....	大平 陽一.....27
飯島周先生の思い出	
.....	阿部 賢一.....37
飯島周 (1930-2020) 先生 主要業績一覧	
.....	阿部 賢一.....41

### 【講演】

Doing Slavic linguistics in the US today	
.....	Marc L. Greenberg.....45
Post-Chornobyl: From (Non)Representation to an Ecocritical Reading of Nuclear Trauma	
.....	Tamara Hundorova.....59

### 【論文】

ルトスワフスキのとらえた言葉と音楽——イワコヴィチュヴナの詩を例に	
.....	松尾 梨沙.....77

### 【特集】

中世スラヴ世界における「疫病」の表現と表象	
.....	三谷 恵子..... 105
ロシア帝国のポーランド人と 1830-31 年のコレラ	
.....	越野 剛..... 127

【報告】

「スタシス・エイドリゲヴィチウス イメージ——記憶の表象」展 .....	貞包 和寛.....	143
2018/2019 年度日本スラヴ学研究会奨励賞選考結果についての報告 .....	阿部 賢一.....	151

---

まえがき .....	三谷 恵子 .....	3
執筆者一覧.....		154
活動記録.....		155
編集後記.....		157
日本スラヴ学研究会会則.....		158
『スラヴ学論集』投稿規定 .....		159
日本スラヴ学研究会奨励賞に関する内規.....		160

【飯島周先生追悼文】

## チェコスロヴァキア軍団側から見たヤロスラフ・ハシェク

——飯島周さんを偲びつつ——

長興 進

本稿は2020年12月5日に、日本スラヴ学研究会主催で開かれた「飯島周先生追悼シンポジウム」の席で口頭発表した論考に、修正・加筆したものである。当日の語り口調はそのまま生かした。

### (一)

本日は飯島周さんの思い出に捧げるシンポジウムの席でお話できることを、名誉なことと感じています。本日の話のタイトルは、「チェコスロヴァキア軍団側から見たヤロスラフ・ハシェク」ですが、最初に簡単に、飯島さんの思い出について触れておきたいと思います。

飯島さんとの出会いは今から45年ほど前の、1970年代中頃に遡ります。当時ぼくは、早稲田大学大学院文学研究科のロシア文学専攻に在籍していましたが、ロシア語の勉強と平行して、他のスラヴ諸語の勉強も続けていて、日本チェコスロバキア友好協会(当時)主催の講座でチェコ語も学んでいました。あるとき担当のチェコ人講師が都合で休まれたとき、代理を務められたのが飯島さんでした。おそらく40代なかばでいらっしやっただと思います。控えめで謙虚だけれども、言語学の知識がしっかりした方だ、というのが第一印象でした。

その後1980年代中頃に、日本スラヴ学研究会の前身である日本西スラヴ学研究会が立ち上げられたとき、中心になって動かれたのはチェコ語の千野栄一さんとポーランド語の吉上昭三さんでしたが、飯島さんも初期の頃から、会合にはかならず出席しておられました<sup>1</sup>。2009年から2011年までは本研究会の会長も務められました。

飯島さんは80歳を越えられてからも、日本スラヴ学研究会の会合をはじめとして、駐日チェコ大使館やスロヴァキア大使館のレセプション、日本チェコ協会/日本スロバキア協会の催しには、かならず姿を見せておられました。ほんとうにお元気な方だなあ、といつも頼もしい思いでお姿を拝見していました。

### (二)

飯島周さんのお仕事の大きな柱として、チェコ文学からの翻訳を挙げることに異論

は出ないだろうと思います。中心になったのは、いうまでもなくヨゼフ・チャペックの作品群の翻訳ですが、風刺作家ヤロスラフ・ハシェクの翻訳も手がけておられます。『ハシェクの風刺短編集』（大学書林、1989年）と『不埒な人たち ハシェク風刺短編集』（平凡社、2002年）がそれです<sup>2</sup>。ここで注目しておきたいのは、最初に対訳本（左頁にチェコ語の原文、右頁に日本語訳、下段に文法説明）をお出しになり、それから翻訳へ、という順番です。まず原文の厳密な読み込みがあって、それからこなれた翻訳へ、という流れは、言語学者としての、そして翻訳家としての飯島さんの基本的姿勢を示しているように思われます。

ぼくが飯島さんに最後にお目にかかったのは、昨年〔2019年〕11月16日の日本チェコ協会/日本スロバキア協会主催の「ビロード革命30周年記念講演会」の席でした。そのときも飯島さんは、率先して講演会の企画と、メール連絡などの組織実務を担当され、ご自身も、いつもと変わらぬお元気な様子で、「ディシデントとしてのV・ハヴェルの言葉」という講演をなさいました。講演の合間の立ち話で飯島さんは、いまハシェクのことをまとめている、とおっしゃっていたように記憶します。ぼくは、本日お話ししますように、『チェコスロヴァキア日刊新聞』にハシェク関連の記事が掲載されていることに気づいていましたので、そのことをお伝えし、飯島さんも、それは面白いですね、と強い関心を示しておられました。

しかし心残りなことに、翻訳資料をお渡しするまえに、鬼籍に入られてしまいました。もっと早くにお渡しすべきだった、と内心忸怩たる思いですが、本日は遅まきながら、飯島さんにご報告するつもりで、話を進めていきたいと思います。

### （三）

まず、ハシェクについてのいくつかの事典項目をご紹介して、問題の所在を押さえておきましょう。

最初に取り上げるのは、『マサリク百科事典』、第3巻（プラハ、1927年）*Masarykův slovník naučný, III., Praha 1927*です。これは1925年から33年にかけて、プラハで出版された全7巻の当時の代表的百科事典です。項目は全文訳出しておきましたが、ご覧のように記述はごく短いものです。

ハシェク、ヤロスラフ（1883年4月24日、プラハー1923年1月2日、リプニツェ）

チェコの作家でジャーナリスト、天才的なユーモア作家で自己韜晦家。著作——『人がタトリに陥ったとき』（1912年）、『外国人ガイドブックとその他の風刺小説』（1913年）、『テンクラート氏の心労』（1912年）、『三人の男とサメ』（1922年）など。ハシェクは善良な兵士シュヴェイクの形象によって不滅の名声を獲得したが、シュヴェイクは際限のないお喋り、永遠の楽観主義者であり、確固とし



た禁欲主義者である。『世界大戦での善良な兵士シュヴェイクの運命』（1921年以降）は、人気のために演劇化され映画化されて、その人気はカレル・ヴァニェクの文学的続編を余儀なくさせた。ハシェクはルーシ〔ロシア〕の軍団で、『チェコスラヴ人』の編集部にいた。A・ドレンスキーの編集で、1923年以來ハシェク選集が出版されている。文献——Fr.〔フランチシェク〕・サウエルとイヴァン・スク『思い出に（イン・メモリアム）』（1924年）

まず、「天才的なユーモア作家で自己韜晦家」という規定に注目してください。すでに1920年代当時から、「天才的なユーモア作家」という評価が確立していたようです。「自己韜晦家」という見慣れない語は、原文は *mystifikátor* で、おそらく「自分自身を神秘化する人」、あるいはちょっと俗っぽく言えば、「他人を煙に巻く人」という意味でしょう。次に「ハシェクは善良な兵士シュヴェイクの形象によって不滅の名声を獲得したが、シュヴェイクは際限のないお喋り、永遠の樂觀主義者であり、確固とした禁欲主義者である」という性格付けがありますが、百科事典風でない「文学的表現」が面白いと思います。最後に、「ハシェクはルーシ〔ロシア〕の軍団で、『チェコスラヴ人』の編集部にいた」と述べていますが、ここでは後に、彼が軍団から離脱して、ボリシェヴィキ側に移行した事実について沈黙している点に、注意をうながしておきたいと思います。

次の項目は、1983年にモスクワで出版された『ソ連邦における内戦と軍事干渉、百科事典』Гражданская война и военная интервенция в СССР. Энциклопедия. Москва, 1983から取りました。いまさらソビエト時代の出版物を持ち出すなんて、と眉をひそめる向きもあるかもしれませんが、ある時代の歴史の証言として耳を傾けてみましょう。これも全訳です。

ガーシェク〔ハシェク〕、ヤロスラフ（1883—1923年）

チェコスロヴァキアの国際主義者、作家。教師の家庭出身。商業学校修了。1915年からオーストリア＝ハンガリー軍、ロシア軍に投降して捕虜になる。チェコ・ブルジョア層によって形成されたチェコ志願従士団に入隊（1916年）。1918年2月に左派社会民主党に組して、ロシア共産党（ボリシェヴィキ派）チェコスロヴァキア・グループを創設。1918年春に、ドイツ干涉軍に対して戦ったコミュニスト国際主義者支隊、のちにサマーラで赤軍チェコスロヴァキア人部隊の形成を主導した。1918年10月以來、〔赤軍〕第五軍。国際主義者部門を指導して、軍の政治部の国際主義部門の長だった。一連の国際主義新聞を編集して、シベリアの前線新聞と民間新聞に記事を執筆し、ウラルとシベリアの領土で元軍事捕虜

のあいだで活動を行なった。1920年からチェコスロヴァキアに戻り、ソビエト・ロシアを擁護した。小説『世界大戦期の勇敢な兵士シュヴェイクの冒険』（1921-23年）の作者。

この事典では、「チェコスロヴァキアの国際主義者」という規定が冒頭に来ています。この「国際主義者」интернационалист という、いまでは古めかしい響きのある用語は、「ソ連以外の国で生まれたが、ソ連のイデオロギーや国益に奉仕した人」ほどの意味だと思っておいてください。そのあと「チェコ・ブルジョア層によって形成されたチェコ志願従士団に入隊」からはじまって、「1918年春に…… коммуニスト国際主義者支隊、のちにサマーラで赤軍チェコスロヴァキア人部隊の形成を主導した」以下、もっぱらハシェクがボリシェヴィキ派に移行してからの経歴が列挙されて、最後に付け足しのように、「『世界大戦期の勇敢な兵士シュヴェイクの冒険』（1921-23年）の作者」が添えられています。「ソビエト・ロシアを擁護した」という思わせぶりの決まり文句が、具体的になにを意味しているのかも気になるところです。

最後に『集英社 世界文学事典』（2002年）の「ハシェク」の項目を見てみましょう。この項目は飯島さんがお書きになっています。本日の話に関係する個所だけ抜粋しました。全体の三分の一ほどです。

ハシェク ヤロスラフ Jaroslav Hašek 1883. 4. 30-1923. 1. 3

〔省略〕 やがて第一次世界大戦が勃発、ハシェクの運命は急転回する。〔19〕15年にはオーストリア軍に徴兵され、ロシアと戦うために東部戦線に配置されたが脱走してロシア軍に投降、有名なチェコスロヴァキア軍団に参加。ロシア革命が起こったのちは、軍団と敵対する赤軍に転じ、国際的宣伝活動に活躍、第5軍団の共産党政治委員にまでなり、酒も断ち精励恪勤した。しかし止むことない風刺のため、周辺に敵も多くなり、ついに本国での革命に参加するという名目で、ロシア人妻のシュエラを連れひそかに帰国。だがチェコではすでに T. G. マサリクによる民主政治が確立され、共産主義革命の余地はなく、ハシェクは反逆と重婚の罪で告発され、失意のあまり、また無頼の生活に戻った。そのどん底で書き始めた『世界大戦中のよき兵士シュヴェイクの運命』（1921-23、通称『兵士シュヴェイクの冒険』）が当たりし、作者の名を不朽にした。この作品の執筆中、ハシェクはプラハを離れて東チェコの寒村リプニツェに住みついたが、不摂生の故か健康を害し、大作も未完のまま、不時の死を迎えた。〔省略〕

以上の三つの百科事典項目の記述を比較してみるだけでも、ハシェクが「謎めいた」、

きわめて「コントラヴァーシャルな」人物であることが、お分かりいただけるかと思  
います。

(四)

さてここで、『チェコスロヴァキア日刊新聞』のほうに話の重心を移しましょう。

【図】は、以下で触れるエッセイ「談話室：『パイオニア』たち」が掲載された号の  
タイトル部分です。最上段のデータは「44号、ペンザ、土曜日、1918年4月6日、  
価格20コペイカ」。次に新聞名のČeskoslovenský denníkですが、「チェコスロヴァキ  
アの」という名称は、今日の我々にとってはごく一般的なものに響きますが、この新  
聞が創刊された1918年当時は、「新鮮な響きを持った新造語、将来に向けたパースペ  
クティブを示す概念」であったことを、強調しておきたいと思います。その下に対応  
するロシア語のサブタイトルが添えられています（旧字体のiが使われています）。  
その下の、上下の横線で囲われた部分には、「チェコスロヴァキア国民会議と在ルーシ・  
チェコスロヴァキア諸団体連合事務局機関紙」とあります。

『日刊新聞』は1917年12月から1920年7月まで、旧帝政ロシア各地（キエフ→ペ  
ンザ→オムスク→チェリヤビンスク→オムスク→エカチェリンブルク→イルクーツク  
→満洲里→ハイラル→ハルビン→ウラジヴォストーク）で刊行されたチェコスロヴァ  
キア軍団の機関紙です。軍団の機関紙と言っても、軍事司令部に対して相対的に独立



【図】

した編集部（おもに一群のチェコ人知識人の集団）の手で編集・刊行されました。通し番号によると、全部で717号出ています。使用言語は大部分がチェコ語で、ときおりスロヴァキア語も用いられ、とくに初期にはロシア語の記事も散見されます。読者として想定されていたのは、ロシア・シベリア・極東地域に駐留していた軍団兵士（チェコ人とスロヴァキア人）にほぼ限定されます。ロシアの軍団兵士は最大に見積もっておよそ6-7万人、『日刊新聞』の発行部数は、最盛時で一号につき約7000-8000部でした。

この新聞は1918-20年のロシア内戦、チェコスロヴァキア軍団の武装出動、日本のシベリア出兵などに関する同時代の出来事についての貴重な証言を、豊富に提供していますが<sup>3</sup>、本論で取り上げるハシエク関係の記事は、チェコ人 коммуニスト集団に対する論争的な文脈のなかで登場します。

ハシエクに触れた記事としては、さしあたり次の12編が確認されています（カッコ内のデータは、掲載年月日、通し番号、発行地）。――

1. 破壊活動 Podkopná práce (1918年4月5日、43号、ペンザ)
2. 談話室：『パイオニア』たち Beseda: „Průkopníci.” (1918年4月6日、44号、ペンザ)
3. 「将校のシヴィホフスキー」とその一味 „Oficír Švihovský” a jeho komanda (1918年4月8日、45号、ペンザ)
4. サマーラでの集会（私信から） Schůze v Samaře. (Ze soukromého dopisu.) (1918年4月18日、54号、ペンザ)<sup>4</sup>
5. マスコミの声 Hlasy tisku (1918年4月18日、54号、ペンザ)<sup>5</sup>
6. ロシア革命の展開に寄せて K vývoji ruské revoluce (1918年4月25日、59号、ズラトウースト)<sup>6</sup>
7. 公報：チェコスロヴァキア軍野戦法廷 Úřední věstník: Polní soud Československého vojska (1918年7月27日、135号、オムスク)
8. 昔の文書から Ze starých dokumentů (1918年7月31日、138号、オムスク)<sup>7</sup>
9. 「我々」、我々について語る „Naši” o nás (1918年8月8日、145号、オムスク)<sup>8</sup>
10. 封印列車 Zaplombované vagony (1918年11月5日、221号、エカチェリンブルク)<sup>9</sup>
11. 諸々 Všelicos (1918年11月5日、221号、エカチェリンブルク)<sup>10</sup>
12. マジャール人とチェコ人 коммуニストたちの運命 Osud maďarských a českých komunistů (1919年2月9日、34号(301号)、エカチェリンブルク)<sup>11</sup>

さしあたり注目していただきたいのは、大部分の記事が1918年の号に掲載され、とくに半数が同年4月に集中していることです。この事情は、伝記作家グスタフ・ヤノーホが『ハシェクの生涯——「善良な兵士シュベイク」の父』のなかで書いているように、「彼〔ハシェク〕は1918年4月になって初めてチェコ民族会議〔チェコスロヴァキア国民会議〕ロシア支部に手紙を出し、すでに実行された戦線転向を通告した」<sup>12</sup> ことに関係しているのかもしれません。

#### (五)

それではいくつかの記事の内容を見てみましょう。1.の「破壊活動」（筆者はおそらく、2.の「談話室：『パイオニア』たち」と同じルドルフ・メデク）は、ポレミックな性格を持った長文の記事で、1918年4月5日にペンザで刊行された号に掲載されました。まず発表された時期に注目してください。1918年3月3日のドイツとソビエト・ロシアのあいだのブレスト＝リトフスク講和条約締結の後ですが、しかし同年5月末の軍団の武装出動（ふつうは「反乱」あるいは「蜂起」などと呼ばれますが、ぼくは原語の *vystoupení* に従って、こう訳しています）以前の時期で、軍団とソビエト政府の関係は緊張を含みつつも、敵対関係にあったわけではなく、3月26日には両者のあいだで、いわゆるペンザ協定が結ばれて、ソビエト政府は、武器の引き渡しを条件として、軍団のウラジヴォストークへの移動支援を約束しています（軍団はウラジヴォストークに到着したあと、船でヨーロッパに移動し、フランスの西部戦線で、ドイツおよびオーストリア＝ハンガリーとの戦闘を継続する予定でした）。とはいえこの時期に、軍団からボリシェヴィキ側に移行した一群のチェコ人 коммуニスト・グループ（ハシェクもそれに含まれます）は、『パイオニア』 *Průkopník* という機関紙を発行して、軍団兵士たちにボリシェヴィキ側への移行を呼びかける宣伝工作（軍団側と言わせれば「破壊活動」）を開始しています。

「破壊活動」の一部を読んでみましょう。

……それ〔チェコスロヴァキア国民会議指導部への攻撃〕に加わったのが、『革命』紙と『チェコスラヴ人』紙の元編集者である二人の善良な助手——ヤロスラフ・ハシェクとB・フラである。ハシェクは、以前に自分が温もっていた古巣を侮辱する、というくせを持っている。こうしてまだ〔チェコ〕国内で、『チェコの言葉』紙〔国民社会党の機関紙〕と決別したとき、すぐさま『人民の権利』紙〔社会民主党の機関紙〕に、国民社会党の舞台裏からのセンセーショナルな内輪話を書きはじめた。それを当地でもやった。いまではわが軍〔チェコスロヴァキア軍団〕から逃亡して、わが軍とそれに関係するすべてを貶めている。ボリシェヴィキ派の台所を間近に覗いたら、彼らについていかに書くことになるかも、我々

は想像できる。ポリシェヴィキ派について、もうひとつのハシエク物を書くこと  
だろう！

2. の「談話室：『パイオニア』たち」は、全編がハシエクを対象（というか標的）  
にした長文の論争的エッセイで、筆者は軍団の指導的幹部の一人ルドルフ・メデクで  
す。彼は коммуニストの機関紙『パイオニア』を論評しつつ、こう書いています。

……その先でのちょっとした驚きは、ヤロスラフ・ハシエクという不滅の名前  
と、最後にそれに劣らぬ驚きはB・フラだ。ぼく〔メデク〕は心のなかでヤロス  
ラフ・ハシエクの、いつもおずおずとした顔の表情と、臆病そうなアルコール中  
毒気味の目つきを思い浮かべる。その目にはときおり、優れたユーモア作家の、  
ある種の非凡な才能の火花がきらめくが、別のときには君たちの前で、羞恥心と  
定期市風の厚顔さの意識的感覚とともに、ためらいがちに伏せられる。ぼくには  
分かっている。——ヤロスラフ・ハシエクはしばらく経つとこれらすべてを、す  
でにプラハ時代と、かつての〔キエフのチェコスロヴァキア諸団体〕連合におけ  
る彼の「勇敢な」活動から分かっているように、口元に罪のない微笑みを浮かべ  
て、腕白小僧の無節操な無関心を持って撤回するのだ。彼が『パイオニア』紙に  
寄稿していることは、この新聞になにか独特な性格を付与している。『動物世界』、  
『チェコの言葉』紙、『人民の権利』紙の元編集者の善良な兵士シュヴェイクは、  
真面目さを装っているけれど、ユーモア文学の癖はそんなに簡単に直るものでは  
ない。

真面目さを装おうとすると、それだけ疑わしく、それだけいっそう笑いを引き  
起こす！ ……

ぼくには君が気の毒だ、ヤロスラフ・ハシエクよ、だって白状しなければなら  
ないが、ぼくは十把一絡げに君を非難した人々には組みしなかったし、何度か君  
に、冒険的な誇大妄想の挑発と、軽率で無責任な気まぐれに対して警告した。ぼ  
くにはチェコ人作家の名前が惜しくて、おそらく恥に対するある種の階層的危惧  
を持っていたのだ。しかし今日目にしているのは、これが君の運命であること、  
君の無定型な心と無節操で無関心な人間性の、悲しむべき運命であることだ。君  
の道化の小太鼓は、この戦争〔第一次世界大戦〕についての憂鬱な事柄を見つけ  
たが、それは、我々の運動を損ない、内と外から笑いものにする、君のきわめて  
忌まわしいユーモア話だ。君がこの文章を読んだら、羞恥心の最後の一片のため  
に、赤面するのは分かっているが、なぜなら君は、年老いた売春婦上がりと同じ  
ようにセンチメンタルで、ぼくが君に何度も、偽りと卑劣さに対して警告したこ  
とを知っているからだ。——でも君は悔い改めないだろう。もっともきつと撤回

して、一時的には悔悟するだろうが、しかしその後も、笑いものにするという、自分の職業的な仕事を続けることだろう。ぼくたちを、ぼくたちの軍隊を、チェコの作家層を、自分の民族を笑いものにして、じきに自分の新たな「ユーモア的共産主義者」も笑いものにするようになるだろう。ぼくは「予言者のまなざしで」君の一派を見ている。……

こうしたいっさいは、だれかれが国民会議のメンバーになれなかったからか、素朴さと無能力、あるいは悪意のために、仕事から排除されたからにすぎない。彼らのポケットには、レーニン、トロツキー、マルクスから抜粋した安物のパンフレットの束、頭のなかは、『チェコスラヴ人』紙の最近の論説を支配していたような、完全な思想上の混乱か、あるいは文学的・哲学的堅苦しきだ。ぼくは、政治的に成熟したわが軍兵士が、こんなものにひっかかって、この仮面舞踏会を信用するとは信じていない。……

引用した部分のトーンからお分りのように、これはレトリックを駆使して論敵を「論破し」、「笑いものにする」ことを目的とした、「党派闘争的」性格を持った文章です。言うまでもありませんが、この文章だけで、「そのとおりだ、勝負あった」と判断するわけにはいきません。反対側の「言い分」にも耳を傾ける必要があるからです。ここでさしあたり確認しておきたいのは、1918年4月段階で、ハシェクの名前が軍団関係者のあいだで広く知られていたこと、その彼が「共産主義者」の側に移行して、軍団に対抗する言説を展開したことに対する「失望」と「裏切られたという気持ち」が滲み出ていること、その後はいわゆる「個人攻撃」の部類の言説が続くことです。メデクとハシェクはたがいに面識があったようで、それだけいっそう「こっけいな痛ましさ」というか、「痛ましいこっけいさ」が感じられます。

## (六)

このあと1918年5月末にチェコスロヴァキア軍団は、ウラル地方のチェリャビンスクでの兵士集会によって、ソビエト政府と対決することになっても、ウラジヴォストークへの道のりを自力で切り開くという、「武装出動」路線を決定して、じきにソビエト政府と交戦状態に入ります。したがってチェコ人共産主義者集団とも明確な敵対関係になり、事態は冗談事ではすまされない深刻な様相を呈することになります。それを象徴するのが、1918年7月27日の号に掲載された「7. 公報：チェコスロヴァキア軍野戦法廷」でしょう。これはハシェクに対する軍団側からの逮捕令状です。

オムスク、1918年7月25日、203号、逮捕令状

チェコスロヴァキア軍野戦法廷は原告の申し立てによって、ヤロスラフ・ハシェ

クに対する逮捕令状を出す。ハシェクはプラハの『ユーモア新聞』の元編集者、ヤン・フス第一チェコスロヴァキア連隊の元志願兵、キエフの『チェコスラヴ人』の編集者、モスクワの社会民主コミュニスト党の新聞『松明』の編集者、サマーラにおけるチェコスロヴァキア赤軍の組織者で、チェコスロヴァキア民族に対する度重なる祖国反逆罪の咎で告訴された。

チェコスロヴァキア革命運動の全メンバーは、いつどこであれヤロスラフ・ハシェクを逮捕して、厳重な監視のもとにチェコスロヴァキア軍野戦法廷に連行するように、厳命される（チェコスロヴァキア国民会議支部付属の拠点）。

野戦法廷首席裁判官アイゼンベルゲル、審問官ヘス

読んでいるだけでも怖くなるような「峻厳な」トーンの記事です。

さてこの後、軍団の方はウラル戦線でポリシェヴィキ派との戦闘を続け、1918年10月末には本国でのチェコスロヴァキア国家成立によって、「戦闘目的」は達成されますが、連合国との関係と本国政府の思惑で、シベリア現地に留まることを余儀なくされます。1918年11月にクーデターによって成立したコルチャーク提督の率いるオムスク政府との関係も緊張含みで、軍団は1919年1月に前線から撤退して、後方のシベリア幹線鉄道沿いの警備任務にまわります。その間に連合国との交渉の結果、段階的に祖国への帰還輸送が開始されます。1919年末にはコルチャーク体制の急激な崩壊によって、東方への撤収を余儀なくされますが、結果的には1920年9月までに、全部でおよそ36の輸送団を組んで、ウラジヴォストークから出港し、多くは東シナ海、インド洋、スエズ運河を経由して、一部は北米大陸を横断して、同年末までに軍団の大部分は無事に帰国して、「凱旋者」として熱烈に歓迎されます。チェコスロヴァキア政府は帰国する軍団兵士のために、国家機関での一定のポストを確保するなど、優遇策を取っています。

いっぽうハシェクの方は、1918年10月にソビエト第五軍に正式に参加して、赤軍の組織活動や、国際主義者のあいだでの情報宣伝活動に携わり、1919年末にはじまる赤軍第五軍の東方進出の際には（軍団はこのために東方撤退を余儀なくされるのですが）、軍隊とともにイルクーツクまで進出します。そして1920年11月に「モスクワにあるチェコ・スロヴァキア共産党宣伝本部の要請により、本国での共産党の革命運動強化のため」（『不埒な人たち ハシェク短編集』、358頁）、エストニア経由でロシアを出国して、同年12月にはプラハに姿を現します。

つい先ごろまでロシア内戦の戦場で、敵対する陣営に属していた両者が、それも相手のことをよく知っていた両者が、結局同じ時期に、祖国（チェコスロヴァキア共和国）に戻ったこととなります。



(七)

ぼくは今回、ハシェクが帰国してから発表した、ロシア滞在期に取材した作品群を、新たな視点で読んでみました。『兵士シュヴェイクの冒険』第四巻(岩波文庫、1974年)に収められた「捕虜になった兵士シュヴェイク」と、「付録」中の「サラートへの手紙」、「ヤルミラとリーシャへの手紙」、「記念日の回想」、「靴の埃を打ち払い」が、『不埒な人々』に収録されたものでは、「わたしの死亡記事の書き手とわたしはどのようにして逢ったか」と「神さまについての話」などです。とくに「靴の埃を打ち払い」は、エストニア経由でロシアを出国した顛末を、ユーモアたっぷりに描いています。ハシェクは意気軒昂であるように見え、ユーモアと風刺の筆の冴えもあいかわらずです。しかもこれを、帰国そうそうに国内で実名で発表しているのですから、懲りていない、というか、あつけらん、というか、図太い確信犯なのか。彼がチェコスロヴァキアに入国した際に、軍団が出した逮捕令状は適用されなかったのでしょうか(誤解がないように付け加えておきますと、ぼくは逮捕令状が適用されるべきだった、などと言いたい訳ではありません)<sup>13</sup>。

戸惑うことばかりですが、飯島さんに『日刊新聞』のこれらの記事をお見せして、逮捕令状のことなどもお聞きしていたら、どのような返事が返ってきたでしょうか。その内容はいまでは想像するほかないのですが、手がかりになるようなことを書き残していらっしやいます。

たとえば『不埒な人々』の「訳者解説」には、次のような文章があります。——「[ハシェクは] ロシア二月革命後は、左翼的傾向を一層強め、ロシア革命軍(すなわち赤軍)と対立する軍団の主流派に反抗し、モスクワに移ってロシア共産党に参加する。サマラでの事件後は、チェコ本国に対する反逆罪の宣告を受けた。……ロシア革命の混乱期に、赤軍と交戦しながらロシアを西から東へ文字通り横断して行った軍団の動きは、ソヴィエト連邦政府にとってあまりにも大きな障害であり、同時に、祖国に忠誠を尽くす軍団を裏切ったハシェクの行為は、まさに大逆罪に値した」(259頁)

ごらんのように飯島さんは、ハシェクの側にびったりと寄り添って、彼の行動を賞賛したり、あるいは弁明したりするような立場は取っておられません。かといっておそらく軍団側からの「ハシェク批判」を、そのまま受け入れることもなさらなかったのではないかと。「そうですか。こんな見方もあるんですね。ハシェクは複雑な人でしたからねえ……」と、ちょっと困ったような表情で、額を拭われる飯島さんのお姿が目につくような気がします。

ぼくは今回のシンポジウムの予告のチラシに、「政治的正当性と文学の力」の狭間、などと勇ましいことを書いてしまいましたが、こんなことをむきになって話し出すと、『不埒な人々』に収録された「読書家の仲間になって」という短編で、ハシェクにおちよくられているペダンチックな「読書家の仲間」になってしまいそうで、氣勢を

削がれます。

ハシエクの『兵士シュヴェイクの冒険』はおそらく今後も、ユーモアと風刺小説の傑作として読み継がれていくでしょう。いっぽう 1989 年以降のチェコとスロヴァキアの歴史学では、シベリアでの軍団の活動を、チェコスロヴァキア建国に直接につながる「歴史の主流」とする記述を進めていくでしょう。両者を無理に交わせることはないのかもしれない、をさしあたっての話の結論とすることにしたなら、飯島さんはなんとおっしゃられるでしょうか……。

最後にいまいちど、飯島さんの安らかなご冥福をお祈りして、このつたない報告を終わりたいと思います。ご清聴、どうもありがとうございました。

### 【追記】

12 月 5 日のシンポジウム終了直後に、『不埒な人たち ハシエク短編集』（平凡社ライブラリー、2020 年）が刊行されたので、さっそく手に取った。2002 年の同名の翻訳の増補改題版で、旧版に収録されていなかった「古い薬種店の話」と「ブグリマ市の司令官」の二編が追加されている。

とくにロシア内戦での体験に題材したと思われる後者は、ひじょうに注目すべき作品である。赤軍の側に立ってロシア内戦に参加したハシエクが、「権力」を行使する側に立たされたときの「微妙な」立ち位置が、「自己韜晦」した筆致で、巧みに描き出されている。

飯島さんは、この本に収録された「平凡社ライブラリー版 編訳者あとがき」（「2020 年 3 月」の日付が打たれている）<sup>14</sup> で、この作品には「全体的にある種の緊張感が漂い」、「戦局の不安定、上層部からの無理な命令、軍内部でのいざこざなど、命をかけた革命の厳しさを体感したハシエクにとって、新しい心境が与えられたのかもしれない」（375 頁）と書かれている。

本来「笑える」性格のものではない「血なまぐさい」話題を、一片の「ユーモア」短編に仕立て上げる腕には、やはり舌を巻かせられるが、この作品でのハシエクの「自画像」は、おそらく「こうあるべきだった」、「こうだったらよかった」という思いで、修正・潤色されているのではないか。

「編訳者あとがき」には、「『ブグリマ市の司令官』は 1921 年 1 月から 2 月にかけて『トリブナ』誌に発表された」（373 頁）とある。とするとこの作品は、ハシエクの帰国直後に、チェコ国内で実名で発表されたことになる。同じくシベリアから帰国したばかりの軍団兵士たちが、この作品を読んだら、いったいどんな反応を示しただろうか。「祖国反逆者」を野放しにして、あまつさえ作品の発表を許すとは、いかななものか、と息巻いたのか、それとも赤軍のなかでも「ヒューマンな」姿勢を保っているように見え、「恐るべき現実」をユーモアと風刺で描き出すハシエクの筆力に圧倒さ

れて、黙り込んだのか……。

ちなみに飯島さんはこの「編訳者あとがき」に、ひじょうに気になることを書いておられる。ハシエクがロシア滞在中に、ボリシェヴィキ派の出版物に発表したという「日本からのぼやき」という記事のことである<sup>15</sup>。ハシエクが言及している英字紙『Japan Advertor』は、まちがいでなく『The Japan Advertiser』のことで、『日刊新聞』は日本関係の情報源として、この新聞からしばしば引用している。ちなみに同紙は「ミカドの宮廷から発刊されている」のではなく、この時期東京で、アメリカ人経営者B・W・フライシャーが出版していたクオリティ・ペーパーだった。『ニシ・ニチ』はおそらく『ニチ・ニチ』のことで『東京日日新聞』をさし、「オータニ・キクゾウ」は言うまでもなく、日本の浦塩派遣軍司令官で、一時は全連合軍の総司令官も務めた大谷喜久蔵のことだろう。

つまりハシエクの「日本のぼやき」という一文からは、『日刊新聞』に掲載された記事を参考にして書き上げたのではないかと、という印象を強く受けるのである。ところが訝しいことに、さしあたり『日刊新聞』で、これらの記述に対応するような記事は見つかっていない。

もう一点。本文中で飯島さんが、「オオカミに餌をやらなければ、絶えず森の中をねらうものだ」(349, 354頁)と訳されているロシアの諺は、Как волка ни корми, он всё в лес смотрит (オオカミはどんなに飼いならそうとしても、どうしても森のほうを見るものだ=人の本性は変わらないものだ)で、つまり「アガポフ同志」はチェコ人であるハシエクに対して、「革命」の側に立っているように見えても、しょせん「反革命」の軍団の同類ではないのか、と脅しをかけているのではないだろうか。

こんなことを飯島さんにお伝えしていたら、きっとほほえみながら、「ほう、そうですか、出典がわかると面白いですね」とか、「ああ、そうでしたか。わかりました。改版のときに直しておきましょう」とか、おっしゃってくださったと思う。まことに心残りなことに、その機会は失われてしまった。改めて飯島さんのご霊前に合掌する。

(2021年1月10日：追記)

## 注

- 1 「日本西スラヴ学研究会の歩み——創設から『西スラヴ学論集』第10号まで」『西スラヴ学論集』(2007年、第10号)に、1984年2月の第一回会合の後で、飯島周氏に参加を呼びかけた、という記述がある(163頁)。
- 2 本シンポジウム終了直後の2020年12月10日に、増補改題版『不埒な人たち ハシエク短編集』が、平凡社ライブラリーの一冊として出版された。この新版については、本論末

- の「追記」で触れる。
- 3 拙論『チェコスロヴァキア日刊新聞』は日本のシベリア出兵をどのように見ていたか、『ロシア史研究』（104号、2020年4月、167-180頁）を参照。
  - 4 サマーラでの集会（私信から）——1918年4月12日にサマーラのチェコ人コミュニストが主催した集会に参加した人物〔フェイゲルレ〕の批判的な印象記。——「それ〔集会〕を招集したのは、当地に到着した『パイオニア』紙の編集者ヤロスラフ・ハシエクだ。個人的にとってもよく知っていて、しばしば話したこともあるこのコミュニストの報告者〔ハシエク〕が、ぼくには気の毒だった。ぼくは彼が喋っている様子を観察した。正しくふるまっていないことを、完全に自覚した人間のような印象を受けた」
  - 5 マスコミの声——「サマーラの今月〔4月〕14日のソビエトの新聞に、Jar.〔ヤロスラフ〕・ハシエクの「チェコスロヴァキア人の兄弟たちへ」の呼びかけが掲載された。ハシエクはいささか混乱して、カチーリンを反革命派扱いして（彼はポリシェヴィキだった）、ゲルマンのハンニバルは共和国の門のそばにいる、と言っているが、それはもう盛り土のところにいる（ペトログラードから150露里）。しかしこの呼びかけのなかには理性的な文章もある。——「我々は知っているが、諸君たちのなかの何人かは、「フランスに行くことを望まない」というスローガンのもとで、自分のことだけに気を配り、そもそも軍事的・革命的勤務を避けようとしている。これは許されないことだ！」
  - 6 ロシア革命の展開に寄せて——ロシア革命、とくに労働運動の状況を、批判的に分析した論説。筆者はフランシシエク・リフテルと思われる。「……自分たちを労働運動の唯一の誤らない解説者と見なしている、ハシエクのユーモア＝コミュニスト協会のみならず、なおロシアの地でロシアの労働者層に、社会変革も発展の鉄の法則に従わなければならない、あらゆる性急さと無思慮に対しては、労働者層自身が高い代価を支払うことになる、納得させることになるだろう」
  - 7 昔の文書から——「サマーラの前「コミュニスト」である有名なヤロスラフ・ハシエクは、その昔チェコスロヴァキア軍に対して純粋にハシエク風の呼びかけを出した。そのなかでとくにこう述べている。——「我々は、祖国のすべてのチェコ人の考え方を熟知していて、彼らは全世界革命勝利のための闘争に赴く準備がある。それゆえ我々は宣言するが、チェコスロヴァキア国民会議の冒険に参加するすべてのチェコスロヴァキア人は、全世界革命の裏切り者であり、チェコ民族は、彼らが自由なチェコに帰国することを決して許さないだろう」
  - 8 「我々」、我々について語る——チェコ人コミュニストのヨゼフ・ポスピーシルが、1918年7月21日付けのペルミの『イズヴェスチヤ』紙に掲載した記事についての論評中での言及。——「ポスピーシルは我々が武装出動した初期に、我々に反対するハシエクの下劣な声明に署名した」
  - 9 封印列車——1918年11月の、本国での独立したチェコスロヴァキア国家成立直後の、軍団に対するソビエト政府の「切り崩し工作」に対する反論。ちなみに「封印列車」とは、1917年春の前例を念頭において、非武装の軍団兵をソビエト領内を通して帰国させる、というソビエト政府の提案を、皮肉を込めて表現している。この論説の筆者は、『日刊新聞』

の「論客」の一人だったヨゼフ・クデラ。——「ロシア・ソビエト政府の扇動事務所は、大規模な活動を展開している。そこでは大勢のチェコ人共産主義者も働いていて、彼らは生活上の危惧から、自分の脳髓と手を極端に緊張させて、わが民族とわが軍の解体に寄与し、そうすることで、祖国反逆罪に対する相応の処罰を逃れている。一部の情報が証言しているところでは、モスクワのポリシェヴィキ無線電信の編集と作成には、ヤロスラフ・ハシェクが大いに加担している」

- 10 諸々——「「善良な兵士シュヴェイク」〔ヤロスラフ・ハシェクを暗示〕は、いまモスクワのポリシェヴィキ情報事務所に陣取って、額に汗して無線電報を継ぎはぎしているが、我々〔チェコスロヴァキア軍団〕が最初にそれを傍受することを承知している。ハシェクの処方箋は周知のところだ。——一つか二つの朗報を取り上げて、そのなかにかくつかの、でっち上げたか、傾向的に色付けされた情報を放り込んで、そこから、わが隊列内にパニックを引き起こす目的を持った、本当のたわごとができあがる。それゆえ兄弟たちよ、モスクワからの無線電報には注意してくれ！」
- 11 マジャール人とチェコ人共産主義者たちの運命——「チェコ人共産主義者たちもウファ戦線から戻ってきて、彼らのなかには悪名高いヤロスラフ・ハシェクもいるが、彼はウファの新聞で、チェコスロヴァキアの名前の面汚しを続けていた」
- 12 G・ヤノーホ『ハシェクの生涯——「善良な兵士シュベイク」の父』（みすず書房、1970年、147頁）
- 13 講演後の質疑応答のなかで林忠行氏（京都女子大学）から、「この逮捕令状は、シベリアの軍団内部でしか効力を持たなかったのではないか」という指摘をいただいた。そうかもしれない。この点の解明は今後の課題としたい。
- 14 ぼくは本論の（二）で、「飯島さんは、いまハシェクのことをまとめている、とおっしゃっていた」と書いたが、ひょっとしたらこの「編訳者あとがき」のことだったのかもしれない。
- 15 ブルナ・ルカーシュ氏（実践女子大学准教授）に、この翻訳の原文 *Nárek z Japonska* を提供していただいた。記して感謝する。



【飯島周先生追悼文】

## 飯島周先生追悼

——飯島周先生のお人柄とお仕事——

石川達夫

チェコはヨーロッパの中心・中央 (střed/center) にある中欧 (střední Evropa/Central Europe) の国だが、外国語と言えは英語中心の日本でチェコ語をやっている人にはエクセントリック (výstřední/eccentric)、つまり中心から外れた人が多い。それで、時として奇矯な振る舞いをする人もいるようだ。

そういったチェコ関係者が少なくない中で、飯島先生は珍しく温厚な英国風紳士で、(学者の中では珍しく?) 誰に対しても分け隔てなく接する方だった。それは、先生がもともと英語を研究されていたことと関係があるかもしれない。

先生は、プラーク学派に属していた英語学者マテジウスとヴァヘクが書いた『機能言語学——一般言語学に基づく現代英語の機能的分析』という本も翻訳されている。先生は、プラーク学派の言語学、特にマテジウスに関心を抱いてチェコ語を始めたのだろう。aktuální členění větné (英: functional sentence perspective. いわゆるテーマとレーマの問題) に関心があったようだ。

ロシア語・ドイツ語・フランス語からチェコ語 (やポーランド語) に外れる人はいるが、飯島先生のように、元々英語を専門としていたのにチェコ語 (やポーランド語) に外れた人は非常に珍しい(飯島先生以外にはいないのではなからうか)。このことは、英語中心の日本にとってかなり特徴的なことであるし、飯島先生の稀有さを示すことでもある。

英語から外れてチェコ語・チェコ文化に「のめり込んだ」飯島先生は、翻訳の仕事がお好きで、ほぼ恒常的に翻訳をされ、多くの訳書を世に出された。下記のように、1970年(先生は1930年生まれなので、40歳の時)に最初の訳書を出され、それから2000年に70歳で跡見学園女子大学を定年退職されるまでの30年間に21冊、その後更に90歳でお亡くなりになるまでの約20年間に9冊、計30冊の訳書(共訳含む。後から文庫などとして再版されたものや、アンソロジーの中のもの除く)を出され、更に晩年に1冊の著書を出された。

1. アントニーン・リーム『三つの世代』みすず書房、1970年。
2. ヴィレーム・マテジウス、ジョセフ・ヴァヘク編『機能言語学——一般言語学

- に基づく現代英語の機能的分析』桐原書店、1981年。
3. F・R・パーマー『英語の法助動詞』桐原書店、1984年。
  4. ヤロスラフ・サイフェルト『詩集 ヴィーナスの腕』桐原書店、1986年。
  5. 同『マミンカ おかあさん』恒文社、1989年。
  6. バーツラフ・ハヴェル（千野栄一、飯島周編訳）『ビロード革命のころ——チェコスロバキア大統領は訴える』岩波書店、1990年。
  7. 同（飯島周、石川達夫、関根日出男共訳）『反政治のすすめ』恒文社、1991年。
  8. J・プラットほか『新英語の実相』松柏社、1991年。
  9. カレル・チャペック『いろいろな人たち——チャペック・エッセイ集』平凡社ライブラリー、1995年。
  10. 同『ホルドゥバル』（チャペック小説選集第3巻）成文社、1995年。
  11. ヴァーツラフ・ハヴェル『プラハ獄中記——妻オルガへの手紙』恒文社、1995年。
  12. カレル・チャペック『イギリスだより』（カレル・チャペック・エッセイ選集2）恒文社、1996年。
  13. 同『犬と猫』（カレル・チャペック・エッセイ選集3）恒文社、1996年。
  14. 同『流れ星』（チャペック小説選集第4巻）成文社、1996年。
  15. 同『未来からの手紙——チャペック・エッセイ集』平凡社、1996年。
  16. 同『チェコスロヴァキアめぐり』（カレル・チャペック・エッセイ選集1）恒文社、1996年。
  17. 同『園芸家の一年』（カレル・チャペック・エッセイ選集4）恒文社、1997年。
  18. 同『スペイン旅行記』（カレル・チャペック・エッセイ選集5）恒文社、1997年。
  19. 同『新聞・映画・芝居をつくる』（カレル・チャペック・エッセイ選集6）恒文社、1997年。
  20. 同『平凡な人生』（チャペック小説選集第5巻）成文社、1997年。
  21. ヤロスラフ・サイフェルト（飯島周、関根日出男共訳）『この世の美しきものすべて』恒文社、1998年。
  22. ヨゼフ・チャペック『人造人間——ヨゼフ・チャペック・エッセイ集』平凡社、2000年。
  23. ヤロスラフ・ハシエク『不埒な人たち——ハシエク風刺短編集』平凡社、2002年。
  24. ヨゼフ・ラダ絵、イジー・ジャーチェク文『どうぶつだいすき』平凡社、2005年。
  25. カレル・チャペック『こまった人たち——チャペック小品集』平凡社ライブラリー、2005年。
  26. 同『北欧の旅』（カレル・チャペック旅行記コレクション）ちくま文庫、2009年。
  27. 同『絶対製造工場』平凡社ライブラリー、2010年。
  28. 同『オランダ絵図』（カレル・チャペック旅行記コレクション）ちくま文庫、



2010年。

29. ボフミル・フラバル『嚴重に監視された列車』（フラバル・コレクション）松籟社、2012年。
30. 飯島周『カレル・チャペック——小さな国の大きな作家』平凡社新書、2015年。
31. ヨゼフ・チャペック『ヨゼフ・チャペック・エッセイ集』平凡社ライブラリー、2018年。

このように、飯島先生の訳業にはカレル・チャペックの作品、中でもエッセイ（旅行記含む）の翻訳が多い。

カレル・チャペックの作品は、日本では『ロボット』（1920年）が既に1924年に邦訳されて以来、戯曲・小説（中でもSF的なものと推理小説的なもの）の翻訳はかなりたくさん行われてきた。しかし、SF的な性格を持つ『ロボット』や『山椒魚戦争』など、同じ作品が何度も翻訳される一方で、全く翻訳されない作品も少なくなかった。その穴を埋めていったのが、一つには成文社から出た『チャペック小説選集』全6巻、それから恒文社から出た『カレル・チャペック・エッセイ選集』全6巻だった。

その後、『カレル・チャペック・エッセイ選集』は文庫化され、更に平凡社ライブラリーとちくま文庫で飯島訳のエッセイ集が次々と出た。ちなみに、戯曲については、田才益夫が『チャペック戯曲全集』（八月舎、2006年）でチャペックの戯曲を全部翻訳した。こうして、カレル・チャペックの作品は、ほぼすべてが日本語に訳された。

新聞社に勤めるジャーナリストであったカレル・チャペックは、折に触れて記事・エッセイを書き続けて、非常にたくさんのエッセイを残した。チェコで出たカレル・チャペック全集全24巻のうち、（旅行記も含めて）エッセイは11巻にも及ぶ（しかもページ数が多く、著作の約半分になる）。飯島先生は、特にこの分野で集中的に翻訳の仕事をしたのである。先生はカレル・チャペックの作品の翻訳を全部で15冊出されたが、そのうち11冊がエッセイである。恒文社のほか、平凡社（ライブラリー）と筑摩書房（文庫）が出した。

チャペック以外の翻訳で主なものとしては、ヤロスラフ・サイフェルトがノーベル文学賞を受賞した後、詩集『ヴィーナスの腕』を翻訳された。この本には、飯島先生と同じ高校（現在の長野高校）出身の有名な画家・作家、池田満寿夫が表紙の絵を描いている。そのほか、詩集『マミンカ おかあさん』、回想録『この世の美しきものすべて』も翻訳された。

そのほか、ビロード革命でヴァーツラフ・ハヴェルが大統領になった後、ハヴェルの著作『ビロード革命のこころ』、『反政治のすすめ』、『プラハ獄中記』を翻訳された。ちなみに、飯島先生の訳書を多く出した恒文社は、かつて東欧文学の翻訳をたくさん出していたが、その活動を停止した。京都の松籟社が東欧文学の訳書を出すようになっ

てから、先生はボフミル・フラバルの『嚴重に監視された列車』も翻訳された。

それから、忘れてはならないのが、カレル・チャペックの兄で、画家・作家・詩人であったヨゼフ・チャペックの作品の翻訳で、『人造人間——ヨゼフ・チャペック・エッセイ集』と『ヨゼフ・チャペック・エッセイ集』を、共に平凡社から出された。特に後者は、ナチスの強制収容所で死亡したヨゼフ・チャペック（死亡年不明）が、強制収容所の中で家族（妻と娘）に宛てて書いた非常に印象的な文章や詩を含んでいる。日本では子供向けの絵本作家として、あるいは（チェコ文化にある程度詳しい者にも）画家としてしか知られていなかったヨゼフ・チャペックの知られざる作家・詩人としての面を紹介した点で、重要なものである。同じ2018年には、チェコ・センターや日本の美術館でかなり大きなチャペック兄弟展が開催され、ヨゼフ・チャペックについて日本でもより詳しく知られるようになった。この『ヨゼフ・チャペック・エッセイ集』が、飯島先生の最後のお仕事（2018年、88歳）となった。

それから、その前に出された著書『カレル・チャペック——小さな国の大きな作家』（2015年、85歳）は、こぶりな新書ながら、一般の人にも読みやすいカレル・チャペックの評伝であり、チャペックの全体的な相貌を紹介した好著である。世界的に見ても、カレル・チャペックの翻訳は非常に多いが、チャペックについての本は少ない中で、飯島先生のこのご著書は、千野栄一先生の『ポケットのなかのチャペック』（1975年）以来、実に40年ぶりに日本で出されたチャペックについての本である。千野先生の本は、折に触れて新聞・雑誌などに寄稿したチャペックについてのエッセイを集めたものなので、日本語で書かれたチャペックの評伝は、飯島先生の本が初めてと言える。

このように、飯島先生は、2000年に70歳で定年退職された後も、自由な時間を謳歌するように、熱心に仕事や活動を続けられた。定年退職後は、故郷の長野県に別荘を購入されて、そこに本を持ち込んで仕事をされていたようだ。今の「ワーケーション」の走りのようなものと言えようか。

先生は高齢になられてもお元気で、他の高齢の先生方がほとんど隠居生活をされているケースが多い中で、会長を務められた当学会や、最期まで長く会長を務められた日チェコ協会や、チェコ大使館の催しにも熱心に参加されていた。そして2009年には、チェコ文化普及の功績によりチェコ共和国の功労賞を受賞された。

今では「人生百年時代」と言われ、生涯仕事を続けることが推奨されているが、それについても先生は先行されていたようだ。残念ながら、百歳ではなく90歳でお亡くなりになったが……。あと10年生きておられたら、もっと仕事をされただろうと思うと、残念である。

飯島先生、たくさんのお仕事をされて、お疲れ様でした。心からご冥福をお祈りします。安らかにお休みください。

【飯島周先生追悼文】

## ボガトウイリョフの戦中・戦後 ——プラハ学派とソ連のスラヴ学——

大平 陽一

### はじめに

なぜ飯島周先生の追悼シンポジウムでプラハ言語学サークルの話をするかと申せば、チャペックの翻訳者、研究者として広く知られる飯島先生とチェコとのつながりが生まれたのが、東大言語学科出身の先生がプラハ言語学サークルの言語理論に興味をもたれたからです。飯島先生が言語学科のご出身と聞いて、意外に思う方もいらっしゃるかも知れませんが、それに、チェコ語のようなマイナー言語で（私はマイナーという語に誇りを込めているつもりです）書かれた文学作品の翻訳を言語学者が手がけることは、そう珍しいことではありません。アンデルセン童話集の翻訳で知られる矢崎源九郎がそうですし、スラヴィストに目を転じて、プラハ学派の紹介に尽力された千野栄一先生もそうでしたし、我らが三谷恵子先生もすぐれた翻訳を出しておられます。

要するに、チェペックやサイフェルトを飯島先生の翻訳で読めることは、プラハ言語学サークルのおかげと言えるのかも知れないと、やや牽強付会気味に、今日はプラハ言語学サークルのメンバーだったピョートル・ボガティリョフ（1893–1971）について紹介させていただきます。

飯島先生が言語学者としてよりはチェペック、サイフェルトの翻訳者として著名なのと似て、ボガトウイリョフもロシア本国ではフォークロア研究者としてよりは、むしろハシェックの『兵士シュヴェイクの冒険』の翻訳者として知られています。ボガトウイリョフのロシア語訳は今にいたるまで版を重ね、電子書籍にもなっています。もう30年以上も前の1980年代末の数字になりますが、その時点で1600万部も出ているそうですから大したものです。

ただし、飯島先生とボガトウイリョフの近さをこじつけるもこれが限界です。いさぎよく諦めて、飯島先生とは無関係に、ソ連時代のスラヴ学、フォークロア研究、さらには記号論と関係づけて、チェコスロヴァキアからソ連に帰国してからの、つまり戦中・戦後のボガトウイリョフについてお話しいたします。

## 1. プラハ言語学サークルとボガトウィリョフ

まず、プラハ学派のことなど、お若い方はご存知ないでしょうから、百科事典の記述を一部引用します。執筆者は他ならぬ飯島先生です。

1926年マテジウス（1882—1945）が結成した学者集団を母体とする言語学派。1939年のナチス侵攻で活動を抑圧されるまでを古典期とし、チェコおよび周辺諸国の学者が定期的に会合、研究討論を重ね、機関誌『プラハ言語学団論集』および『言葉と文学』を発行、内外に影響を与えた。トルベツコイとヤコブソンの業績がとくに有名である。[…] この学派の基本的特色は、言語を機能的観点から構造的に分析するいわゆる機能主義であり、言語のもつ潜在的性質や言語外の現実との関係を重視するが、F・ド・ソシュールの学説などと並び構造言語学一派とされる。音韻論のほか言語の通時的、共時的様態の広範囲に及ぶ優れた研究があり、近来マテジウスとムカジョフスキーが高く評価され、言語学、文芸学の諸分野、とくに統語論、文体論で注目されている<sup>1</sup>。

残念ながらボガトウィリョフの名前は出てきません。そこで千野栄一先生が別の百科事典のために執筆した項目を読んでもみると、ここにはボガトウィリョフの名が出てきます。

1920年代にチェコスロヴァキアのプラハで興った構造主義の古典学派の一つで、言語学を中心に文芸理論とフォークロア研究の領域で華々しい活躍をした。[…] この学派の中心になったのはチェコ人のマテジウスとロシア人のヤコブソンで、このほかやや遅れてこの学派に加わったトルベツコイ、文芸理論で業績を残したムカジョフスキーやフォークロア研究でのボガトウィリョフらがいる。この学派の理論的先駆者はボードゥアン・ド・クルトネとソシュールで、前者の〈機能〉、後者の〈構造〉という概念を受け入れて、言語、文芸理論、フォークロア研究などの分野でこの二つの基本概念から分析を行い、今日でも依然として価値のある業績を残している<sup>2</sup>。

二つの引用文には「近来マテジウスとムカジョフスキーが高く評価され」、「今日でも依然として価値のある業績」とありますが、その「近来」も「今日」も遠い昔になってしまっています。しかし、プラハ学派の命脈がもう尽きてしまっているかと言えば、そうでもないようで、今年度から天理大学の非常勤講師をお願いした若いフランス語研究者の業績表に、「マテジウス」「テーマ」「レーマ」という単語が出ていてちょっと驚きました。ロシア科学アカデミー世界文学研究所のトポルコフ教授によれば、きよ

うご紹介するボガトウィリョフの仕事も、今なおそのアクチュアリティを失っていないとのことです。

さて、次にボガトウィリョフはどんな人物だったかを紹介したいのですが、たまたまや安易に『東欧を知る事典』から引用します。こちらの執筆者は桑野隆先生です。

ロシアの民族誌学者、フォークロア研究者。サラトフ生まれ。1921-40年はチェコスロヴァキア滞在。ヤコブソンとともに、モスクワ言語学サークルならびにプラハ言語学サークルの活動に主導的な役割を演じた。[…] 主著としては、ソシュールの影響下に言語学の共時的方法を民族誌に適用した『呪術、儀礼、俗信』(1929)、機能・構造主義を言語以外に適用した好例であり、また記号論の先駆として高く評価されている『モラヴィア・スロヴァキアの民俗衣装』(1937)、民衆演劇独特の豊かな世界をみごとに解読した『チェコ人・スロヴァキア人の民衆演劇』(1940)などがあげられる<sup>3</sup>。

文学理論家として著名なシクロフスキーは、『Zoo』という書簡体の小説を書いているのですが、そこに「ロマンがプラハに行き、ボガトウィリョフを呼び寄せた」という一文があります。実際、1920年に、正式国交のないチェコスロヴァキアと捕虜交換のために組織された赤十字使節団の通訳という身分で、まず言語学者のロマン・ヤコブソン(1896-1982)がプラハに赴任し、そのヤコブソンが、モスクワ大学時代からの親友ボガトウィリョフに就職口を斡旋したようで、21年に12月にボガトウィリョフも翻訳官・通訳官として赴任しています。この組織は、その後、ソヴィエト連邦全権代表部へと改組されます。

しかし、1920年代半ばから30年代終わりにかけて、プラハ言語学サークルのメンバーとして目覚ましい研究活動を行ったボガトウィリョフとヤコブソンの運命は、ナチスのチェコスロヴァキア侵攻によって引き裂かれます。1939年、ユダヤ系のヤコブソンはチェコからデンマークに逃れ、その後スカンジナビアを経てアメリカに移住し、ハーバード大学教授として世界的な名声を博したことは、ご存知の方も多いでしょう。一方、ボガトウィリョフは(『東欧を知る事典』の記述は間違いで)1940年ではなく39年にソ連に帰国しました。

## 2. 1920-30年代のソ連スラヴ学とスラヴィスト事件

ボガトウィリョフがチェコスロヴァキアに滞在していた1920年代から30年代終わりにかけて、ソ連のスラヴ学は崩壊に瀕していました。革命後のソ連では、スラヴ諸民族が共有する文章語が古代教会スラヴ語であったこと、その言語で書かれた文献のほとんどが宗教文書であったという事実から、スラヴ学を「反動的」と考える風潮が

強く、また 1950 年までソ連の言語学界を支配するマールのヤフェト理論は、スラヴ諸語が同系の言語であり、スラヴ祖語という共通の源をもつというそもそもの前提を否定していたからです。

こうした風潮の中、1933 年末から 34 年にかけて〈スラヴィスト事件〉が起こります。この事件の犠牲者のひとりが、ヤコブソンの斡旋でチェコスロヴァキア政府から助成金を得、ブルノで研究活動と就職活動をしていたロシアのスラヴィスト——モスクワ大学時代のボガトウイリョフとヤコブソンの恩師であった——ニコライ・ドゥルノヴォ（1876—1937）でした。ドゥルノヴォもプラハ言語学サークルの一員として精力的に活動し、何冊か著書を刊行したのですが、ついにチェコでは就職先が見つからず、1927 年にベラルーシ科学アカデミーの招聘をうけ、ソ連に帰国していました。しかし、二年ほどでベラルーシ・アカデミーの職を追われたドゥルノヴォは、国家保安部のでっち上げた〈スラヴィスト事件〉の首謀者として 33 年 12 月に逮捕され、収容所に送られました。

モロトフ人民委員会議長の暗殺計画に始まり、国外のロシア人ファシストとの結託やアカデミーの研究活動の妨害に至る荒唐無稽な罪状が並んでいる告訴状の最初のページには、次のように書かれていました。

反革命的組織《ロシア民族党》はニコライ・トゥルベツコイ公爵、ロマン・ヤコブソン、ピョートル・ボガトウイリョフらの主導する在外ファシストのセンターから直接指令を受けて設立された。この党が組織されたのは 1930 年の前半、ニコライ・ドゥルノヴォ教授のモスクワ帰還後のことである<sup>4</sup>。

実際にこの 4 人全員が所属した組織は、プラハ言語学サークルしかありません。4 人で撮った記念写真、トゥルベツコイたちの論文の抜刷も証拠として採用されました。スラヴィスト事件では、ドゥルノヴォ以外にも、セリシチェフやイリンスキー、その後、ソ連言語学界の一大権威となったヴィノグラードフも逮捕されました。34 人の逮捕者のうち、生きのびたのは 17 人だけです。

実は、ソ連の民族誌学者ゼレーニンに宛てた 1934 年 11 月 15 日付けの手紙の中でボガトウイリョフは、12 月のレニングラードでの学会には必ず出席すると、書き送っていました。しかし、この一時帰国は直前になって取りやめになりました。この時期にボガトウイリョフが帰国して、無事だったはずがありません。帰国を中止した理由をはっきりしませんが、34 年 5 月にはトゥルベツコイが「ドゥルノヴォと彼の息子について何か知らせはありますか。私の弟はトゥルケスタンに流されています。弟の娘（ドゥルノヴォの息子の妻）も同様です」と、ヤコブソンに宛てた手紙に書いていたくらいですから、危ないという程度の情報は、ボガトウイリョフにも届いたのかも

知れません。

しかし、ナチスに占領されたチェコスロヴァキアから帰国した1939年にしても、とても安全な状況とは言えませんでした。しかし、それでもボガトウィリョフが帰国したのは、妻子がモスクワにいたからです。全権代表部の職員だったタマーラ夫人と知り合い、結婚したのはプラハでしたし、一人息子が生まれたのもプラハでしたが、1928年、夫人は病気の祖母の見舞いのため、息子を伴って一時帰国しました。ところが、当局は二人の再出国を頑として認めず、ボガトウィリョフと妻子は十年以上も離ればなれだったのです。

ただ幸いなことに、スラヴ学をめぐる状況が一変していたお陰でボガトウィリョフは逮捕を免れ、翌1940年にはモスクワ大学教授のポストに就いています。第二次世界大戦勃発によって、反ファシズムのためのスラヴ諸民族の連帯が大義名分となったためでした。遅ればせながら、1943年にモスクワ大学にスラヴ学講座ができ、47年にはソ連科学アカデミーにスラヴ学研究所が創設されます。

モスクワ大学での教育・研究の傍ら、ボガトウィリョフは、タス通信でドイツ支配下のチェコスロヴァキアに向けたラジオ放送も担当していたそうです。革命後に始まったスラヴ学の軽視、1930年代のスラヴィストの弾圧の結果、ボガトウィリョフは40年代のロシアにおいてただ一人のチェコ文化の専門家になっていました。そんな状況ですから、モスクワ大学では専門の民族誌学以外にチェコ文学を専攻する大学院生も指導しましたし、大学外からも民族誌、演劇学、人形劇に関心をもつ人々が助言を求めて、アパートを訪れたそうです。根っからの善人で、無防備なぐらい他者の善意も信じていたボガトウィリョフは、その学識を惜しみなく後進に分け与えました。

『兵士シュヴェイクの冒険』を翻訳したお陰で手に入れることのできた狭い部屋への訪問者たちが求めていたのは、ボガトウィリョフの学識だけではありませんでした。当時のロシアにとって貴重な蔵書を借りるために、多くの人が訪れました。革命以後、長年におよぶスラヴ研究の空白期間が、そのままロシアの大学や図書館の蔵書の空白になっていたからです。若いスラヴィストたちにとって、ボガトウィリョフの蔵書は、まさに「救い」だったのでしょう。

### 3. ロシア科学アカデミー・民族誌学研究所からの追放

しかし、1947年末には、フォークロア研究者への弾圧が始まっていました。それは大々的に展開された〈反愛国的コスモポリタニズム批判〉の一環をなすものでした。1944年からボガトウィリョフは、ロシア科学アカデミー民族誌学研究所・フォークロア部の部長も兼務していたのですが、48年2月、同研究所において、当時のフォークロア研究の「欠点」について、非公開の討議が行われました。スケープゴートに選ばれたのは、『歴史史学』のヴェセロフスキー、『民話の形態論』のプロップ、そして

ボガトウィリョフでした。弾圧する側に言わせると、この三人の学説の根っこには反歴史主義が共通しており、彼らの研究上の誤りはそこに起因するとされました。批判された三人のコスモポリタンのうち、ただ一人ボガトウィリョフだけが討議に出席し、誠実な回答を試みました。しかし2月16日の討論では、ボガトウィリョフの機能・構造主義的方法を俎上に載せ、機能と構造の研究は弁証法的唯物論と矛盾するものではないというボガトウィリョフの主張に対し、マルクス・レーニン主義と矛盾対立するブルジョワ的民族誌学において、機能学派は広く流布しているのではないかと、討論への参加者のほとんどが批判したそうです。

その後、ソ連のフォークロア研究の欠点と課題に関する議論は、民族誌学研究所学術会議の公開討論会へと引き継がれ、ここでもボガトウィリョフは、マルクス・レーニン主義の諸原理といかなる共通性も持たない方法上の概念をフォークロア研究に援用したと、厳しく批判されました。

こうした対論者たちの批判に対して、ボガトウィリョフは自分の方法に欠点があることを認めながらも、それは「機能」という概念の不適切な援用によるものであったと、『機能』という用語は、まことにもって不適切であった。それは何か他の用語に、たぶん『役割』か『課題』という用語に置き換えるべきであった」と、あたかも問題になっているのが純粋に学問的な問題でしかないかのごとく、答えたのだそうです。ちなみにプラハ言語学サークルの流れを汲む言語学者のフランチシェク・ダネシュは、2008年の論文で、「機能を何らかの現象の『課題』『役割』であるとか『言語外現実へのレファレンス』といった理解」の仕方<sup>5</sup>がプラハ学派のメンバーには典型的であると書いているのですから、ボガトウィリョフの自己批判は、外来語を使ったのがまずかったと言っているに過ぎません。

スラヴィスト事件の際には、「民族党」の組織者と批判されたボガトウィリョフが、こんどは「コスモポリタン」として糾弾されたのですが、ロシアの純朴な農民を思わせるボガトウィリョフほどコスモポリタンから遠い人はいないでしょう。冒頭で紹介したように、シクロフスキーの書簡体小説『Zoo』には、ボガトウィリョフとヤコブソンを対照的に描いた章があって、そこにこんな箇所があります。

ベルリンで三着背広を誂えたが、モスクワで仕立てた別の背広を着ていた<sup>6</sup>。

いつも氷砂糖をポケットにしるばせ、時々嚙っていた。ロシア的な習慣を守っていたのだ<sup>7</sup>。

ヨーロッパを愛するヤコブソンに連れられて、こぎれいなレストランに入ったボガトウィリョフは、いろいろな料理、ワイン、美女に囲まれているうちに泣き出す<sup>8</sup>。



結局、チェコで彼が落ちつけた場所は、コサックたちの暮らすロシア人捕虜収容所でした。

しかし、フォークロア研究の欠点についての討論会のあとすぐに、ボガトウィリョフは民族誌学研究所を追われます。さらに4年後の52年には、モスクワ大学も解雇されてしまうのですが、不幸中の幸いと言うべきか、お人柄というか、教え子のひとり**ボロネジ大学**に呼んでくれました。

しかし、これも「雪どけ」のお陰なのでしょうか、1958年にチェコ文学の専門家として科学アカデミー世界文学研究所の**研究員**としてモスクワに職を得ることができました。ただし、モスクワ大学に復職できるのは、6年後の1964年を俟たねばなりません。

すでにこの頃ともなると、ソ連でも構造主義が復興し、構造言語学の流れを汲む記号論が——その後世界の注目を集める記号論のタルトゥー＝モスクワ学派が——成立していました。彼ら60年代のソ連に現れた構造主義者たちが依って立つ「文化の記号的性格」という理念は、実は1920-30年代にボガトウィリョフが立脚していたものと基本的に同じであり、ボガトウィリョフやヤコブソン、ムカジョフスキーが機能構造主義言語学の方法をフォークロア研究や文学研究に応用したのと同様、タルトゥー学派の記号学者たちは、神話、フォークロア、芸術の研究に機能・構造主義的な方法を援用していました。

しかし、ボガトウィリョフは先例を示しただけではありません。60年代のソ連における構造主義と記号論の復興のプロセスに積極的に参与したのです。タルトゥー学派を主導したロトマンは、ボガトウィリョフについて次のように述べています。

ボガトウィリョフは記号論的研究の歴史の体現者であった。モスクワ言語学サークルとプラハ言語学サークルのメンバーだった彼は、1960年代初めから我が国で目立つようになった記号論的研究の発展を後押ししてくれた。62年には、モスクワで開催された記号システムの構造的に関するシンポジウムに参加してくれたし、その後もタルトゥーでの研究会の活動的なメンバーとなってくれた<sup>9</sup>。

60年代の半ばには、タブーだったはずの構造主義も半ば容認されてきたのでしょう、1967年には〈プロGRESS〉出版から550ページ以上もあるアンソロジー——この1冊でプラハ学派の言語論、標準語論、詩的言語論を概観できる——『プラハ言語学サークル』が上梓されました。70年代になると、日本語をはじめ多くの言語に訳されることになるウスペンスキーの『構成の詩学』(1970)など、芸術記号論の本がイスクーストウツァ〈芸術〉出版から始まります。こうした流れに乗るようにして、やはり

イスクーストツヴァ  
〈 芸 術 〉 からボガトウイリョフの選集『民衆芸術理論の諸問題』（1971）が出版されました。この選集の中には、プラハ言語学サークル時代のモノグラフで全て日本語に訳されている——『チェコ人とスロヴァキア人の民衆演劇』、『ザカルパチエの呪術・儀礼・俗信』、『モラヴィア・スロヴァキア地方の民俗衣裳』と、8篇の論文が収められています。こうした構成からは、ソ連の読者に外国語で出版された仕事の紹介に重点を置きつつも、同時に帰国後にロシア語で書かれた論文にも触れてもらうことを意図していることがうかがえます。

『民衆芸術理論の諸問題』が出てすでに半世紀が経とうしているわけですが、世界文学研究所教授でフォークロア研究者のトポルコフが6年前に発表した論文によれば、1920年代、30年代に書かれたボガトウイリョフの論考は、現在もなおアクチュアリティを失っていないのだそうです。その評価を裏書きするように、2006年にも世界文学研究所の出版局から300ページ弱の論文集が刊行されます。その題名は『フォークロア研究の機能・構造的な方法』、かつてアカデミー民族誌学研究所から追放された時の理由とされた「機能・構造主義」が、およそ60年の時を経て、アカデミーの刊行物の表紙を飾ることになったのです<sup>10</sup>。

## おわりに

このように見てくると、プラハ言語学サークルが戦後のボガトウイリョフに災厄をもたらしたようにも思えなくもありませんが、ボグスラフ・ベネシュが言う通り、「1920年から38年までの時期は、ボガトウイリョフによってきわめて多産な時期であった」のはまちがいありませんし、多くの友人、知人たちの回想する彼の人物柄からして、プラハへの移住を後悔したことも、モスクワへの帰国を後悔したこともなさそうに思えるのですが、それは私の希望的観測なのかも知れません。

ボガトウイリョフは意志堅固な反体制知識人ではありませんでした。善良な田舎者、優れた学者だが弱虫という方が彼の人物像を的確に描写しているように思います。しかし、彼は民族誌学研究所で批判されても決して媚びることはありませんでした。いま私たちの国に起こっている学術会議をめぐる問題を考える時、インチキ研究者ではあっても、学術会議の問題の重要性は分かっているつもりの方は、自分と同じ田舎者で弱虫のボガトウイリョフを師表と仰ぐつもりでいます。

## 注

- 1 飯島周「プラハ学派」『日本大百科全書（ニッポニカ）』©Shogakukan Inc.
- 2 千野栄一「プラハ言語学派」『世界大百科事典』©Heibonsha Inc.
- 3 桑野隆「ボガトウイリョフ」萩原直監修、柴、直野、南塚、伊東編『新版・東欧を知る事

典』平凡社、2015年、511頁。

- 4 *Робинсон М.А. и Петровский Л.П.* Н.Н. Дурново и Н.С. Трубецкой: проблема евразийства в контексте «дела славистов» (по материалам ОГПУ – НКВД) // *Славяноведению* 1992. № 4. С. 74.
- 5 *František Daneš*, „Pražská škola: názorová univerzália a specifika,“ *Slovo a slovesnost* 69, nos. 1-2 (2008), p. 13.
- 6 *Шкловский В.Б.* «Зоо. письма не о любви, или третья Элоиза» // *Собрание сочинений. Том 2. Биография.* / отв. ред. И. Калигина. М., 2019. С. 209.
- 7 *Шкловский.* «Зоо». С. 208.
- 8 *Шкловский.* «Зоо». С. 209.
- 9 *Лотман Ю.М.* «Памяти Петра Григорьевича Богатырёва» // *Богатырёв П.Г.* Народная культура славян. М., 2007. С. 341-342.
- 10 翌2007年にもボガトウイリヨフの論集がモスクワで出版されている : *Богатырёв П.Г.* Народная культура славян. М., 2007.



【飯島周先生追悼文】

## 飯島周先生の思い出

阿部賢一

去る 2020 年 7 月 18 日、飯島周先生が鬼籍に入られた。追悼の意を表して、以下では、先生との個人的な思い出を綴ってみたい。

私が初めて飯島先生にお会いしたのは、今から三十年ほど前の 1991 年のこと。同年に設立された東京外国語大学のチェコ語専攻の授業に、非常勤講師として出講されていたのだった。当時、同専攻には千野栄一先生しか専任の教員はいなかったため、千野先生のたつての要望で飯島先生に非常勤をお願いしたと伝え聞いたことがある。嘶家のように話が巧みでウィットに富んでいた千野先生に比べ、飯島先生の印象は穏やかで物静かな方だなというのが第一印象だった。お二人が生涯関心を抱き続けチャペック兄弟にたとえると、千野先生が社交的な弟カレルだとしたら、飯島先生はすこし控えめで慎重な兄のヨゼフといった関係だったように思う。じっさい、飯島先生と千野先生は東京大学文学部言語学科卒であったが、飯島先生のほうが一歳年上であった。

一年生向けのチェコ語の授業は、千野先生が、月、水、金の一限に、飯島先生が土曜日の一、二限に担当されていた。千野先生はご自身の著書『チェコ語の入門』（白水社）、飯島先生は社会主義のチェコスロヴァキアで使われていた英語版の *Czech for Foreigners* を教科書として使っていた。飯島先生の朴訥な話し方に正直幾度となく眠気が誘われたが、けっして感情を表に出さない、その穏やかな姿勢に学生ながら惹かれていた。そんな穏やかな飯島先生が息を乱して教室に入ってきたことが一度だけある。それは、冬のある日、都内も大雪に見舞われ、主要な路線が軒並み運休となった。西ヶ原の大学に来たのは、近隣に住んでいる人か、都電荒川線でたどりつくことができた人だけ。数人の友人たちと、「さすがに今日の授業は休講だろうね」と話していると、がたんとドアが開いた。飯島先生が額に汗を流しながら、教室に入ってきたのだ。「遅れて申し訳ありません」と学生に敬語を使って、傘を畳み、汗を拭いているその姿は今でも忘れられない。国立にお住まいだったので、どうやって西ヶ原まで来たのかは、今でも謎のままだ。けれども、授業そして学生に真摯に向き合う飯島先生の姿勢には心が打たれた。

じつは、私の名前が初めて商業誌に掲載されるきっかけを作ってくださったのも飯島先生である。『ユリイカ』（1995 年 11 月号）でカレル・チャペックが特集されるこ

とになり、その年譜の下準備を担当したのだった。振り返ってみると、お粗末なものだったと思うが、飯島先生、石川達夫先生が朱を入れてくださり、お二人とともに私の名前が掲載された。初めての活字は誰にとっても印象的なものだが、とりわけ一学生だった私にとって大きな励みになった。

1995年から二年間、私はチェコ政府による国費留学の機会を得たが、そのことを報告すると、飯島先生は「ぼくの分まで、学んできてください」とおっしゃった。飯島先生自身は、いわゆる長期の留学体験はされていない（短期留学の際は、シベリア鉄道で現地に向かったという）。チェコ人との直接の交流が限られていた時代にほぼ独学でチェコ語を習得されたことは脱帽するしかない。私が留学してからも、飯島先生は私のことを気にかけてくれ、プラハで学会があった折にはデイヴィツェのビアホールでビールをご一緒したことは貴重な思い出となっている。また当時進行していた『カレル・チャペック小説選集』（全六巻、1995—1997年、成文社）でもすこしお手伝いする機会に恵まれた。『流れ星』部の下訳をしたのだが、私の訳はほとんど使い物にならなかったにちがいない。掛詞やニュアンスはまだ十分に理解できていなかったし、直訳の域を脱していないものだった。今考えると、おそらく下訳という名目で、翻訳の修練の機会を与えてくれたのではないかと思う。でも、徹底的に文章を読み込み、訳出していくというプロセスを体感できたことは、私自身にとって大きな財産になった。

千野栄一先生が2002年に他界されると、飯島先生は、チェコ関係の学会、協会などで細やかな対応をされた。跡見学園女子大学の学長を務められ、各種団体の会長も歴任されたが、けっして偉ぶる態度は見せず、つねに一人ひとりと真摯に向き合う姿勢を大事にされていた。またお酒、とりわけビールを好まれ、毎回とっていいほど懇親会は必ず参加され、年齢や性別を問わず、いろいろな人たちと言葉を交わすのを楽しむ姿は印象に残っている。

『言語学のたのしみ』、『外国語上達法』、『プラハの古本屋』といった名著、名エッセイを次々に輩出した千野先生に比べると、飯島先生の著作は多くはない。『ポケットのなかのチャペック』という不朽のエッセイで、日本の読者にチャペックの魅力を紹介し、また日本チャペック兄弟協会の会長を長年務めていたということもあり、チャペック＝千野先生という印象もあるが、翻訳に目を向けると、じつは、千野先生が訳したチャペックは『ロボット』（岩波文庫）などそう多くはない。これに対して、飯島先生は、チャペックの哲学三部作『ホルドゥバル』『流れ星』『平凡な人生』（成文社）に加え、『チャペック エッセイ選集』（全六巻、恒文社）、エッセイ集『未来からの手紙』『こまった人たち』（平凡社ライブラリー）、旅行記『北欧の旅』『オランダ絵図』（ちくま文庫）など、多くのチャペック作品の翻訳を手がけられた。それまで重訳が多かったチャペック作品をチェコ語から翻訳し、なかでも、魅力が重訳では十分に伝

わらないエッセイを数多く日本語にされた意義はとても大きい。そして、長年にわたるチャペックへの愛情を結実させたのが『カレル・チャペック 小さな国の大きな作家』（平凡社新書、2015年）である。同書は、今後、かならず参照すべきことになる基本文献であるだけでなく、チャペックという作家の魅力を存分に教えてくれる手引き書でもある。

自分も多少なりとも翻訳をするようになってわかるのは、上の世代の人びとの翻訳があつてこそ、今の自分がいるという感覚である。ハシェク、チャペック、サイフェルト、ハヴェルといった基本をなす作品の翻訳があつたからこそ、私は、ラジスラフ・フクス、ミハル・アイヴァスといった新しい作家たちの翻訳をてがけることができた。そう考えると、飯島先生が日本におけるチェコ文学の受容にもたらしたものはとても大きいものであり、先生の訳書は今後も広く読まれる書物として残り続けるだろう。

晩年、松籟社の「ボフミル・フラバル・コレクション」で、飯島先生とともに、訳者として名前を連ねることができたときは教え子として嬉しくてたまらなかつた。個人的には、飯島先生が訳された『嚴重に監視された列車』は、主人公ミロシュ・フルマの揺れる思いを見事に日本語に移し替えた名訳だと思う。

今でもどこかでビールを飲んでいると、「やあ、阿部君」と右手をあげて、先生がお店に入ってくるような気がしてならない。でも、もうそのお姿を拝見することは叶わない。おそらく、今頃は、天国で千野先生とビールを飲み交わしていらっしやるにちがいない。

2020年7月24日

合掌

阿部賢一





## 飯島周（1930-2020）先生 主要業績一覽

### 【A. 著書】

(単著)

飯島周『カレル・チャペック 小さな国の大きな作家』平凡社新書、2015年、全279頁。

(編著)

飯島周・小野裕康・ブルナ・ルカーシュ編『チャペック兄弟とその時代 カレル・チャペック誕生125周年、ヨゼフ・チャペック没後70周年記念論文集』日本チェコ協会・日本チャペック兄弟協会、2017年、全178頁。

### 【B. 論文】

- 「On some problems in linguistic description」『跡見学園女子大学紀要』(2)、1969年、27-34頁。
- 「言語構造の acceptability について」『跡見学園女子大学紀要』(4)、1971年、1-10頁。
- 「言語生成記述の一方法について」『跡見学園女子大学紀要』(6)、1973年、43-52頁。
- 「文要素配列に関する一考察」『跡見学園女子大学紀要』(7)、1974年、1-8頁。
- 「カレル・チャペックと『イギリスだより』」『ゆべにりあ』(5)、1976年、19-38頁。
- 「A Note on the Rheme and Rhematization」『跡見学園女子大学紀要』(10)、1977年、1-10頁。
- 「伝達動力について」『跡見学園女子大学紀要』(13)、1980年、130-120頁。
- 「ブラウン神父とメイズリーク警部 又はG. K. チェスタートンとK. チャペック」『ゆべにりあ』(9)、1980年、68-76頁。
- 「日本語における終結詞「ダ」の機能について」『跡見学園女子大学紀要』(14)、1981年、230-219頁。
- 「プラハが生んだ二つの顔 カフカとハシェク」『ゆべにりあ』(11)、1982年、89-101頁。
- 「機能的文構成における焦点化について」『跡見学園女子大学紀要』(16)、1983年、1-12頁。
- 「V・マテジウスの英文学研究 そのシェイクスピア論を中心として」『ゆべにりあ』(12)、1983年、33-41頁。
- 「ばらと涙の詩人ヤロスラフ・サイフェルト」『跡見学園女子大学紀要』(18)、1985年、49-61頁。
- 「プラハ言語学サークルの第10テーゼ」『跡見学園女子大学紀要』(21)、1987年、9-19頁。
- 「いわゆる国際英語について」『跡見英文学』(1)、1987年、1-12頁。
- 「プラハ言語学サークルの第3テーゼ」『跡見学園女子大学紀要』(21)、1988年、11-25頁。
- 「現実的国際語としての英語の一面：エスペラント語と関連して」『跡見英文学』(2)、1988年、1-12頁。
- 「V. Mathesius の機能的文構成における2,3の基本的概念について」『跡見学園女子大学紀要』(23)、1990年、17-31頁。

- 「プラハ言語学サークルの第1、第2 テーゼ」『跡見学園女子大学紀要』(26)、1993年、1-10頁。
- 「人間の魂の価値 カレル・チャペックの哲学3部作」『ユリイカ』27(12)、1995年11月号、268-271頁。
- 「サウイモノニワタシハナリタイ 日本語の語順と宮沢賢治の文章」『言語』26(6)、1997年6月号、90-96頁。
- 「Estuary Englishの可能性」『跡見英文学』(12)、1998年、1-9頁。
- 「「会話の文法」に関する一考察 Longman Grammar of Spoken and Written Englishの場合」『跡見英文学』(13)、1999年、15-22頁。
- 「プラハ言語学サークルの第9 テーゼ」『跡見学園女子大学紀要』(33)、2000年、49-55頁。
- 「プラハ言語学サークルの第4、5、6、7、8 テーゼ」『跡見学園女子大学紀要』(34)、2001年、1-9頁。
- 「作家としてのヨゼフ・チャペック」、飯島周・小野裕康・ブルナ・ルカーシュ編『チャペック兄弟とその時代 カレル・チャペック誕生125周年、ヨゼフ・チャペック没後70周年記念論文集』、日本チェコ協会・日本チャペック兄弟協会、2017年、125-134頁。

#### 【C. 翻訳】

- アントニーン・J・リーム『三つの世代』みすず書房、1970年、全302頁。
- ヤン・ネルダ「没落した物乞いの話」、高橋勝之・直野敦・吉上昭三編『世界短編名作選 東欧編』新日本出版社、1979年、71-81頁。
- ヴィレーム・マテジウス著、ジョセフ・ヴァヘク編『機能言語学 一般言語学に基づく現代英語の機能的分析』桐原書店、1981年、全254頁。
- F. R. パーマー『英語の法助動詞』桐原書店、1984年、全269頁。
- ヤロスラフ・サイフェルト『ヴィーナスの腕』桐原書店、1986年、全126頁。
- ヤロスラフ・サイフェルト『マミンカ おかあさん J・サイフェルト詩集』恒文社、1989年、全86頁。
- ヤロスラフ・ハシエク『ハシエク風刺短篇集』大学書林、1989年、全221頁。
- バーツラフ・ハベル『ピロード革命のこころ チェコスロバキア大統領は訴える』千野栄一共訳、1990年、岩波ブックレット (No.158)、全69頁。
- ヴァーツラフ・ハヴェル「人間の主体性の危機」『みすず』32(4)(349)、1990年4月号、18-20頁。
- カレル・チャペック『K. チャペック小品集』大学書林、1990年、全233頁。
- ヴァーツラフ・ハヴェル『反政治のすすめ』飯島周・関根日出男・石川達夫訳、恒文社、1991年、全301頁。
- J. プラット〔ほか〕『新英語の実相』松柏社、1991年、全267頁。
- カレル・チャペック『いろいろな人たち チャペック・エッセイ集』平凡社ライブラリー、1995年、全325頁。
- カレル・チャペック『ホルドゥバル チャペック小説選集第3巻』成文社、1995年、全216頁。

- ヴァーツラフ・ハヴェル『プラハ獄中記 妻オルガへの手紙』恒文社、1995年、全623頁。  
カレル・チャペック「イギリスだより」飯島周訳、『ユリイカ』27(12)、1995年11月号、  
250-267頁。
- カレル・チャペック『流れ星 チャペック小説選集第4巻』成文社、1996年、全228頁。  
カレル・チャペック『未来からの手紙 チャペック・エッセイ集』平凡社ライブラリー、  
1996年、全266頁。
- カレル・チャペック『チェコスロヴァキアめぐり カレル・チャペック・エッセイ選集第  
1巻』恒文社、1996年、全236頁。
- カレル・チャペック『イギリスだより カレル・チャペック・エッセイ選集第2巻』恒文社、  
1996年、全260頁。
- カレル・チャペック『犬と猫 カレル・チャペック・エッセイ選集第3巻』恒文社、1996年、  
全240頁。
- カレル・チャペック『平凡な人生 チャペック小説選集第5巻』成文社、1997年、全224頁。  
カレル・チャペック『園芸家の一年 カレル・チャペック・エッセイ選集第4巻』恒文社、  
1997年、全229頁。
- カレル・チャペック『スペイン旅行記 カレル・チャペック・エッセイ選集第5巻』恒文社、  
1997年、全236頁。
- カレル・チャペック『新聞・映画・芝居をつくる カレル・チャペック・エッセイ選集第6  
巻』恒文社、1997年、全285頁。
- ヤロスラフ・サイフェルト『この世の美しきものすべて』飯島周・関根日出男訳、恒文社、  
1998年、全667頁。
- ヨゼフ・チャペック『人造人間 ヨゼフ・チャペックエッセイ集』平凡社ライブラリー、  
2000年、全187頁。
- ヤロスラフ・サイフェルト『新編ヴィーナスの腕 J・サイフェルト詩集』成文社、2000年、  
全158頁。
- ヤロスラフ・ハシェク「犯罪者たちのストライキ」、小原雅俊編『文学の贈物 東中欧文学  
アンソロジー』未知谷、2000年、181-190頁。
- ヤロスラフ・ハシェク『不埒な人たち ハシェク風刺短編集』平凡社、2002年、全266頁。  
カレル・チャペック『こまった人たち チャペック小品集』平凡社ライブラリー、2005年、  
全276頁。
- ヨゼフ・ラダ『どうぶつだいすき』平凡社、2005年、全62頁。
- イジー・ヴォルケル「愛の歌」、飯島周・小原雅俊編『ポケットのなかの東欧文学 ルネッ  
サンスから現代まで』成文社、2006年、198-208頁。
- カレル・チャペック『イギリスだより』（カレル・チャペック旅行記コレクション）、筑摩  
書房（ちくま文庫）、2007年、全254頁。
- カレル・チャペック『チェコスロヴァキアめぐり』（カレル・チャペック旅行記コレクション）、  
筑摩書房（ちくま文庫）、2007年、全234頁。
- カレル・チャペック『スペイン旅行記』（カレル・チャペック旅行記コレクション）、筑摩

- 書房（ちくま文庫）、2007年、全255頁。
- カレル・チャペック『園芸家の一年』恒文社、2008年、全229頁。
- カレル・チャペック『北欧の旅』（カレル・チャペック旅行記コレクション）、筑摩書房（ちくま文庫）、2009年、全301頁。
- カレル・チャペック『絶対製造工場』平凡社（平凡社ライブラリ）、2010年、全287頁。
- カレル・チャペック『オランダ絵図』（カレル・チャペック旅行記コレクション）、筑摩書房（ちくま文庫）、2010年、全158頁。
- ボフミル・フラバル『嚴重に監視された列車』（フラバル・コレクション）、松籟社、2012年、全118頁。
- カレル・チャペック『園芸家の一年』平凡社ライブラリ、2015年、全235頁。
- ヨゼフ・チャペック『ヨゼフ・チャペックエッセイ集』平凡社ライブラリ、2018年、全277頁。
- ヤロスラフ・ハシエク『不埒な人たち ハシエク短編集』平凡社ライブラリ、2020年、全378頁。

#### 【D. その他】

- Noam Chomsky: *Language and freedom*. Edited with notes by Itaru Iijima. Kirihara Shoten, 1976.
- 「第三のミレナ像」『月刊百貨』（平凡社）（178）、1977年7月号、44-45頁。
- 「人造人間と強制収容所 ヨゼフ・チャペック生誕百年」『みすず』29(7)(319)、1987年8月号、40-46頁。
- 「カレル・チャペック年譜」『ユリイカ』27(12)、1995年11月号、88-91頁（石川達夫・阿部賢一と連名）。
- 「新座の勝手書き ムクドリからカラスへ」『跡見英文学』（14）、2000年、1-6頁。
- 「さまざまなヨーロッパ」『跡見英文学』（15）、2001年、135-160頁。
- 「エッセイ・クラブ本の効能」『英文学』（83）、2002年、143-145頁。

【講演】

## Doing Slavic linguistics in the US today

Marc L. Greenberg

### 1. Introduction

This paper provides some observations on the current state of Slavic linguistics in the US in the context of its trajectory in the second half of the twentieth century to the present, attempting to bring together the experience of the author, an informal analysis of the broad trends that have affected the boom-bust cycle of its development, as well as an attempt to make sense of the field in the context of the contemporary US university. There is no attempt to achieve a complete survey of the field and, necessarily, the perspective here proceeds from personal experience in the field from the early 1980s to the present. Rather, the aim is to convey a perspective on developments in the US, which has been an important contributor to the growth and maturity of the Slavic linguistics field, for the audience in Japan.<sup>1</sup> It is hoped that this presentation will help scholars to foster more fruitful collaboration across national traditions, not just between North America and Europe, but also between Japan, North America, and elsewhere.

### 2. The financial underpinning of the field

In the US the field burgeoned with the Cold War and key in this flourishing was the investment of the US Congress, under the auspices of Title VI of the National Defense Education Act of 1958, in building foreign-language and area-studies programs in universities in order to ensure a continuing and robust supply of language and area experts in all sectors of the workforce. The NDEA was enriched in 1961 by the Mutual Education and Cultural Exchange, or Fulbright-Hays, Act (US Department of Education: N.d.)<sup>2</sup>. The appropriations following from these acts helped to build expertise in faculties and support students wishing to study nationally critical languages as well as extend their years-in-training to achieve high-level expertise. My own graduate education benefited from both of these programs: nearly all of my graduate education, both at the University of Chicago (MA, 1983–84) and UCLA (PhD, 1984–1990), were funded by Title VI funds and my dissertation work in Yugoslavia (1988–1989) was underwritten by a Fulbright-Hays Dissertation Fellowship. Both of these institutions were designated as federally-funded Title VI centers for Russian and East European languages,

as was the university I eventually ended up working at after my training, the University of Kansas. The requirements for receiving the funding were not tied to the military, security, and intelligence missions of the US, but, rather, it was understood that expertise in itself was crucial to the national interest and as such it could serve both soft and hard power aims. As is clear in the continuation of this essay, the entailments of this funding were rich and varied and helped to generate creative work in ways that were quite impressive, especially for a nation that is often stigmatized for being monolingual and monadic in its self perception.

The end of the Cold War was immediately felt in higher education the year I defended my dissertation and landed my first academic position in 1990. Undergraduate enrollments in Russian language at my “landing” university, the University of Kansas (KU), immediately declined from hundreds to dozens. National trends were in line with this change, so KU was hardly an outlier: total enrollments in the US were 16,000 in 1958, by 1968 they were 41,300, in 1990 they had climbed to 44,500 and by the mid and late 1990s they had leveled off to slightly less than 25,000, a decline of some 44% (MLA Language Enrollment Database)<sup>3</sup>. This trend continued over the next decades, seeing an overall rise in language enrollments through the early 2000s while Russian (and other East European) declined and was overtaken by increased interest in Arabic, Chinese, Portuguese, and even Biblical Hebrew (in relative terms; Goldberg, Looney, Lusina 2015: 3)<sup>4</sup>. Both enrollment trends and funding models increasingly moved reactively to events. As Amelia Friedman put it, “Americans learn certain languages when, for example, emergencies hit. Slavic languages during the Cold War. Middle Eastern ones during the “War on Terror.” [...] But these pop-up programs may be misguided: Learning a language in a non-immersive classroom setting takes years. So if schools are offering learning the ‘language du jour’ today, it’s bound to be the ‘language d’hier’ tomorrow” (Friedman 2015)<sup>5</sup>. The language-training for the US military and intelligence field’s premier institution, the Defense Language Institute (DLI), also reflects the shifting priorities. DLI enrollments in Eastern European languages increased by 350% between the early 1960s to 1990, and then declined by 70% from 1990 to 1995 and has remained stagnant since then (data until 2018); Middle Eastern languages from 1990 to 2015 increased some 400% though these enrollments, too, were rapidly halved from 2015 to 2018 (Shalev 2020)<sup>6</sup>. In short, both the supply and demand and the funding models, which once fostered a proliferation of deep expertise in the US, have become increasingly vulnerable to short-term priorities.

The reasons for these changes are not just driven by transformations in the political structure of the world, though that is also true. Changes in the way that students perceive the value of education has shifted in the direction of job-preparation and, as such, a major subject is seen as a ticket to a particularly job track. Accordingly, higher education in the US has

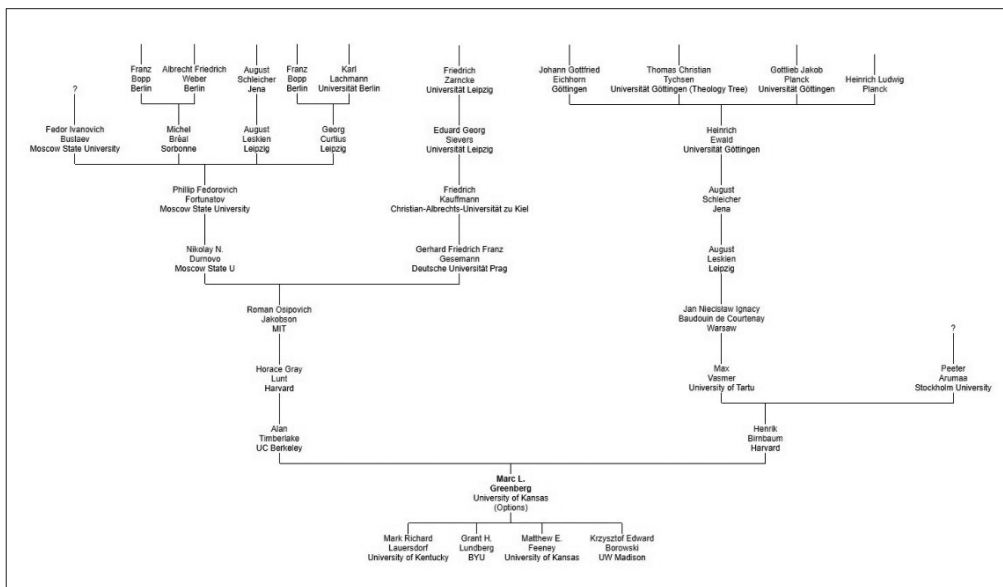
become rapidly focused on serving industry and the former subsidization of public universities by their states has declined, which in turn forced administrators to model universities after corporations. For this reason, despite much talk about the prestige of research achievements, the value of liberal arts education, decision making is now largely driven by calculation based on the “product” (instruction, sometimes referred to, callously, as “content delivery”) as measured in tuition-eliciting increments called student credit hours. This thumbnail sketch of the transformation of US higher education is meant to serve as background for the narrative. The interested reader who wishes to understand the structural changes in US higher education may wish to consult Newfield 2011.<sup>7</sup>

### **3. The privilege of the field**

On campuses across the US in the current day there is considerable discussion about race, gender, privilege, and economic disparity in the context of both national and global debates on these issues. Slavic linguistics is not divorced from these topics, even if its object of study would seem unrelated. Taking just my thin slice of experience from the field one can see patterns that have been widely understood about the humanities more broadly. With regard to race, it is easy to see that the Slavic linguistics field is predominantly white, European, as such categories are defined in US officialese. In part this is a function of the fact that an attractor to the field is having either experience or background from a Slavic-speaking family. One could draw further distinctions and note that this entails Slavic-speaking heritage in a significant subset of scholars, especially in North America, whose families, like mine, are of Ashkenazi Jewish heritage, descendants who emigrated from the Pale of Settlement in the late nineteenth and early twentieth century to North America. There was a clear motivation in my own intellectual development in hoping to discover the “secrets” that were created when my family, as was characteristic of the time—the late nineteenth century—did its best to erase its national origins upon emigration from its points of origin in Novohrad-Volyns’kyj, Chişinău, Bucharest, Sečovce/Gálszéc and Újfehertó. The childhood hints were that, long ago, our ancestors spoke Russian, Hungarian, and Romanian, but this clashed with the observation that, alongside dominant English, Yiddish was spoken through the next generation, that of my grandparents (<http://www.ancestors-genealogy.com/greenberg/>). Not until I was finishing my PhD in the late 1980s did I have the privilege of meeting the first, and, to my knowledge, the only African-American Slavic linguist, Kenneth Naylor (1937–1992). Professor Naylor inspired a rich legacy and his work posthumously informs the field, but one can observe in the 2017 group picture on the occasion of the twentieth anniversary of the Kenneth Naylor Memorial Lecture that not much has changed in the makeup of the field, save that it is becoming more gender

balanced. Even so, of the 20 lecturers in this series, only six were female (<https://slavic.osu.edu/kenneth-e.-naylor-memorial-lecture>). Turning now to gender, similarly, while studying at UCLA in the 1980s, only one of my Slavic linguistics professors was female: Emily Klenin (in addition to Henrik Birnbaum, Michael Flier, Alan Timberlake, and Dean S. Worth). My dissertation defense committee included Henrik Birnbaum, Alan Timberlake (co-chairs), Ronelle Alexander (UC Berkeley), and Alexander Albijanić, as well as Indo-European linguist Raimo Anttila and historian Bariša Krekić. On the diachronic axis the distribution of race and gender tells a similar story, with my academic genealogy tracing back literally to the Founding Fathers of Indo-European linguistics, Franz Bopp (1791–1867), August Schleicher (1821–1868), and Slavic linguistics, as well, e.g., August Leskien (1840–1916) and, on the “export” side, Roman Jakobson (1896–1982):

This is not meant to be an indictment of the field, but instead a recognition of the categories and demography of the field that inherited a set of interests that at first focused on discovering Indo-European origins and as such was originally focused on (assumed) genetic connections among Indo-European languages (for a deeper dive into ideological programs connected with the search for Indo-European origins, especially Indo-European mythology, including in the American academy, see Lincoln 2007)<sup>8</sup>. Nevertheless, it is clear that the field can do more to



Excerpt from The Academic Family Tree

<http://academictree.org/linguistics/tree.php?pid=108241&pnodecount=7&cnodecount=2& fontsize=1>  
(Accessed 25 May 2020)



attract a diverse pool of talent. A good model for emulation is the example of my hosts, Nagayo-sensei and Nomachi-sensei, whose motivation for studying Slavic linguistics lies both in the intrinsic intellectual endeavor itself as well as genuine curiosity for engaging with and studying the Other.

#### **4. UCLA Slavic linguistics in the 1980s**

Coming of age as a student of Slavic linguistics in the 1980s I was afforded an embarrassment of riches of which I could only appreciate later in life. As mentioned above, there were fully five senior linguistics scholars on the Slavic faculty – six if one counts the Serbo-Croatian language specialist Aleksandar Albijanić. This is a number that is unthinkable today. The strongest Slavic linguistics programs in the US today might boast as many as three (e.g., Kansas, Indiana, Ohio State) and most of the Slavic linguistics graduate programs from the period have disappeared, shifting instead to language and literature foci (UCLA among them). Recently, while rereading the marvelous annotated English translation of Jakobson's *Remarques sur l'évolution phonologique du russe compare à celle des autres language slaves* by Ronald F. Feldstein (Jakobson/Feldstein 2018)<sup>9</sup> with my own graduate students, I am reminded of how central this text was to the particular brand of structuralist thought that informed virtually all of my coursework. If one was inclined to pursue phonology, as I was, one could take classes in the Department of Linguistics with the phoneticians and phonologists such as Patricia Keating and Peter Ladefoged, as well as get to know the workings of the UCLA Phonetics Laboratory. Just as rich was the opportunity to cross-train in the UCLA Indo-European Studies program, which boasted eminent names such as Raimo Anttila, Marija Gimbutas, Jaan Puhvel, Hartmut Scharfe, and Terence Wilbur, in addition to Henrik Birnbaum, who represented Balto-Slavic linguistics. Among the scholars who gave visiting lecturers during my time were Claude Lévi-Strauss, Tamaz Gamkrelidze, and Oleg Nikolaevič Trubačev. I had the good fortune to have the opportunity study intensively with the distinguished Yugoslav dialectologist Pavle Ivić, who was a senior Fulbright visiting scholar in 1985. Professor Ivić guided me through my first article on Slovene dialectology (Greenberg 1985)<sup>10</sup> as well as suggested looking into the Cankova, Prekmurje Slovene dialect description of Avgust Pavel (1909)<sup>11</sup>, which led to my decision to focus on Prekmurje Slovene historical phonology in my PhD dissertation (Greenberg 1990)<sup>12</sup> and later published a translation and critical edition of Pavel's proposed standard grammar of Prekmurje (Pavel and Greenberg 2020<sup>13</sup>).

Not only was UCLA a rich environment for Slavic linguistics (alongside equally strong undergraduate and graduate degree programs in Russian and other Slavic literatures), but the

UCLA Slavic Department collaborated closely with its sibling department at UC Berkeley, most notably through annual joint colloquia alternating between the two campuses. In my case this gave me access to expertise from Slavists such as Johanna Nichols, Boris Gasparov, and Ronelle Alexander. I mention Ronelle last, because she was an important mentor to me as I was developing my dissertation topic. Had I not already had two “domestic” co-chairs at UCLA, Henrik Birnbaum and Alan Timberlake, by rights, Ronelle Alexander should have been the third. Also, a product of Pavle Ivić’s mentorship, Ronelle had been a pioneer as one of the first American scholars who undertook fieldwork in Yugoslavia in the 1970s — along with Kenneth Naylor and Victor Friedman — and was, to my knowledge, the first American woman to do so. Her example, as well as her dissertation, an important treatise on the accentuation of Torlak dialect varieties, published in 1975<sup>14</sup>, encouraged me to undertake this kind of work for my dissertation. She helped me with the essential details of how to conduct fieldwork, both ethically and practically, and gave me invaluable tips on the particularities of taking effective field notes. I even emulated her practice of taking a Volkswagen as the preferred mode of transportation to the field, though I had made the mistake of shipping my VW Rabbit, made for the US market, to Europe (via Antwerp), which turned out to be a fundamental error: the European “twin” model Golf to the Rabbit for the US market was identical on the outside, but the electronic systems were fundamentally different. Naturally, the electronic systems were the first to malfunction, which meant that I often found myself seeking help from ingenious local mechanics. One of them discovered a new way to start the car, bypassing the defective solenoid, which required a passenger to hammer the starter through a tire iron while I turned on the ignition switch. Nevertheless, the frequent car troubles meant more surreptitious contact with local dialect speakers, which in turn had a felicitous effect on my familiarity with ambient dialect variation throughout the central and eastern parts of Slovenia.

It may seem unfathomable to today’s readers to imagine making international connections to facilitate research without the aid of the Internet, but it was possible, albeit somewhat slower than things go today. Alan Timberlake supplemented our study of South Slavic pitch-accent systems, which the graduate students in the UCLA Slavic program were learning through Pavle Ivić’s seminars, by providing impromptu lectures on the achievements of the Moscow Accentological School. I found these lectures mesmerizing and they provided a framework to think about how I might approach my fieldwork in Prekmurje. In turn, Prof. Ivić suggested I contact the Dutch accentologist and fieldworker, Willem Vermeer. After corresponding for some time, Willem, who had by then become a significant mentor, suggested that I stop in Amsterdam on my way to Yugoslavia before I began my Fulbright Dissertation year in 1988 so that I can meet the Dutch dialectologists, Janneke Kalsbeek, H. Peter

Houtzagers, and the then-doctoral student, Han Steenwijk, who was at that time preparing to study the Slovene dialect of V Bili/San Giorgio in the Resia Valley of Italy and later published one of the first (and still rare) comprehensive grammars of a Slovene dialect (Steenwijk 1992)<sup>15</sup>. Meeting these accomplished fieldworkers gave me further encouragement to pursue fieldwork as well as concrete ideas about how best to collect field data. While my UCLA mentors advocated working from questionnaires — a time-honored tradition that goes back to the beginnings of European dialectology — the Dutch School preferred spending long stretches of time living in the dialect environment and extracting desired forms from natural contexts, even if one needed to wait a very long time for those forms to emerge in the course of natural discourse. My own approach ended up being a compromise between the two, though biased more towards the questionnaire, as I had neither the time nor the patience to stay for long periods of time in the field. (At the time I had started a family in Ljubljana, with my life partner, Marta, who has also been my de facto teacher of standard Slovene and the Upper Carniolan dialect, a Slavist who not only speaks a pitch-accent dialect of Slovene, but can also recognize the pitch contrast.) The Dutch School experts also pointed out the complementary concerns of their school to the Moscow Accentological School (MAS), which both take as a starting point the “Stangian revolution” represented in Stang’s 1965<sup>16</sup> monograph. While the MAS focused on working out the lexical membership of the paradigmatic accent types, the Dutch School sought, inter alia, evidence of the pitch and quantity contrasts in the desinential morphemes as found in Western South Slavic dialects. Not working in a particular American tradition, the result of my dissertation was a hybridization of these two approaches as well as a characterization of the internal differentiation of the Prekmurje dialect with regard to segmental and word-prosodic innovations.

These were the sort of theoretical issues that occupied me at the time I was undertaking my dissertation work. The application of these theories was put into practice in the last years of the 1980s, when I lived in Ljubljana and was affiliated with the University of Ljubljana as my Fulbright host institution. From here I was able to enjoy formal and informal mentorship from a range of outstanding senior scholars as well as the camaraderie and support of scholars my age and those just beginning their careers. Professor Jože Toporišič served as my formal mentor and had kindly encouraged me to publish one of my first papers, begun under Professor Ivić, in the venerable *Slavistična revija* (Greenberg 1985)<sup>17</sup>.

### **5. Teaching in the Midwest (1990s, 2000s)**

The job market for Slavic linguists was difficult in 1990 when I sought my first job after the PhD. The fall of the Wall the year before had just started to set in motion the cascade of

changes that was to bring the Cold War to an end, the main driver of interest in the Slavic-speaking countries from the perspective of higher education in the US. Nevertheless, the field was perceived as “full” at that time, as most of the major positions were filled by mid- to late-career Slavists of first and second post-Jakobsonian waves. As I recall, I had two or three interviews at the first-round job-market session at the AATSEEL that year. I do not recall exactly which universities turned me down, except that I later received a kind note from Professor Lunt (who had not been on the search committee) saying that he regretted that I could not join the faculty there, as it would have been interesting to have someone with Slovene expertise. But historical-comparative Slavic linguistics was hardly driving hiring agendas then. Frankly, it was a relief not to have to adjust culturally to the Ivy milieu, where I would not have fit on several levels. The on-campus invitation that year came from Indiana University, which was one of my aspirational schools. It boasted a robust tradition of study of Uralic and Turkic languages, in addition to Slavic, which fit with one of the directions I was hoping to develop, and also Ron Feldstein and Henry Cooper, Jr. were there, a Slavic comparativist and South Slavic literature specialist, respectively. George Fowler, now the publisher of *Slavica*, got the job at Indiana, which freed up the job he left at the University of Kansas (KU), which in turn opened up the opportunity for me to start my career in Lawrence, Kansas. George had replaced the late Herbert Galton at KU, who had retired to a prestigious emeritus position at the University of Vienna. I soon found myself in the omphalos of the America, which I knew little about, save for the brief experience I had during my recruitment visit. My first impression was a romantic one: staying at a guest house I heard the horns of the Union Pacific train in the distance, which evoked the sense being at the very crossrails of trade between the East and West coasts and simultaneously connected to the lore of the westward expansion, which, on the other side of the coin is also fraught with a darker side—the suppression of native American people and their languages. Nevertheless, Lawrence, an oasis of counterculture and liberalism, is also home to Haskell Indian Nations University, drawing students from indigenous populations across the US.

The University of Kansas turned out to be a good fit for my interests. I had just finished my dissertation that summarized a historical analysis of phonological variation in the Prekmurje dialect of Slovene (Greenberg 1990)<sup>18</sup>. The work was hardly what was considered a ticket to an academic job in the US, which was held to be “anything concerned with Russian.” Fortunately, KU was home to scholars who valued things Slovene and South Slavic, including Bill March, who had written his own dissertation on Kajkavian dialectology (March 1981)<sup>19</sup>, and Joseph Conrad, who was a fan of all things Slovene and Serbo-Croatian. I was fortunate to have been taken under the wing of the then-chair of the Slavic Department, the late Stephen J.

Parker, who fancied that I reminded him of himself at an earlier age, perhaps because we both came from Ashkenazi families. But Steve came from an academic dynasty – both of his parents had been academic and his mother had been a Russian literature scholar, whereas I was the first in my family to finish college, let alone earn a PhD. In many ways, the Slavic Department at that time housed the last exponents of various interesting strains of Slavic scholarship. Stephen Parker was among the last students of Vladimir Nabokov at Cornell University (see Parker 1987)<sup>20</sup>. Jadwiga Maurer, a Holocaust survivor and celebrated writer on the myth of Adam Mickiewicz, was the “last voice of Jewish Galicia” (Maurer 1990)<sup>21</sup>; and Maria Carlson, Russian intellectual historian (Carlson 1993)<sup>22</sup> from a Ukrainian family, among the last scholars who were born in Displaced Persons camps and were, as such, the last wave of survivors of the Second World War to contribute to the tradition of Slavic studies in the US from émigré demographic of the first half of the 20th century. In a sense, then, KU was a bastion of the Slavic scholarly world where precious corners of the Slavophone world could find safe haven against the inexorable march of broader, arguably military-industrial and national security interests. Before my time at KU, there had been a string of Fulbright visiting scholars from former Yugoslavia, who in turn were or subsequently became prominent scholars, including the late Helga Glušič, a leading literary scholar of Slovene contemporary prose; Velemir Gjurin, the star of the Slovene folkloric cult film *Srečno, Kekec!* and prominent linguist and champion of Slovene language equality in Yugoslavia; Miran Hladnik, the doyen of Slovene popular literature; Krinka Vidaković-Petrov, and eminent Serbian scholar of comparative literature. Among our PhD students was Michael Biggins, polyglot and translator of important works of literature from the former Yugoslav space, and now head of Slavic, Baltic, and East European Collections at the magnificent Suzzallo Library at the University of Washington. The Croatian, Serbian, and Slovene diaspora communities in Kansas City have kept a steady stream of interest in studying their heritage languages and literatures, so we were able to hire my spouse, Marta Pirnat-Greenberg, already a seasoned pedagogue from the University of Ljubljana and a former Fulbright at Yale University, as a lecturer and author of a textbook on Slovene (Pirnat-Greenberg 2015)<sup>23</sup>. She has continued the long tradition of instruction in both Slovene and what is now called BCMS—Bosnian, Croatian, Montenegrin, and Serbian—after the establishment of four national standards as successor to Serbo-Croatian of ex-Yugoslavia.

In later years I found myself, somewhat by default, the chair of the Department of Slavic Languages & Literatures at KU (2000–2011). During this time we rebuilt the department with new scholars after a relatively long period of stagnation. Building on our South Slavic traditions, we brought in Stephen J. Dickey, who, along with his translations of

Bosnian, Croatian, and Serbian literature (Selimović, Rakić and Dickey 1999<sup>24</sup>; Pekić, Rakić and Dickey 2005<sup>25</sup>; Jergović and Dickey 2011<sup>26</sup>), has become a distinguished scholar of Slavic verbal aspect and a leading US exponent of the cognitive approach to Slavic morphosemantics (Dickey 2004<sup>27</sup>, forthcoming<sup>28</sup>). We also increased our Slavic linguistics strengths with the hire of Renee Perelmutter, who was first charged with building the Yiddish-language program and now heads the Jewish Studies Program and, inter alia, publishes on Slavic semantics, critical discourse and pragmatics in Russian (Perelmutter 2009<sup>29</sup>, Hasko and Perlmutter 2010<sup>30</sup>). We also enriched our pan-Slavic offerings by hiring Svetlana Vassileva-Karagyozova, a scholar and polyglot specializing in Czech and Polish literatures, though she, herself, is from Bulgaria and wrote her dissertation on the Baroque in Bulgarian literature (Vassileva-Karagyozova 2013<sup>31</sup>). Her focus in her post-graduate career has been on the coming-of-age novel in the late and post-Communism (Vassileva-Karagyozova 2015<sup>32</sup>). Among the last hired on my watch is Ani Kokobobo, the current chair of the department and a leading Tolstoy scholar (Kokobobo 2018<sup>33</sup>), as well as Ismail Kadare's handpicked English translator (Kadare and Kokobobo 2018<sup>34</sup>). The department was transformed in remarkably positive ways during these years: it gained wide-ranging expertise and representations of perspective both in terms of gender and cultural background. As such, the department is unique not just in the context of Kansas and the US Midwest, but perhaps also in the Slavic field, in general. One thing is certain: the demographics of our department look very different from the white male West European heritage that make up the academic pedigree that I mentioned earlier in this essay.

## **6. Where do we go from here?**

During the completion of this essay, which I had begun more than a year ago, the University of Kansas and virtually all campuses across the US, are closed due to the Coronavirus epidemic. It is May 2020 and university administrations are struggling to decide on their way forward for the coming academic year. As a faculty member, I am settling into the rhythm of summer research and this season seems different from previous years. At the moment, my central project is serving as editor-in-chief of the Brill *Encyclopedia of Slavic Languages and Linguistics* (Greenberg and Grenoble 2020<sup>35</sup>), which involves continuous contact with many of the active Slavic linguists in the US, Canada, Europe, and Asia. The conversations via email and video-conferences reflect uncertainty about and instability in the future of Slavic linguistics. Employees and faculty are being sorted into “essential” and “non-essential” categories, with the ambiguous implications: they may be required to be present on the physical campus or can work from home; they may be indispensable to the institution one year hence or they may be slated for separation from the institution under the premise of financial

exigency. In the US context, the connection between retaining a reserve of critical knowledge about world areas already loosened in favor of market forces. Much of the intellectual and social achievement in our field sketched in this essay is under threat of precipitous loss, if not outright elimination, in the near term unless new thinking and new funding models are put quickly in place.

The *Encyclopedia* project just mentioned seems the best possible investment of time and energy at the current moment. As things are developing in both the US and Europe (similar concerns have been raised, for example, by Slavists in the Germanophone world, see, e.g., Birzer et al. 2020<sup>36</sup>), Slavic linguistics is paradoxically at both a high level of sophistication and development and at the same time on the brink of disappearing from university curricula altogether. The *Encyclopedia* will allow us to capture in amber the achievements of the golden age of Slavic linguistics and pass it on to future generations.

## Notes

- <sup>1</sup> This paper is a somewhat updated version of the lecture with a slightly different title, “What does it mean to do Slavic linguistics today?” delivered 17 October 2018 at Waseda University. I wish to thank my hosts on this occasion, Professor Susumu Nagayo (Waseda U.) and The Japan Society of the Study of Slavic Languages and Literatures, as well as Professor Motoki Nomachi of the Slavic Eurasian Research Center, Hokkaido University, where I lectured on South Slavic dialectological matters later that week. It was a great honor to be able to visit the important centers of Slavic studies in Japan and to have an opportunity to exchange views with leading scholars in the country.
- <sup>2</sup> US Department of Education. N.d. The History of Title VI and Fulbright-Hays: An Impressive International Timeline. <https://www2.ed.gov/about/offices/list/ope/iegps/history.html> (accessed 20 May 2020)
- <sup>3</sup> MLA Language Enrollment Database, 1958–2016. New York: Modern Language Association. [https://apps.mla.org/flsurvey\\_search](https://apps.mla.org/flsurvey_search) (accessed 10 April 2020)
- <sup>4</sup> Goldberg, David, Dennis Looney, and Natalia Lusin. 2015. *Enrollments in Languages Other Than English in United States Institutions of Higher Education, Fall 2013*. New York: Modern Language Association. [https://apps.mla.org/pdf/2013\\_enrollment\\_survey.pdf](https://apps.mla.org/pdf/2013_enrollment_survey.pdf) (accessed 20 May 2020)
- <sup>5</sup> Friedman, Amelia. 2015. American’s Lacking Language Skills. Budget Cuts, Low Enrollments, and Teacher Shortages Mean the Country is Falling Behind the Rest of the World. *The Atlantic* (10 May 2015). Online: <https://www.theatlantic.com/education/archive/2015/05/filling-americas-language-education-potholes/392876/> (accessed 1 October 2018)
- <sup>6</sup> Shaley, Asaf. 2020. Exclusive Data from the Pentagon’s Language School Offers Insight into America’s Shifting Foreign Priorities. *Monterey County Weekly*, 16 January 2020. <https://www.montereycountyweekly.com/news/cover/exclusive-data-from-the-pentagon-s-language-school->

- offers-insight/article\_3e1cf8fa-37de-11ea-8637-f3432fc92073.html (accessed 27 January 2020)
- 7 Newfield, Christolher. 2011. *Unmaking the Public University: the Forty-Year Assault on the Middle Class*. Cambridge: Harvard University Press.
  - 8 Lincoln, Bruce. 2007. *Theorizing Myth: Narrative, Ideology, and Scholarship*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
  - 9 Jakobson, Roman. 2018. *Remarks on the Phonological Evolution of Russian in Comparison with the other Slavic Languages* (translated by Ronald F. Feldstein). Cambridge, MA: The MIT Press.
  - 10 Greenberg, Marc L. 1985. Prozodične možnosti v slovenskem knjižnem jeziku in slovenskih narečjih. *Slavistična revija* (Ljubljana) 35: 171–186.
  - 11 Pavel, Avgust (Ágoston Pável). 1909. *A vashidegkúti nyelvjárás hangtana*. Budapest: A Magyar Tudományos Akadémia.
  - 12 Greenberg, Marc L. 1990. *A Historical Analysis of the Phonology and Accentuation of the Prekmurje Dialect of Slovene*. Unpublished PhD dissertation, UCLA.
  - 13 Greenberg, Marc L. (trans., ed.). 2020. Prekmurje Slovene Grammar. Avgust Pavel's Vend nyelvtan (1942). *Studies in Slavic and General Linguistics*, vol. 47. Leiden: Brill.
  - 14 Alexander, Ronelle. 1975. *Torlak Accentuation*. *Slavistische Beiträge*, Bd. 94. Munich: Verlag Otto Sagner.
  - 15 Steenwijk, Han. 1992. *The Slovene dialect of Resia: San Giorgio*. Amsterdam: Rodopi.
  - 16 Stang, Christian S. 1965. *Slavonic Accentuation*. Oslo: Universitetsforlaget.
  - 17 Greenberg, Prozodične (see footnote 10).
  - 18 Greenberg, *A Historical Analysis* (see footnote 12).
  - 19 March, William J. 1981. Kajkavian Inflectional Morphophonemics: an Analysis of the Morphology of Dialects of Velika Rakovica, Virje, and Bednja. *Rad JAZU* 388, 237–312. Za greb: JAZU.
  - 20 Parker, Stephen Jan. 1987. *Understanding Vladimir Nabokov*. Columbia, S.C.: University of South Carolina Press.
  - 21 Maurer, Jadwiga. 1990. "Z matki obcej ...": szkice o powiązaniach Mickiewicza ze światem Żydów. Londyn: Polska Fundacja Kulturalna.
  - 22 Carlson, Maria. 1993. *No Religion Higher Than Truth: A History of the Theosophical Movement in Russia, 1875-1922*. Princeton, N.J.: Princeton University Press.
  - 23 Pirnat-Greenberg, Marta. 2015. *Colloquial Slovene: the Complete Course for Beginners*. London: Routledge.
  - 24 Selimović, Meša, Bogdan Rakić (translator), and Stephen M. Dickey (translator). 1999. *Death and the Dervish*. Evanston: Northwestern University Press.
  - 25 Pekić, Borislav, Stephen M. Dickey (translator), and Bogdan Rakić (translator). 2005. *How to Quiet a Vampire: a Sotie*. Evanston: Northwestern Univ. Press.
  - 26 Jergović, Miljenko, and Stephen M. Dickey (translator). 2011. *Ruta Tannenbaum: a Novel*. Evanston: Northwestern University Press.
  - 27 Dickey, Stephen M. 2004. *Parameters of Slavic aspect a cognitive approach*. Stanford: CSLI.



- <sup>28</sup> Dickey, Stephen M. Forthcoming. *The Evolution of Slavic Aspect*. Berlin: de Gruyter Mouton.
- <sup>29</sup> Perelmutter, Renee. 2009. Pragmatic functions of reported speech with jako in the Old Russian Primary Chronicle. *Journal of Historical Pragmatics*. 10 (1): 108–131.
- <sup>30</sup> Hasko, Viktoria, and Renee Perelmutter. 2010. *New Approaches to Slavic Verbs of Motion*. Amsterdam: John Benjamins. Bottom of Form
- <sup>31</sup> Vassileva-Karagyozyova, Svetlana. 2013. *Po pátja na baroka: recepcija i transformacija nabarokovata paradigma v slavjanskite literaturi*. Sofia: Universitetsko izdatelstvo “Sv. Kliment Okhridski.”
- <sup>32</sup> Vassileva-Karagyozyova, Svetlana. 2015. *Coming of Age Under Martial Law: the Initiation Novels of Poland’s Last Communist Generation*. Rochester: Rochester University Press.
- <sup>33</sup> Kokobobo, Ani. 2018. *Russian Grotesque Realism: the Great Reforms and the Gentry De cline*. Columbus: The Ohio State University Press.
- <sup>34</sup> Kadare, Ismail, and Ani Kokobobo (translator). 2018. *Essays on World Literature Aeschylus, Dante, Shakespeare*.
- <sup>35</sup> Greenberg, Marc L. and Lenore Grenoble (eds.). 2020. *Encyclopedia of Slavic Languages and Linguistics Online*. Leiden: Brill <https://referenceworks.brillonline.com/browse/encyclopedia-of-slavic-languages-and-linguistics-online>
- <sup>36</sup> Birzer, Sandra, Christina Clasmeier, Stefan Heck, Imke Mendoza, Barbara Sonnenhauser, and Björn Wiemer. 2020. *Wissenschaftlicher Nachwuchs und das Selbstverständnis der Slavistik*. *Bulletin der Deutschen Slavistik*. <http://www.slavistenverband.de/Bulletin.html>

## **Slavistička lingvistika u SAD-u danas**

Marc L. Greenberg

U radu se daju određena zapažanja o trenutnom stanju slavističke lingvistike u SAD-u s obzirom na puteve njenog razvoja u drugoj polovini dvadesetog stoljeća do danas, s nastojanjem da se poveže konkretno autorovo iskustvo i neformalna analiza višestrukih tendencija koje su utjecale na pojavu pravog procvata i razvitka slavističke nauke o jeziku, a također i uz nastojanje da se da smisao i sagleda značaj ove oblasti nauke u kontekstu savremenog američkog univerziteta. Ovdje nije cilj sagledati u potpunosti sva pitanja iz naznačene oblasti, već je polazna osnova spomenuto lično iskustvo koje se veže za početak osamdesetih godina prošlog vijeka i traje do danas. Tako je, zapravo, ovdje poseban cilj čitaocima u Japanu prenijeti datu perspektivu preko koje se mogu sagledati konkretni razvojni tokovi koji su doveli do rasta i sazrijevanja naučnoistraživačke djelatnosti u oblasti lingvističke slavistike (tj. slavističke lingvistike) u SAD-u. Rad je pisan s nadom da će predstavljanje naznačene teme pomoći naučnicima da, ne samo između Sjeverne Amerike i Evrope potaknu i ostvare plodniju saradnju kroz vlastitu nacionalnu tradiciju, nego da se takva saradnja ostvari i između Japana, Sjeverne Amerike i ostatka svijeta.

【講演】

## **Post-Chornobyl: From (Non)Representation to an Ecocritical Reading of Nuclear Trauma**

Tamara Hundorova

The Chornobyl accident was a catastrophic event that occurred on the 26<sup>th</sup> of April 1986, attaining, almost immediately, a trans-temporal and transnational significance. It underwent an epic transformation, escalating from a local disaster to a global one, and from being a historical event to an apocalyptic one. As a result, the disaster took on a metaphysical shape - gaining ecological, existential, and apocalyptic meaning. As was observed by the French cultural theorist Paul Virilio, Chornobyl represents a new kind of history, a “catastrophic history” (Алексиевич 2004)<sup>1</sup> that involves the contemporary world to signify “a catastrophe of which the long-term drama of Chornobyl remains symbolic” (Virilio 2006)<sup>2</sup>.

Our article aims to examine the Chernobyl catastrophe as it has become embodied in the models of the Chornobyl genre in Ukrainian literature, particularly in its response to the (non)representation of nuclear trauma.

### **1. Introduction**

The Chornobyl disaster exerted a strong influence on the growth of a new type of nuclear consciousness that connects socio-cultural, geopolitical and environmental issues. Cultural experts emphasize that “the history of the current period – of this new era of nuclear culture – begins with the Chornobyl disaster of 1986” (Spencer 2010: 233)<sup>3</sup>. Broadly speaking, the symbolic nature of Chornobyl correlates with other catastrophic events of the twentieth century, particularly with Auschwitz and Hiroshima. According to Virilio, like Auschwitz and Hiroshima, Chornobyl is a catastrophe of consciousness. What happened, is simply beyond imagination! This means “that there can be no understanding of this event, in as much as it transcends possible consciousness” (Алексиевич 2004)<sup>4</sup>.

The nuclear apocalypse has become a significant cultural metaphor and a powerful source of imagery in modern cultural history. In its essence, it is today applicable to such disparate areas of investigation as technological progress and sociocultural roles of intellectuals, to the nature of insanity and the formation of human beings, or to the perception

of the stranger and the place of horror in human history. Finally, and perhaps most importantly, it is directly related to the concept of historical catastrophes and futuristic visions. Throughout the 20<sup>th</sup> century, nuclear imagery represented various narratives and psychological models in different literatures. For example, Hiroshima witnesses associate their impressions of the nuclear bombing with childhood images of the end of the world, separation, helplessness, or disappearance (Weart 1988:107)<sup>5</sup>. German nuclear literature links the nuclear apocalypse to genocide, preceded by the Holocaust and its gas chambers and crematoria.

In Ukrainian literature of the 1980s, Chornobyl undermined the very means of totalitarian representation, providing a visible manifestation of a distrust in the grand Soviet narratives on scientific progress and social justice. The imagination of the nuclear holocaust was from its very beginnings associated with the national and humanitarian tragedy. In this way, the Chornobyl nuclear trauma (non)representation became for artists both an ethical and aesthetic challenge. This task was particularly problematic in the framework of socialist realism as it sought to comprehend and represent an objective or final “truth” of reality.

Reflecting on the new forms of representation generated by the writings on Chornobyl, Marko Pavlyshyn has suggested a new term – the “Chornobyl genre”. In his view, three trigger points determine the attributes of this genre, – “the first one is stylistic (“colloquial language” vs. “elevated style”); the second one is moral and synchronous (criticism vs. apologetics); and the third one is moral and diachronic (evaluation of the same phenomena from the standpoint of the past vs. present)” (Павлишин 1997: 177)<sup>6</sup>. Revealing the meaning of these concepts, Pavlyshyn addresses the phenomenon of (non)representation as a refusal to expose a global event through first-hand experience. For this purpose, the authors select “the most objective modes of expression,” such as authentic interviews or documents collections. While documentary literature in its essence “maintains respect toward the awe and grandeur of the topic,” writes the scholar, “fiction does not do that by definition and is, therefore, often disappointing by creating the impression of inadequacy” (Павлишин 1997: 179)<sup>7</sup>. He concludes that the Chornobyl genre should be defined by a “constant reference to the specificity and the problematic nature of the author’s position regarding the topic” (Павлишин 1997: 179)<sup>8</sup>.

It is the models of the Chernobyl genre and their response to the nuclear catastrophe in Ukraine that we now turn to examine.

## **2. Discourse of the Chornobyl (Non)representation**

Among the numerous works on Chornobyl, Ivan Drach’s poem *Чорнобильська мадонна* [*The Chornobyl Madonna*] (1988) drew a wide response still in the Soviet period.

Here, the “(non)representation” is introduced through one of the main rhetorical modes. The very intention to associate the Chornobyl tragedy with the symbolic image of the Madonna sets a rhetorical trap. On the one hand, it makes it possible to write about the Chornobyl Madonna as a cultural topic. The author’s position, in this case, is reduced to the role of an impartial spectator: “to portray her the way my quill is able to describe her” (Драч 1988: 43)<sup>9</sup>. On the other hand, there is another possibility, the realization that there is no author who can portray the majestic and the eternal sense of the sacral: “You try to write about Her, yet She guides your hand, / You are merely an incapable pen, a worthless dust, a pencil.” (Драч 1988: 43)<sup>10</sup>. The poem thus turns to the description of the elevated and extraordinary phenomena that diminish the creative individual. As the consequence, the author experiences a lack of faith in his own words: (“And I am speechless. Executed up to the last word”).

In *The Chornobyl Madonna* Drach appeals to fragments rather than to the whole, to the voices of “others” rather than to his own voice. These fragments, – e.g., such images as Vasyl Kurylyk (William Kurelek)’s painting and a postcard; the tale of a soldier in a construction battalion about the naked footprints of a stranger’s mother; the remarks of an old woman with a cow in cellophane fleeing the city to her house in the zone; the voices of a Chornobyl female tractor driver; or the Khreshchatyk Madonna, – form and extend the image of the mythological Chornobyl icon. As a result, this image becomes vividly and boldly multifaceted and multi-personal.

The semantic scope of Drach’s poem is intensely variable. The impersonations of the Madonna change from the abstract, sacral, and majestic to the lifelike and corporeal. The text is also to the highest degree eclectic and polyphonic. Not only does it project the voices of specific characters (such as those of Kurylyk, the soldier, or the old woman), it also encompasses in the form of epigraphs the voices of a multitude of living authors who have written about the Chornobyl tragedy (epigraphs from Svitlana Iovenko’s *Вибух* [*The Explosion*]; Volodymyr Yavorivsky’s *Марія з полином у кінці століття* [*Maria with Wormwood at the End of the Century*]; Yuriy Shcherbak’s *Чорнобиль* [*Chornobyl*]; Borys Oliynyk’s *Випробування Чорнобилем* [*The Chornobyl Trial*]).

Even though the composition of the work appears fragmented, the epigraphs from contemporaneous works on Chernobyl serve to create coherence, enrich various plot peripeteia, and shape the writing on Chornobyl into a “text of texts.” On the other hand, epigraphs from the works of classical Ukrainian writers (Taras Shevchenko, Pavlo Tychyna, and Vasyl Symonenko) broaden the scope of comparisons and amplify the significance of to this “text of texts”. They also maintain the work’s dominant style, – the elevated and mournful tone of the lyrical narrative.

Manifold shifts of contrasting stylistic dimensions – realistic and symbolic, sacral and secular – define the structure of the poem. Poetry is combined with prose, free verses with rhymed verses, and irony with sarcasm and sorrow. In particular, the poet directs his anger against those people, who liked to speak of their love to the motherland, but left her to her own devices the moment “the black atom shrugged”. This sarcasm and accusations weaken the pathos of the poem. However, the tension of the voices and the stylistic shifts gradually vanish. The poem draws to a conclusion with a direct rhetorical appeal to the politician, power engineer, and scientist - containing criminal accusation. In this way, a rhetorical justification of the lyrical speaker takes place, – by redirecting the fault to others, he hides in the silence: “And I, I, an adulator, / ... Have lost my depraved voice, /and remain without speech for ages” (Драч 1988: 62)<sup>11</sup>.

Although the work shows us that it is impossible to represent Chernobyl directly, it unveils to us how it can be accomplished indirectly –e.g., through a system of fragmentary devices, symbols, signs, epigraphs, and variant poetic voices. However, since Socialist realism still dictates that all artistic expression must reveal an author’s ideological position, the author projects at the end the multifaceted guilt into one voice of absolute condemnation.

Drach’s poem represents the post-apocalyptic nuclear discourse. According to Jacques Derrida, the post-apocalyptic discourse that appears after a catastrophe represents “the remainders of a recently destroyed correspondence”. Destroyed by fire or by that which figuratively takes its place, it leaves nothing behind, not even “the cinder of cinders” (Derrida 1987:3)<sup>12</sup>. After a catastrophe, such a discourse arises from unconventional modes of communication, conversational interruptions, vanished fragments of writing, missing names (signatures), the remaining postcards and letters with faded out words, phrases, and whole messages. On the nature of this writing, he observes: “[W]hat is not said here (so many white signs) will never get there....”. This is “a letter to the extent that nothing of it remains that is, or that holds. It destines the letter to its ruin” (Derrida 1987: 249)<sup>13</sup>.

In the new post-catastrophic writing, Derrida proposes to abandon the conventional communicative form of a message because of its uncertainty: “Who is writing? To whom? And to send, to destine, to dispatch what? To what address?” (Derrida 1987:5)<sup>14</sup>. He proposes to depart from the communicative act itself, because all the contacts have been disrupted, the language destroyed, the people wiped out, and the author and addressee are no longer obligatory parties of such an act. Therefore, post-catastrophic writing presupposes “[t]hat the signers and the addressees are not always visibly and necessarily identical from one envoi to the other, that the signers are not inevitably to be confused with the senders, nor the addressees

with the receivers, that is with the readers (you for example)” (Derrida 1987:5)<sup>15</sup>.

The Chornobyl post-catastrophic discourse produced its own witness and its own destroyed correspondence. In 1997, a decade after the Chornobyl disaster, Svetlana Alexievich had collected survivors’ testimonies in a book *Чорнобиль: хроніка майбутнього* [*The Chornobyl Prayer (A Chronicle of the Future)*]. These personal evidences are endowed with a tone of apocalyptic catastrophism. In the Preface to the English translation of the book (entitled *Voices from Chornobyl. The Oral History of a Nuclear Disaster*, 1997), Keith Gessen, the translator, notes that some of the materials collected in the book are “macabre”, but one thing that makes these personal evidences unique is “the very mundane mediocrity of these testimonies” (Alexievich 1997: X)<sup>16</sup>. The title highlights the specific form of the oral testimonies of those who were dying of radiation poisoning. Those, who asked the author to write down everything they felt and saw, uttering: “I do not understand it, and you probably will not understand, but write it down” (Алексиевич 2004)<sup>17</sup>. Alexievich emphasizes that in the process of taking down the stories of these terminally ill people, she had the impression that everything which was said had to do with the future, rather than with the past.

Svetlana Alexievich also stresses that Chornobyl is a phenomenon that cannot be depicted mimetically. This is why it stipulated the need to find a new method of the “non-representable” representation. Oksana Zabuzhko, who translated Alexievich’s *The Chornobyl Prayer* into Ukrainian, notes that the author tends to refrain from direct speech and from conventional situations in which the narrator mediates between characters and readers and is entitled to express evaluative judgment. Being honest, the author tries not to impose her “own truth” as it would misrepresent the “partial “truths” of the survivors. The traditional method of socialist realism would have “dictated that the ultimate goal of such interviews is to obtain a confirmation of the author’s ideas (Забужко 1998: 188)<sup>18</sup>. This is here no longer the case.

In the book, the Chornobyl disaster arises from the narratives of witnesses. It exists as a collective record of the memories of an objective truth, rather than as a fictionalized story. What transpires is hardly possible to put into words. For example, Mykola Khomych Kalugin, a father who lost his daughter, testifies that Chornobyl exists as the pain in his consciousness, and its story is a story of a treason. “When I talk about this,” he says, “I have this feeling as if my heart tells me “you’re betraying them”; “I need to describe it like a stranger ... to suffer like this”; “I want to bear witness: my daughter died from Chornobyl. And they want us to forget about it” (Alexievich 1997: 33)<sup>19</sup>. Thus, the narrative goes beyond the limits of conventionality and fictionality. It culminates in the silence or broken speech of a “Chornobyl person”.

In Alexievich’s book, one man waives his right to speak. His speech is inconsistent

and choppy, he is at a loss for words. He is aware that his testimony is fragmentary and impossible to articulate. As a result, he merely alludes to himself as a “Chornobyl person”, incapable to relate the actual experience: “We lived in the town of Pripyat. In that town”, and “I’m not a writer. I won’t be able to describe it. My mind is incapable of understanding it. And neither is my university degree. There you are: a normal person. A little man. You’re just like everyone else, you go to work, you return from work. You get an average salary. Once a year you go on vacation. You’re a normal person! And then one day you’re turned into a *Chornobyl person!*” (Alexievich 1997: 31)<sup>20</sup>.

It is a known fact that witnesses of catastrophic events are mostly incapable of mediating between the traumatic exposure and post-traumatic objectivity. According to Giorgio Agamben, all “testimonies contain at their core an essential lacuna; in other words, that the “survivors bore witness to something that was impossible to bear witness to. As consequence, commenting on the survivors’ testimony necessarily meant to interrogate this lacuna or, more precisely, attempting to listen to it” (Agamben 1999:13)<sup>21</sup>.

### **3. Discourse of the Uncanny and Chornobyl catastrophism**

The metaphorical transformation of Chornobyl into a global symbolic concept represents one of the forms of the interrogation of the lacuna created by the nuclear discourse. In the 1990s the notions of a “*national Chornobyl*”, a “*spiritual Chornobyl*”, an “*ecological Chornobyl*”, and a “*linguistic Chornobyl*” were widely used in Ukrainian literature to describe the variant shapes of catastrophic crises. Chornobyl was seen “not only a disaster of the natural environment, but also as a disaster of the inner world, a catastrophe of our morality and spirituality”, a tragedy, signifying “the extinction of the nation” (Курик 2009)<sup>22</sup>.

The very notion of the “*spiritual Chornobyl*” was developed by Ukrainian dissident poets and intellectuals of the 1960s, the so-called *Sixtiers* (*Shestydesiatnyky*) who adhered to concept of ‘the power line of the Spirit’ (Дроздовський 2011)<sup>23</sup>. This generation of Soviet Ukrainian intellectuals considered Chornobyl not merely as a literary topic (Ivan Drach, Ievhen Sverstiuk, Lina Kostenko, and Borys Oliynyk commented immediately on the Chornobyl disaster), but rather as a sign of a global *post-Soviet* crisis.

One of the major poets of the sixties, Lina Kostenko, has used Chornobyl to convey its ecological and humanitarian devastation. Born in the Polissia region, close to Chornobyl, Kostenko participated in expeditions organized to preserve cultural monuments in the Chornobyl zone. She has sought to replace the technogenic connotations, associated with the Chornobyl disaster, with ethical and national ones. Kostenko wrote:



Leave the studies of the technogenic aspects of the disaster to the experts. Let us address the subject with the people at its core. The consequences of the disaster on that 4000 square kilometer ‘patch’ of land in the very heart of the Slavic world are to the present day not properly known even in Ukraine. The entire domain of the ancient Polishchuk culture is disappearing before our very eyes [...], a fatal explosion has destroyed (blown off) all that we have so often and so passionately called /our/ ‘culture and spirituality’ (Махун 2005)<sup>24</sup>.

The closing of the Chornobyl Nuclear Power Plant provoked Kostenko’s emotions to create a novel, entitled *Записки українського самашедивого* [*Notes of a Ukrainian Madman*] (2010). The writer’s subsequent disastrous perception of Chornobyl as a global phenomenon (*Ukraine as victim and cause of the globalization of disasters*, 2003) was based on catastrophism as a distinctive model of humanitarian thinking. Kostenko asserts that “What is globalized are not only the economics, or universal conditionality of interests. The conflicts and premises for the environmental, anthropogenic, and moral disasters are globalized as well” (Костенко 2003)<sup>25</sup>.

Kostenko’s novel *Notes of a Ukrainian Madman* clarifies the function of nuclear catastrophism. The novel can be seen as an embodiment of the Chornobyl apocalypse projected on the early 21<sup>st</sup> century. Apart from the rather naive plot of a young thirty-five-year-old programmer who is a representative of the *Ninetiers* and lives in an absurd world at the beginning of the current millennium, the book comprises a list of disasters, meticulously compiled from television news reports, rumors, and newspapers. The novel’s protagonist comments ironically on contemporary history: «We have greeted the year 2000 in a proper manner. One neighbor jumped from the eighth floor. One acquaintance drowned herself in a bathtub. A new president came to power in Russia and started a new Chechen war” (Костенко 2011: 10)<sup>26</sup>.

However, the authoress presents the story from the perspective of the disasters. This perspective influences both the personal events and shared national history. The protagonist is merely a tool transmitting news and information, an embodiment of media. News and disasters overshadow the world and turn it into a kaleidoscope, – “you shake it, and there’s a new picture to delight the sight. You shake it, and there’s something new. But now, the pictures are getting more and more terrifying with each shake” (Костенко 2011: 13)<sup>27</sup>. In fact, such images are abundant. Gradually, they start to substitute reality, transforming it into a permanent performance:

It's a disaster here, a terrorist attack there, a methane explosion somewhere. A military plane was accidentally blown apart by a bomb. Some sort of maniac began shooting at the passers-by. An unknown infection broke out there. Children on the bus were held as hostages. A cable car fell in the Alps. A sect poisoned people with the gas in the Tokyo subway (Костенко 2011: 13)<sup>28</sup>.

Real and imagined disasters are repeated, over and over again forcing the reader, as a witness, into the sublime world of horror and dread. Repressed complexes come into play via a catastrophic vision of the world and undermine the rational perception of the events. It seems that the life is but one permanent spectacle, that draws in Kostenko's protagonist. In the late 20<sup>th</sup> century, the dread became one of the distinctive marks of post-Soviet aesthetics. According to Mikhail Epstein, "Perhaps, in the recent years, the whole country experienced this "return of the repressed". Suddenly it noticed its "unnaturally black" shadow. Thus, the uncanny had become almost the main category of post-Soviet aesthetics" (Эпштейн 2003)<sup>29</sup>.

Kostenko's novel captures three fundamental factors of post-Soviet discourse, i.e., the narrowing down of history to dreadful and catastrophic issues; the role of the media in the production of "reality"; and the transformation of the post-Soviet individual-bystander into a machine for media news transmission. Such characters are alienated from history. They are locked in an infantile state by parents behind a looking glass of the dread. Their encounter with real history gets a melancholic tone.

At first glance, in Kostenko's novel catastrophism is born with a sense of loss for a dearly loved belonging of some sort; in this case, the full-blooded Ukrainian nation. The melancholy attitude of the whole novel stems from the fact that this loss has already occurred. It cannot be stopped. And no kind of compensation, even the Orange revolution on Maidan itself, can bring it back. It can be assumed that this loss (and disaster itself) taps into an ideal vision of Ukraine, formulated by Kostenko as a representative of the generation of the *Sixtiers*. Since we do not hear the actual voice of the hero himself (he is but a means to broadcast the author's ideas), the author's perspective, as a representative of a generation leaving the stage of history, is imposed on the fate of later generations of the *Ninetiers*. This, in fact, drags them behind their forebears into catastrophic oblivion. We can therefore say that this sense of melancholy loss applies to the hero himself. He is denied the right to speak on his own behalf. It is worth noting that Kostenko has repeatedly confessed to copying her main hero's character from her own son, who was also a programmer.

In general, Kostenko's novel confirms that the mechanisms by which reality is negotiated through the media are becoming important in post-Soviet discourse, where key

events are transformed into informational events, and even a high-temperature nuclear explosion becomes, with the help of television, a cold nuclear explosion. Like the Maidan, Chornobyl can be transformed into information, which neutralizes the meaning and energy of events. The nuclear catastrophism thus becomes a mass media tool for freezing events, transforming them from being domestic and human to sublime and uncanny. Thus, discourse surrounding Chornobyl, enriched by catastrophism, demonstrates how an actual traumatic event is transformed into a mass media event of hyper-reality.

In the mass media discourse the Chornobyl explosion has been associated with the Apocalypse, the source of all disasters. Here, in the post-Chornobyl nuclear imagination, the human tragedy experiences a tangible transformation. Even the tragic (and heroic, in fact) death of Chornobyl firefighters – those who were first to take on the atomic fire and prevented a possible atomic explosion – gradually fades away against the background of an *imagined* apocalyptic catastrophe. Thus, Chornobyl is transformed into a set of data, and, as Jean Baudrillard has commented, “the observer who sees the bomb as sublime requires distance from immediate effects and threats of the bomb [...] and cultural inoculation [...]” (Baudrillard 1994: 56)<sup>30</sup>. Baudrillard draws an analogy between the atomic explosion and the informational explosion, which accelerates multiple representations of hyperreal images. It does not liberate a consciousness from the uncanny, but rather multiplies it and gives it an aesthetically-pleasing package.

Protesting against this, a Chornobyl person, Mykola Kalugin, a witness who refuses to speak and becomes symbolically “dumb,” resists the fictitious (the sham) Chornobyl and challenges it with his own “little narrative”—his own truth. His testimony is directed against Chornobyl kitsch—the sale of memories or souvenirs of the tragedy and replications of the apocalypse found in popular culture and the media. “They turned Chernobyl into a house of horrors, although actually they just turned it into a cartoon. I’m only going to tell about what’s really mine. My own truth,” says a witness of Chornobyl (Alexievich 1997: 32)<sup>31</sup>.

The Chornobyl representation becomes a phenomenon of the nuclear sublime. As early as 1984, Frances Ferguson (Ferguson 1984: 4–10)<sup>32</sup> pointed out that nuclear sublimation functions in the same way as the other types of sublimation. The nuclear sublime refers to the salvation of humanity and the earth for the sake of “the unborn generations”. But in the age of a nuclear bomb, it resonates with an image of Frankenstein and “the Gothic reversal of the sublime dream of self-affirmation, the fear that the presence of other people is totally invasive and erosive of the self” (Ferguson 1984: 8)<sup>33</sup>. Indeed, when we are dealing with nuclear sublime, we are talking about how to stay alive and remove oneself from the action of horror and sublime objects (i.e., how not to die) and how to surpass our fear of the nuclear holocaust

going beyond the power of nuclear imagination that locks us in the dread.

#### **4. From Hyper-reality Towards the Ecocritical Discourse**

Atomic catastrophes like Chornobyl confront human perception of time and space and resist human understanding. Contemporary ecocritical studies propose to consider such things as hyper-objects, – “things that are massively distributed in time and space relative to humans” (Morton 2013: 1)<sup>34</sup>. Such hyper-objects resist representation, they are often fragmentary, concentrate on individual victims and goes beyond the limits of reality. However, interest in cartography sparked after the disaster; in particular, the maps of the radioactive pollution became a popular text. Most important was the shift from geographical mapping to mental and ecological cartography in the minds of people who experienced Chornobyl. Distant travel destinations lost their attractiveness over journeys to nearby haunts and undiscovered mental expansions. Soon, symbolic realities from cultural texts of various times and nations overshadowed both the impressions of the factual occurrence of the disaster and of the experienced suffering.

Eventually, a virtual version of the Chornobyl hyper-object has evolved. It undermines the faith in an observable, authentic reality. An all-pervasive, indiscernible, immense radiation continues to reach the most unexpected and remotest places, destroys geographical markers, integrates with consciousness, and generates nonorganic, artificially designed creatures. In the case of Chornobyl, the very understanding of corporeality has also changed. Even the body has been transformed, it has become deformed, hybrid, or even entirely artificial. In the hyperreality the Chornobyl’s radiation is spreading arbitrarily and uncontrollably. Thus, it is impossible to project it on the map with established and clear-cut boundaries. On the contrary, it creates “zones” of pollution, defined as “stains.” Therefore, it does correspond to a rhizomatic picture. The picture of space thus reminds us of a punched card with separate holes – dead zones.

The Chornobyl tragedy brought in a world of hyperreality and sharpened the perception of virtual dimensions. This transformation has been experienced in the most extreme manner because it contrasted with - and destroyed the adherence to the “absolute,” “objective,” and “positive” reality, which socialist realism had for so long propagated. It destroyed the foundations of the “truth” upon which the socialist system had built its worldview. At the same time, it revealed the possibility of a complete replacement of the real world with another one. What Chernobyl accomplished was to ruin the linearity of time and space, fragmented it into zones, and showed that the tactile senses might have been deceiving. It also instilled a distrust in nature. Invisible virtual rems and roentgens obliterated physical presence and trust in real

things, imposed virtual images, and brought forth phantasmic visions. Alongside the real Kyiv, there emerged *The Chornobyl zone* - the virtual place associated with monsters and mutants, and with stalkers, just like the ones depicted in the famous film *Stalker* by Andrei Tarkovsky. It loomed over Kyiv like an empty hole where time went backwards, releasing abnormal energy.

Meanwhile, the virtual hyper-objective Chornobyl has become a favorite location for science fiction films and was used in numerous videogames, e.g., *S.T.A.L.K.E.R.* series (*Call of Prypiat*, *Wind of Change*, *Shadow of Chornobyl*, etc.). In the videogames, the photorealistic “zone of exclusion” is rendered according to its “real” prototype. The virtual reality is superimposed on the “real” map of the Prypiat city, the Ianiv train station, the Jupiter plant, the village of Kopachi, and so on. Games such as *Counter-Strike. Chornobyl* also gained popularity. These games depict the zone and set forth a whole series of wars where the virtual world defeats the real one.

The hyperreality of nuclear imagination relies on the aesthetics of the sublime. Carolyn Dekker points out that seeing the nuclear sublime as an aesthetic landscape requires both cultural inoculation and a certain estrangement from the natural world: “The observer who sees the bomb as sublime requires distance from the immediate effects and threats of the bomb [...]” (Dekker 2014: 23)<sup>35</sup>. To overcome the fear of the nuclear holocaust means to go beyond the power of nuclear imagination and break out from the dread.

According to renown Longinus, “a well-timed flash of sublimity scatters everything before it and reveals the full power of the speaker in a single stroke” (Longinus 1960: 125)<sup>36</sup>. In modern times, the sublime is treated not only as the effect of an elevated object but a result of the speaker’s distancing from the *terrible* (le grandeur), e.g., when a person is in a safe place and yet repeatedly imagines and feels danger. Actually, in such a case, the danger exists only in the imagination, while the individual, gripped by fear, seeks to overcome it - not physically, but rather internally and emotionally. In other words, the sublime experience provides for both cultural immersion and sufficient estrangement from the danger that allows us to view it as *the other*, as an aesthetic phenomenon rather than a real fact.

The position of a witness who must speak about the “frightful object” as an unspeakable hyper-object, differs. Oral testimonies are supposed to overcome the trauma of nuclear disaster and the sense of a bewitching fear of the nuclear sublime as something unspeakable but, as Dekker argues, “the nuclear-sublime attitude fetishizes sight and witness (imagined or actual) [...]” (Dekker 2014:24)<sup>37</sup>. Post-apocalyptic ecocritical thinking pulls a witness out of the unique position of a nuclear holocaust survivor and changes the focus of their story. Usually, their purpose is to witness and document the events, that, in fact, cannot be witnessed. One can only say that it was “inevitable” and “uncontrolled.”

These constraints of Chornobyl's (non)representation stipulated a new genre of Chornobyl writing, – the literature of stalkers. Recently, a new type of a Chornobyl witness has come to the fore. Representatives of a younger generation have started to talk about their sense of belonging to the Chornobyl disaster. It is mainly, those who were 4-5 years old children, when the catastrophe happened. These people claim that they were raised in an atmosphere of Chornobyl disaster reminiscences. In either case, the disaster has had a long-lasting impact on their lives and families. Thus, they want to visit Chornobyl as they feel they have a right to this place. Moreover, they want to be Chornobyl witnesses and strongly object to the idea of transforming Chornobyl into a hyperreal object.

It is this generation that established the new Chornobyl literature. In particular, Ukrainian writer Markiyan Kamysh and his novel *Оформляндія або Прогулянка в Зону* [*A Stroll to the Zone*] (2015) is a vivid example of the latter. The novelist calls his writing “a literature of first-hand experience”. Kamysh was born in 1988, soon after the disaster. However, it left a mark on his family. His father's participation in the liquidation of the Chornobyl disaster led to his early death. In the novel, Markiyan Kamysh depicts the experience of an illegal stalker in the Chornobyl Exclusion Zone. In fact, the protagonist is exploring the Zone (or *Chornobylschyna* – Chornobyl region) as a newly discovered land. The novel is not just a mere series of short stories of Zone adventures, but a text of a peculiar immersion into an “alien” territory. One can view it as an exoticization of the Zone. Indeed, it is not a coincidence, that the word “alienation” is widely used in the text of the novel.

Kamysh's description of one day in the Zone is, in fact, a testimony:

“Spent a night on a bare concrete wrapped in an oilcloth. It was about 4°C. Got a flask of booze for breakfast. Burned a fire with a book. Paved my way to the North, into the thicket of the Belarus border, to the villages marked on the map. The villages that have never been photographed. The path led me through the thick fog, over broken bridges and frosted slippery logs threatening you with an inescapable fall unless you keep your balance. Tiredness, strands of hair covered in hoarfrost... Had left 40 kilometers behind and reached the warmest potbelly stove in the whole world in the village with an old imperial pavement. The border is a bottle's throw away from the village center. It's a genuine alienation that punches you with the fists of silence and blows out the candle of your tranquility. It is right here, where the touristic routes are not paved, where the excursion buses do not come. Some people come here once a year. To commemorate. Some do not...” (Каміш 2015)<sup>38</sup>.

The novel about the Zone aims to depict its contemporary reality. However, the mental map is at the heart of the novel. As Kamysh admitted, he had drawn his own map of impressions, geography, locations and himself. To name any special features in “*A Stroll to the Zone*”, I’ll say it is the literature of the real experience, geopoetics. It is a piece where no human beings but places play a major role - the names of the towns and villages and the peculiar mapping of the landscape (Kamianka, Hornostaipil, Hubyn, Kopachi, Krasne, Olshanka, the railway station Vilcha, Buriakivka, the settlement “Rassokha”, Dytiatky, a potbelly stove in Novoshepelychi). Here, the author concentrates on his personal impressions, e.g. “Each time I headed to the Zone I found another target. [...] I wanted to poke my nose into every bit and chip of this wreckage of the past. And each time I solemnly promised myself that it was for the very last time” (Камыш 2016: 89)<sup>39</sup>. In a certain sense, it is an escapist view. Recollections about the people the author meets are on the margins of the story. The stalker expedition does not focus on communication with these people, on the establishment of contacts, or on the process of the Zone re-settlement. Here, the Zone of Alienation is filled with personal alienation.

Thus, the Zone is transformed into an object of the reality instead of the virtual topoi. The Zone serves as a parallel reality, a contrast to the city, civilization and mundane life. It is noteworthy, that another book about the Zone appeared just a year before *A Stroll to the Zone*. The documentary novel *A Chornobyl Illegal Alien’s Notebook* by Kyrylo Stepanets was published in 2014. It describes the same places and presents similar stalker experiences as the Kamysh’s book. Both authors appeal to the authentic experience and describe real places. They both share their attitude to the Zone as to the desired object. As Stepanets observes, “I was about to go on a date with the Zone” (Степанец 2014: 10)<sup>40</sup>. In fact, the stalker stories bring back the reality of Chornobyl that was repressed by the trauma. Stepanets and Kamysh restore the reality of the places, dates, and routes in the Chornobyl Zone that were lost or had vanished by the virtual phantasms. The writer records this reality thoroughly and objectively: “This book is a confession of an illegal stalker in Chornobyl. At the same time, it is a historical handbook on human settlements of the Ukrainian Polissia abandoned after the Chornobyl disaster. It is also a guidebook written by a person who had gone all around following hidden animal trails” (Степанец 2014: 5)<sup>41</sup>.

The Kamysh *reality* is violent and melancholic, menacing and desired, exotic and native, life-giving and at the same time deadly dangerous. It manifests itself as a *second presence* in a post-presence world, a world after the catastrophe. The reality for the stalker-narrator consists in the repeated illegal expeditions to the Zone, i.e., it is a permanent recurrence of the path between life and death. It is a vicious circle of the City comebacks and

the new expeditions to the Zone. Thus, a posttraumatic reality in the Zone is created via repetitions and by leaving behind traces of presence. It is a process of circling the Zone routes, its embodiment, filling it with the details of the lost time, and obscene words of Zen meditations. The heart of the *reality* in the Kamysh's novel is an attempt to extrude the traumatic symbolic (social) issues connected to the Chernobyl disaster and the tragedy of his father's death.

## 5. Conclusion

It is undeniable that the (non)representation of Chernobyl has become a powerful imageable tool in the culture and literature of the 21<sup>st</sup> century. Still, Chernobyl is a topical sign of the present and can create new and perhaps yet unforeseen artistic forms. After all, atomic non-reality is an imaginary reality that is constructed within stylistic discourse and grows out of the creative imagination of those who are susceptible to the sublime. We agree with Susan Sontag that fantasy can normalize or neutralize that which is "psychologically unbearable:"

"For one job that fantasy can do is to lift us out of the unbearably humdrum and to distract us from terrors, real or anticipated-by an escape into exotic dangerous situations which have last-minute happy endings. But another one of the things that fantasy can do is to normalize what is psychologically unbearable, thereby inuring us to it. In the one case, fantasy beautifies the world. In the other, it neutralizes it" (Sontag 1965: 42)<sup>42</sup>.

Clearly, nuclear images are not limited to the representation of the catastrophe and its consequences. They have, in our day and age, a direct and important therapeutical dimension. After all, as Christopher Norris writes, to seriously "think about the possibility of a nuclear war, a very real and present possibility, is to think beyond the limits of reason itself" (Norris 1995: 245)<sup>43</sup>. It is the ecocritical representation of Chernobyl that helps to avoid such a view on the atomic catastrophe.

In the case of an ecocritical approach, everyone who in some way still suffers from the nuclear explosion (and Chernobyl radiation) has a right to speak, and perhaps even an obligation to narrate their experience. Indeed, the field of nuclear literature is being significantly expanded, extending far beyond the boundaries of nuclear testimonies to such apocalyptic representations that predict total extinction, and therefore, the disappearance of human imagination itself.

Ecocritical writing about Chernobyl continue to incorporate environmental issues, as



well as the regeneration of nature, the fate of animals, the role of the ecosystem, the fate of those who live there and those who moved away, and the cultural, national, and gender transgressions that have been provoked by the Chornobyl disaster. In some sense, ecocritical thinking helps to define the boundaries of nuclear hyperreality. It places all aspects of the nuclear explosion: nuclear colonization, nuclear representation, the cross-cultural implications of atomic explosion, nuclear writing, as well as environmental, cultural, and informational aspects of atomic explosion at the core of its analysis.

### Notes

- 1 Алексиевич, Светлана. Непрозрачный мир: две беседы о злободневном и вечном // Дружба народов. 2004. №2. С.188 – 208. <https://magazines.gorky.media/druzhba/2004/6/neproзраchnyj-mir.html> (accessed 05/12/2020).
- 2 Virilio, Paul. “The Museum of Accidents”. In: *International Journal of Baudrillard Studies* 3 (2/2006) [<https://baudrillardstudies.ubishops.ca/the-museum-of-accidents/>] ((accessed 30 November 2020).
- 3 Weart, Spencer. “Nuclear Fear 1987 — 2007: Has anything changed? Has everything changed?” In: *Filling the Hole in the Nuclear Future: Art and Popular Culture Respond to the Bomb*. Robert Jacobs, eds. (Lanham MD: Lexington Books, 2010) 229 – 265.
- 4 Алексиевич. Непрозрачный мир (see footnote 1).
- 5 Weart, Spencer. (1988). *Nuclear Fear: A History of Images* (Cambridge, MA: Harvard University Press), 107.
- 6 Павлишин, Марко. “Чорнобильська тема і проблема жанру” // Марко Павлишин. Канон та іконостас. К., 1997. С.175 - 183.
- 7 Павлишин, Марко. “Чорнобильська” (see footnote 6).
- 8 Павлишин, Марко. “Чорнобильська” (see footnote 6).
- 9 Драч, Иван. Чорнобильська мадонна. Поема // Вітчизна. 1988. №1. С.42 – 62.
- 10 Драч, Иван. Чорнобильська (see footnote 9).
- 11 Драч, Иван. Чорнобильська (see footnote 9).
- 12 Derrida, Jacques. *The Post Card: From Socrates to Freud and Beyond*, trans. Alan Bass (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1987), 3.
- 13 Derrida. *The Post Card* (see footnote 12).
- 14 Derrida. *The Post Card* (see footnote 12).
- 15 Derrida. *The Post Card* (see footnote 12).
- 16 Alexievich, Svetlana. *Voices from Chernobyl. The Oral History of a Nuclear Disaster* (New York: Picador, 1997).
- 17 Алексиевич. Непрозрачный мир (see footnote 1).
- 18 Забужко, Оксана. “Постскрипtum: монолог перекладача про подзвін покинутих храмів” //

- Світлана Алексієвич. Чорнобиль: хроніка майбутнього. Переклад і післямова Оксани Забужко. К., 1998. С.186 – 194.
- <sup>19</sup> Alexievich, Svetlana. *Voices*. (see footnote 16).
- <sup>20</sup> Alexievich, Svetlana. *Voices*. (see footnote 16).
- <sup>21</sup> Agamben, Giorgio. *Remnants of Auschwitz: The Witness and the Archive*. (Cambridge-London: The MIT Press, 1999).
- <sup>22</sup> Курик, Михайло. “Чорнобиль душі нашої. Українцям потрібна екологія свідомості”// День. 2009. №75 [https://day.kyiv.ua/uk/article/cuspilstvo/chornobil-dushi-nashoyi] (accessed 30.11.2020).
- <sup>23</sup> Дроздовський, Дмитро. “Ліна Костенко: «Навіщо нам замінювати українську мову російським матом?»” // Дзеркало тижня. 2011. №34 [https://zn.ua/ukr/ART/lina\_kostenko\_navishcho\_nam\_zaminyuvati\_ukrayinsku\_movu\_rosiyskim\_matom.html] (accessed 30.11.2020).
- <sup>24</sup> Махун, Сергій. “Ліна Костенко: «Поїдьте туди, де вмерла Україна»” // Дзеркало тижня. 2005. №44 [https://zn.ua/ukr/SOCIUM/lina\_kostenko\_poyidte\_tudi\_de\_vmerla\_ukrayina.html] (accessed 30.11.2020).
- <sup>25</sup> Костенко, Ліна. “Україна як жертва і чинник глобалізації катастроф” // День. 2003. №76 [http://vkon.blog.net.ua/2013/07/12/lina-kostenko-ukrajina-yak-zhertva-i-chynnyk-hlobalizatsiji-katastrof/] (accessed 30.11.2020).
- <sup>26</sup> Костенко, Ліна. *Записки українського самашедшого*. К. 2011, 10.
- <sup>27</sup> Костенко, Ліна. *Записки українського самашедшого*, 13. (see footnote 26).
- <sup>28</sup> Костенко, Ліна. *Записки українського самашедшого*, 13. (see footnote 26).
- <sup>29</sup> Эштейн, Михаил. “Жуткое и странное: О теоретической встрече З.Фрейда и В.Шкловского” // Русский журнал. 2003. [http://www.emory.edu/INTELNET/es\_uncanny.html ] (accessed 30.11.2020).
- <sup>30</sup> Baudrillard, Jean. *Simulacra and Simulation*. (Ann Arbor: Michigan University Press, 1994).
- <sup>31</sup> Alexievich, Svetlana. *Voices*. (see footnote 16).
- <sup>32</sup> Ferguson, Frances. “Nuclear Sublime”, *Diacritics* 14 (2/1984) pp. 4 –10.
- <sup>33</sup> Ferguson, Frances. “Nuclear” (see footnote 32).
- <sup>34</sup> Morton, Timothy. *Hyperobjects: Philosophy and Ecology after the End of the World*. (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2013).
- <sup>35</sup> Dekker, Carolyn J. “Placing the Bomb: the Pastoral and the Sublime in the Nuclear Age” (PhD diss. University of Michigan, 2014).
- <sup>36</sup> Longinus. *On the Sublime*. In: Aristotle. *Poetics*; Longinus. *On the Sublime*; Demetrius. *On Style*. (Cambridge: Harvard University Press, 1960) 143 – 308.
- <sup>37</sup> Dekker. “Placing” (see footnote 35).
- <sup>38</sup> Каміш, Маркіян: Плавання серед чорнобильських боліт було чимось на зразок колумбової мандрівки (2015) http://vikna.if.ua/news/category/culture/2015/12/21/46336/view ] (accessed 30.11.2020)
- <sup>39</sup> Каміш, Маркіян. *Оформляндія, або Прогулянка в Зону*. К., 2016.

- <sup>40</sup> Степанец, Кирилл. Записки чернобыльского нелегала. Путеводитель по зараженной территории глазами нелегального туриста. К, 2014.
- <sup>41</sup> Степанец. Записки. (see footnote 40).
- <sup>42</sup> Sontag, Susan. "The Imagination of Disaster". In: *Commentary*, 1965, 42 – 48.
- <sup>43</sup> Norris, Christopher. Versions of Apocalypse: Kant, Derrida, Foucault. In: *Apocalypse Theory Ends of the World*. Ed. By Malcolm Bull. (Oxford and Cambridge: Blackwell, 1995) 227 – 249.

**Пост-Чернобыль:  
от (не)репрезентации к экокритическому прочтению  
нуклеарной травмы**

Тамара Гундорова

Статья посвящена анализу способов репрезентации нуклеарной травмы в так называемом «чернобыльском жанре» (Марко Павлишин). В частности, рассматриваются различные модели художественного отражения чернобыльской аварии в украинской литературе 1980-2010 годов. В центре внимания - эволюция чернобыльского нуклеарного нарратива: фиксация невозможности описать травматическое событие в формах фрагментированного письма (Иван Драч); погружение в ужасное национального катастрофизма (Лина Костенко); виртуальное превращение Чернобыля в гиперреальный объект (S.T.A.L.K.E.R.); переприсвоение травмированной реальности в сталкерской литературе (Маркиян Камиш). В статье обсуждается проблема нуклеарной сублимации, роль свидетеля, природа постапокалиптического письма. Особое внимание уделяется способам преодоления ускользающего от репрезентации опыта травмы. Одним из способов преодоления такого «(не)репрезентированного», как утверждается в статье, становится экокритическое письмо, направленное на картографирование экосреды и Зоны как территории свободы в сталкерской литературе.

## 【論文】

## ルトスワフスキのとらえた言葉と音楽

—イワコヴィチュヴナの詩を例に—

松尾 梨沙

## はじめに

ヴィトルト・ルトスワフスキ (Witold Lutoslawski, 1913–94) は 20 世紀のポーランドを代表する作曲家のひとりとして知られ、本邦では 1993 年に第 9 回京都賞 (精神科学・表現芸術部門、(現) 思想・芸術部門) を受賞している。第一次世界大戦勃発前年のワルシャワに生まれ、二度の大戦とポーランドの独立回復、ナチの侵略、戦後のソ連支配、社会主義リアリズム、「雪解け」、共産体制の崩壊と冷戦終結に至るまで、20 世紀の主要な事件全てが 81 年間の人生にそのまま収まってしまうほど、まさに激動の世紀を生き抜いた作曲家であった。

そうした事情も相俟って、彼の作風は年代ごとに様々に「変化」したと評されることも多いが、作曲家クシシュトフ・メイエル (Krzysztof Meyer, 1943–) によると、オリヴィエ・メシアン (Olivier Messiaen, 1908–92) は 1970 年代、ルトスワフスキの創作について次のように評していた。

何よりも彼の (...) 非恒常性に、私は衝撃を受けた。非恒常性とは、こういうことに拠る。すなわち作曲し始めたときにそれが新古典主義的なものだったとしても、しかしその段階にとどまることなく、ますます先へ先へと進みつつ絶えず発展していった。[...] このような性格の特徴はまず滅多にない。なぜなら大多数の人間は年をとるにつれ、若い頃の個性を強固にするだけだからだ。ルトスワフスキは逆に、どんどん革新的になっていく。これは私には尋常でないものに思われる<sup>1</sup>。

特定の作風に固執し最後まで貫くのではなく、ルトスワフスキは常に新しい形へと脱皮を繰り返していたが、しかしそれは彼の「没個性」を意味するものではない。その根底に貫いていたものを、本稿では特に「言葉と音楽」の側面から考察したい。テクストを用いた彼の声楽作品は、スラヴ地域の民俗的なものや子供のための歌から、新しい技術を試みた作品に至るまで、一見ただけではそれこそジャンルも手法も多岐にわたるように見える。しかし「言葉」「言語」「文学テクスト」に対する彼の考え

方は常に一貫しており、それが彼の声楽作品の作曲にもそのまま表れ、あくまでもその思想に基づいた上で展開されたと考えられる。

ルトスワフスキの全声楽作品で、用いられているテキストの言語は主にポーランド語とフランス語の2種類である<sup>2</sup>。そしてこの2言語は、かなり明確に使い分けられている。基本的に彼は、民俗的要素を含むものや子供向けの歌、大衆歌などを書く場合は母国語であるポーランド語の詩を用いたが、他方、1960年代以降に新しい技法を取り入れた声楽作品ではフランス語の詩を用いている。そしてまさにその狭間にある、ポーランドにおける「雪解け」後の1957年に声楽・ピアノ版が完成した《カジミェラ・イワコヴィチュヴナの詩による5つの歌曲 *5 pieśni do słów Kazimierzy Hłakowiczówny*》<sup>3</sup>（以下《5つの歌曲》と略記）は、ポーランド語テキストを用いた彼の作品の中でも、12音技法（セリー）<sup>4</sup>を起点とした新たな発想での作曲が試みられている点では特異な位置を占めており、まさに60年代以降のフランス語声楽作品へ向かう分岐点にあるポーランド語声楽作品である。

本稿ではこの《5つの歌曲》について、用いられたテキストを含むイワコヴィチュヴナ（Kazimiera Hłakowiczówna, 1892?-1983）の詩集『子供のための詩歌集 *Rymy dziecięce*』（1922年出版）の詩学的な特徴を確認した上で、特に第1曲〈海 *Morze*〉と第5曲〈正教会の鐘 *Dzwony cerkiewne*〉について、詩と音楽両面からの分析を行う。音楽に関しては、これまで「12音技法の応用」という点に特化した数々の先行研究が発表されてきたが、まさに詩を伴う作品、歌曲であるにもかかわらず、詩そのものの十分な分析に基づいた楽曲分析、検証は為されてこなかった。本稿では以上の主要先行研究を踏まえた上で、ルトスワフスキ自身が発言してきた「言葉」「言語」「文学テキスト」に対する彼の思想を加味し、「海 *Morze*」や「正教会の鐘 *Dzwony cerkiewne*」といった詩の言葉単体の描写を超越した、音楽による描写について指摘する。

## 1. 第二次世界大戦後から「雪解け」までのポーランド音楽界概観

第二次世界大戦終結後最初の10年間は、ポーランド音楽界の一からの再建とともに社会主義リアリズムの方針が築かれていくこととなる。そこで認められる創作は、新しい社会秩序の基盤形成と、国家再建の問題に関連する、生産性のあるテーマを持つものであった<sup>5</sup>。

社会主義リアリズムの教義は、その公式の規範的評価を2つの基準に制限した。すなわち急進的で、革新的すぎる（よって大衆が「理解できない」ような）テクニカルな創作を排除すること、そして民俗音楽との明確な関連づけを実行すること、であった<sup>6</sup>。こうした制約があったとはいえ「民俗性」との関連が目指されたゆえに、戦後から雪解けまでの最初の10年間でも多くの作品が生み出され、それらが民族的特徴

を持っていることで国際的に評価された面も小さくはなかったが、他方で西側では、メシアンやシュトックハウゼンらがミュージック・コンクレートや電子音楽、トータル・セリアリズムといった新たな手法に取り組んでおり、「こういう動向からポーランドの作曲家たちが切離されていたことは、まさに“大きな損害”<sup>7</sup>であった。1956年、労働者の待遇改善を求めて勃発したポズナン暴動を契機としたポーランドの「雪解け」は音楽界にも広がり、同年10月10-21日の11日間にかけて第1回国際現代音楽祭が開催されることとなる。第1回のプログラムにはまだ「ワルシャワの秋」とは記載されていなかったが、これが今日まで続く代表的な現代音楽祭「ワルシャワの秋」であり、「象徴的にポーランド音楽史の新たな段階をほぼ始めた」<sup>8</sup>ものとなった。ここでメシアン（第1回、1956年）やブーレーズ、シュトックハウゼン、ノーノ、ベリオ（第2回、1958年）といった西側の作曲家たちの作品が紹介されていくと同時に、バツェヴィチ、ルトスワフスキ（第1回、1956年）、セロツキ、コトィンスキ、グレッツキ（第2回、1958年）等々のポーランド人作品もプログラムに組み込まれていき<sup>9</sup>、西側と東側の音楽流通重要拠点が段階的に形成されていった。

この西側の音楽の急激な流入に、ポーランドの音楽家たちも一刻も早く追いつかねばならなかった。特に《5つの歌曲》の構造基盤にも関わる12音技法やセリーについては、「ポーランドはこれまで未だ12音技法の段階、セリー的な音の並列によって構築された作品の段階から抜け出せていなかった」ため、「我々はこの段階を飛び越えるか、あるいはどこかの時点で我々の創作の必要性に応じるような、何か固有のものを生み出すか」<sup>10</sup>になると、作曲家ムィチェルスキ（Zygmunt Mycielski, 1907-87）は予見した。ポーランド人たちはセリーと偶然性を、50年代の作曲の可能性において連続する2極点として見始めていたとリンステットは述べている<sup>11</sup>。その潮流の中にいたルトスワフスキ自身の12音技法やセリーに対する考え方や、彼が実際に使った技術は「セリー」なのかといったことについては、今日まで議論の対象となっているが、本稿の分析における最大の関心事は「使用されたテキストと音楽の関係」であることから、セリー概念そのものについての細かい議論はこれ以上行わない。しかしこうした雪解け期のポーランドの作曲家たちにとっての関心事かつ重要課題のひとつがセリーであり、ここでは《5つの歌曲》や《葬送音楽 *Muzyka żałobna*》（1955-58年作曲）のような作品が生まれた音楽界の背景の一端として押さえておくこととする。

## 2. ルトスワフスキにとっての言葉、言語、テキスト

《5つの歌曲》は第1曲〈海〉のみポーランド出身の歌手マリア・フロイント（Maria Freund, 1876-1966）の80歳の誕生日祝いのために書かれたが、残りの4曲はフランス人作曲家・教育者のナディア・ブーランジェ（Nadia Boulanger, 1887-1979）の70歳祝いに献呈されている。

ルトスワフスキの声楽作品としては、1960年代以降のフランス語のテキストが用いられた《アンリ・ミショーの3つの詩 3 poèmes d'Henri Michaux》(1961-63年作曲)や《織られた言葉 *Paroles tissées*》(1965年作曲)、《眠りの空間 *Les espaces du sommeil*》(1975年作曲)等が代表作として世界的に知られており、それに比して《5つの歌曲》はポーランドの「雪解け」後の1956-58年に取り組みられた新たな挑戦作のひとつだったにもかかわらず、あまり注目されておらず、これまでの上演機会も録音も極めて少ない。《5つの歌曲》とほぼ同時期にやはり12音技法的な発想で作曲、発表された弦楽オーケストラのための《葬送音楽》が「成功を祝した時、この歌曲集は——同じ作曲家の最も美しい作品群に属するにもかかわらず——その影に」<sup>12</sup>隠れてしまった。第9回京都賞でのルトスワフスキの「業績ダイジェスト」や「贈賞理由」を確認しても、《葬送音楽》は代表作として繰り返し触れられ高く評価されているが、《5つの歌曲》に関しては、少なくともここでは一切触れられていない<sup>13</sup>。作曲時期や手法に鑑みても、この歌曲集は《葬送音楽》とはまた別の意味で脚光を浴びて良かったはずだが、注目度にこれだけの差がついた最大の理由は、作品に用いられたテキストがポーランド語であったことにあると考えられる。

無論ルトスワフスキ自身は、イワコヴィチュヴナによるポーランド語の詩を非常に気に入っていた。彼女に宛てて送った1954年8月18日付の手紙の中で、彼は次のように記している。

貴女の詩を読んで過ごせたこの時間について、貴女にどうお礼を言えば良いのかわかりません。私には忘れ難い体験です。[...] 歌のテキストとして使えるようなものもいくつか見つけました。もちろんまだこの素材に対して具体的なものは何も決めていないのですが<sup>14</sup>。

ルトスワフスキとイワコヴィチュヴナの親交は、彼女の晩年まで続いた。60年代以降はもっぱらフランス語を用いた楽曲を書くようになっていたが、例外的に1981年、音楽学者トマシェフスキの60歳祝いのために、ルトスワフスキはイワコヴィチュヴナの詩「きみのためではなく *Nie dla Ciebie*」に対して歌曲を書いている<sup>15</sup>。

彼は自作品に使った言語や、音楽と言葉の関係をどう考えていたのか。フランス語声楽作品を書くようになって以後の1970年代、彼は次のように語っている。

声楽器楽作品への工程には——私のこれまでの経験においてそうだったように——3段階がある。1. 作品全体のイメージ、よってある程度テキストを決定づける音楽、2. 適切なテキストの模索、そして3. 選んだテキストへの作曲そのもの、よってある程度音楽を決定づけるテキスト。この最後の段階を補足すると、言葉



は、その音響的価値を持つ原料や素材の役割も果たしうる。しかしこの場合でさえ、言葉の響きを、含んでいる意味から切り離すことは私にはできないし、したくない。言葉は音楽のためにどのようなものであるべきかという説明やコメントを考えたくはない。音楽の「補填」のためにテキストからの助けをあてにするようなやり方で私は絶対に作曲しない。いつも最後には、ほどけない合成物を作りつつ、音楽と言葉が私の中で連結する。よって一度選んだテキストは、作品の創作（作業の第3段階）において、重要な、ほぼ先導的な役割を果たす。これは音楽が言葉を「加える」のであって、その逆ではない (...) <sup>16</sup>。

この発言からわかることは、音楽はテキストに追従するものではなく、先に音楽的なイメージがあるということだ。つまり彼にとって声楽曲の創作は、絶対的な存在である詩に「作曲する」という行為ではなかった。彼のいう第3段階、つまり最終的には、テキストのみで表現されえない音楽による表現が、むしろテキストに加わるような状態だったことがわかる。

しかしこれは「詩が音楽に追従する」ような、逆の上下関係を作るものでもなかった。詩の言葉の持つ音響も、言葉の意味も、両方とも音楽と融合していなければならなかった。

この発想はフランス語声楽作品を書いた1960年代以降だけでなく、ポーランド語を用いた《5つの歌曲》作曲の際にもすでにあつたことが、次の引用からもわかる。これは彼が《織られた言葉》について語った際（1965年）のもので、上記3段階の声楽器楽作品創作工程を述べた上で、《5つの歌曲》との共通点についても語っている。

《イワコヴィチュヴナの詩による5つの歌曲》に立ち戻ろう、なぜかというところから [その工程について] 私が語ることのできる最初期の作品だから。作法の第1段階において、テキストがどのような方法で音楽素材の個々の要素に作用するのか、ここではとてもはっきり見える。例として、今日は最後の曲をすでに引用した——〈正教会の鐘〉だ。ここでは2つの部分のコントラストが、類似する構造において言葉の素材から導き出された。

このような疑問が起こる——テキストの音楽的解釈とは何だろうか？ その何らかの基盤や、一般的な法則や規則が存在するだろうか？ まさに私はできる限り最も単純にそれを行うが、と同時にそれを説明することは最も難しい。なぜなら音楽はテキストの描写となるべきではなく、にもかかわらずそれと「結びつけられ」、ひとつを為すべきものだからだ <sup>17</sup>。

ポーランド語の作品《5つの歌曲》からフランス語の声楽作品に至るまで、ルトス

ワフスキは音楽と言葉の融合を目指した。しかしそれは「言葉による具体描写に音楽を付ける」という行為ではなく、彼のイメージする音楽と、扱う言葉の音響と、言葉の意味、全てを巧く融合させるという行為であったことが、この発言からもうかがえる。

ところが彼は《5つの歌曲》以降、ポーランド語の主たる使用をやめ、フランス語による創作に走ることになる。どちらの作品でも彼の理念は実現していたかに見えるが、彼が「母国語」「ポーランド語」で断念し「外国語」「フランス語」で実現可能にしたものは、一体何だったのか。この問いを念頭に置きつつ、次節から具体的に《5つの歌曲》の詩と音楽を見てみよう。

### 3. 《カジミェラ・イワコヴィチュヴナの詩による5つの歌曲》概要

カジミェラ・イワコヴィチュヴナは19世紀末、リトアニアのヴィリニユスに生まれた詩人、翻訳家である。生年は1888年、1889年と諸説あり、彼女自身が公表していた1892年誕生説が有力視されているが明確に判明していない。母親のバルバラは語学と音楽の教師だったが未婚で、妻帯者クレメンス・ザン（ミツケヴィチと親しかった詩人トマシュ・ザン（Tomasz Zan, 1796-1855）の息子）との間に生まれた姉妹のうちのひとりがカジミェラであった。両親の死後リトアニアの親戚に預けられ、その後はラトビア、そしてワルシャワで育っている<sup>18</sup>。1905年に『図解週刊 *Tygodnik Ilustrowany*』で詩「林檎の木々 *Jablonie*」を発表してデビューした<sup>19</sup>。語学の才能に長け、一説によれば七ヶ国語習得していたと伝えられるが<sup>20</sup>、1908-09年には英国オックスフォード大学で留学生として学び、1910-14年にはヤギェウォ大学でポーランド文学と英文学を学んでいる<sup>21</sup>。第一次世界大戦中はロシアで看護師として務め、戦後はポーランドに戻り1918年から外務省に務めたのち、1926-35年には軍務省にてピウスツキ（Józef Piłsudski, 1867-1935）の秘書を務めた。第二次世界大戦中は戦禍を逃れるためルーマニアとハンガリーで過ごし、1947年に帰国。ポズナンに居を構え、1983年に同地で死去している<sup>22</sup>。

彼女の抒情詩は、「私的で内省的、風景画的、時事評論的な」<sup>23</sup>もので、「伝統的な要素と自由に結びつく」<sup>24</sup>点が高く評価されている。ロマン主義的なバラードや童話的な様式、また民俗的な幻想文学の利用と同時に、伝統形式の革新的な破壊をも伴うところが<sup>25</sup>、彼女のスタイルの主な特徴とされる。例えば散文的要素や、皮肉的な冗談、風俗や心理の具体的観察へ導かれる点ではスカマンデル派<sup>26</sup>に近いが、しかしながら彼らよりも伝統的雰囲気強い音調を持つ点と、宗教的要素の存在によって、スカマンデル派とも異なる様相を見せている<sup>27</sup>。

そして『子供のための詩歌集』も、まさにそうしたバラード的な内容を持つものや、ローカルな風景が読み込まれたものなど、題材的にはかつてのポーランド・ロマン主

義を彷彿とさせるようなものばかりである。この詩集は、カジミェラの姉バルバラが1920年に夫を亡くし、その娘たち、つまりカジミェラの姪であるクリスティナ Krystyna とヤニナ Janina をカジミェラが案じ、彼女らに書いた詩のツィクルスであり、よってタイトル通り、まさに子供が読むために書かれたものであった（一部は政治家・社会活動家モラフスキ (Kajetan Dzierzykraj-Morawski, 1892-1973) の息子ロミク Romik に捧げられている)<sup>28</sup>。しかしながら詩の構造としては明らかに革新的で、ロマン主義時代まで原則的だった音節詩<sup>29</sup>ないし音節音調詩<sup>30</sup>のような規則性のあるリズムをほとんど持たず、詩の形式としては自由詩<sup>31</sup>、あるいは音調詩<sup>32</sup>に分類されるものとなっている。

彼女の抒情詩には多くの作曲家が興味を示しており、特に『子供のための詩歌集』については詩集の出版とほぼ同時期にシマノフスキ (Karol Szymanowski, 1882-1937) も、全部で50ある詩の中から20の詩を選んで歌曲集にし、詩集と同名のタイトルを付して発表している<sup>33</sup>。ルトスワフスキが同詩集から作曲に取り掛かったのは1956-58年、つまり詩集の出版とシマノフスキの作曲からはすでに30年以上が経過しており、彼と同じテキストを使いたくなかったルトスワフスキは、シマノフスキが用いた20を除く残りの30の詩の中から5つを選び作曲した<sup>34</sup>。

ルトスワフスキ自身は「12音を伴うこの実験が、このようにとても簡略化された基本的な特徴を持つために、特に子供向けのテキストを採用した」<sup>35</sup>と語り、この作曲家自身の発言からグヴィズダランカとメイエルも「この歌曲集はルトスワフスキの創作の中でも特別な役割を果たした。なぜなら彼の新しい、個性的な和声体系の適用をこの歌曲集で初めて見出したからである」<sup>36</sup>と述べている。急激な音楽語法革新がようやく可能となった雪解け当時、12音技法を基本原則に則って用いるのではなく、和声的な響きの追求手段としてルトスワフスキが新たに用いようとした心理はまさにその発言どおりであろうし、結果的にそうした和音的セリーをこの歌曲集の主要な特徴と見做した研究書は多数出ている<sup>37</sup>。

しかし逆にいうと、その主たる特徴である「12音技法の新たな応用」に注目が集まるばかり、声楽曲であるにもかかわらずイワコヴィチュヴナのテキストそのものが具体的にルトスワフスキの作曲にどう影響したのか、といった点は明確に指摘されず、例えばテキストの言葉ひとつひとつやその連なり、用いられた詩の技術とルトスワフスキの書いた歌唱旋律との関係、さらには詩自体が書かれた年代とルトスワフスキの作曲した年代との大幅な開きなど、単なる12音技法の応用以外にも着目すべきであった様々な点が蔑ろにされてきた。他方ルトスワフスキも、調性感があり特に「新しさ」のない自身の作曲でも子供のための詩を用いることがある中で、この作品のように「12音技法の応用による実験」でも『子供のための詩歌集』を採用したのは、まさにこの詩集が単なる「子供向け」というだけではなく、同時に革新的な詩型やテクニックを

も伴っていたからこそではないだろうか。実際、彼がこの詩から作曲した《5つの歌曲》は、子供が歌う歌、あるいは子供が聴くような歌の様相を呈しておらず<sup>38</sup>、明らかにその当時の東西の音楽シーンに向けられた挑戦的なものだったことがよく伝わってくる作品である。

よって本論ではまずイワコヴィチュヴナのテキストそのものの分析を行い、続いてそれをルトスワフスキがどう用いたのかという順で追ってみたい。作曲に用いられた5つの詩「海 *Morze*」「風 *Wiatr*」「冬 *Zima*」「騎士たち *Rycerze*」「正教会の鐘 *Dzwony cerkiewne*」を見ると、「海」「冬」「正教会の鐘」の3点ではとりわけ言葉の繰り返しが多用されているが、このうち「冬」は音調詩、「海」と「正教会の鐘」の2点は自由詩の形が採られている。さらにルトスワフスキの〈海〉と〈正教会の鐘〉には、歌曲としての楽曲構造的な共通点が見られる。よってここでは全5曲のうち第1曲〈海〉と第5曲〈正教会の鐘〉を取り上げる。

#### 4. 分析——《5つの歌曲》より〈海〉

##### 4.1. イワコヴィチュヴナ「海」

まずは第1曲に用いられた詩「海 *Morze*」を以下に記す（アラビア数字は行数）。

1. W kolei, koleinie
2. puszysty puszek płynie,
3. a za nim jak za łódeczką łódeczka,
4. białe gęsie i kacze pióreczka.
5. Tak płyną, płyną, tak biegą, biegą
6. w dół, w dół do Morza Śródziemnego.
7. A to Morze Śródziemne
8. jest błękitne a ciemne,
9. przyplływ się w nim porusza jak zwierz nieuśnięty,
10. i kołysz się wszystko — puszki, piórka, łódki, ptaki i okręty.<sup>39</sup>

（日本語訳）

1. 溝を経て順番に
2. ふわふわした羽毛が流れていく、
3. その後ろを、小舟を追うように、小舟が、
4. 白い鷺鳥と鴨の羽が。
5. こうして流れ、流れ、こうして走る、走る
6. 下に、下に、地中海へ。



うに一定のリズムを終始感じ続けることはできないが、他方でそうしたリズムカル・非リズムカル詩行の交替と、さらにパロノマジアによる音韻的な場面転換とを聴き取ることが可能となっている。

#### 4.1.2. 言葉が示す意味に関して

詩行の言葉が示す意味に注目すると、この詩は前半1-5行で *plynie*、*plyną*、*biega* (流れていく、走っていく) というように前進する表現が続いていたのに対し、6行目で *w dół* (下に) となる。つまりここで前半の絶え間ない前進が止まり、進行としてはここからむしろ下へ落ちていくため、意味的な場面転換が5行目と6行目の間で起こると解釈できる。

さらに5行目と6行目は、聴覚的に認識するのは不可能だが視覚的に確認する限り「句跨がり」が生じている箇所でもある。パロノマジアのために表現の繰り返しが全部で3回 (*plyną*, *plyną*, *biega*, *biega*, *w dół*, *w dół*) 続いているが、言葉をそれぞれ1回に限定すると、5-6行目は一文として以下のように意味を把握できる。

Tak *plyną*, tak *biega* w dół do Morza Śródziemnego.

下に、地中海へとこうして流れ、走る。

つまりひとつの文が二分され、前半にあたる5行目が第1の意味(前進)を、後半にあたる6行目が第2の意味(落下)を担うことになる。従来の音節詩や音節音調詩であれば、行ごとの音節数とリズムによって句跨がりが生じているかどうかを聴覚的に判断できたが、この詩は自由詩であるため、この5、6行目の場合もリズムの面から句跨がりを判断することはできない。よってここでは先に述べたように、「前進」と「落下」という意味の違いによって句跨がりを判断することになる。

問題は5行目の「前進」と6行目の「落下」とで、イワコヴィチュヴナがどちらの意味に重きを置こうとしたかであるが、この詩全体を概観したところで必ずしもそれは明確ではない。少なくとも4.1.1.で述べたリズムに基づく4つの場面(①1-2行、②3-6行、③7-8行、④9-10行)、音韻に基づく2つの場面(①1-6行、②7-10行)と、ここで論じている詩行の意味に基づく2つの場面(①1-5行、②6-10行)とで、3種類の色分けが可能になることはわかる。したがって従来のバラードや民謡的な詩のように、結末のクライマックスに向かう物語として読むよりも、その重層的な場面転換を感じ取るところに、この詩の読み方があるといえよう。

#### 4.2. ルトスワフスキ〈海〉——《5つの歌曲》第1曲

以上のイワコヴィチュヴナの「海」の構造を踏まえ、ルトスワフスキの楽曲を見て

みたい。

すでに述べたように、ルトスワフスキはこの歌曲集で12音技法の発想を用いた。ただし本来の原則的な12音技法の場合、まずはオクターヴに含まれる半音階全12音の使用順を決めて音列を設定し、その音列通りにそれらの音を使用していく。一方、ルトスワフスキのこの歌曲集の場合は、一定部分で用いられた音を「和音」として積み上げた結果成り立つ12音の音列、という考え方になる。つまり原則的な12音技法が横の時間軸に沿って成り立つ水平的な音列を設定するのに対し、ルトスワフスキの場合は縦の和声として成り立つ垂直的な音列を設定することになる（作曲家自身はのちにこれを「集成的和音」<sup>41</sup>と呼ぶようになる）。例えば〈海〉については、【譜例1】のような集成的和音構造が成り立っている（第9音列のみ不完全）。

【譜例1】〈海〉の集成的和音構造<sup>42</sup>

第1音列	第2音列	第3音列	第4音列	第5音列	第6音列	第7音列	第8音列	第9音列	第10音列
(小節) 1-21	22	28	32	40	42	43	44	45	47 -58 (60)

gua -----

【譜例1】における第1-10の音列と、詩行との対応関係は以下のようなになる（ただし伴奏が分散和音的に演奏されるため、言葉の切れ目や小節線に従って垂直な和音として分けることが難しい箇所が多く、以下ではできるだけ切れ目に近いところで単語を分けて示している）。

- 第1音列：1-5行（tak biega まで）
- 第2音列：5-6行（biega w dół から 6行目最後まで）
- 第3音列：7-8行（7行目から błękitne まで）
- 第4音列：8-10行（a ciemne から wszystko まで）
- 第5音列：10行（puszki のみ）
- 第6音列：10行（piórka, ło - (dki)）

第7音列：10行 ((ło) – dki, pta – (ki))

第8音列：10行 (ptaki のみ)

第9音列：10行 (i o – (kręty))

第10音列：10行 ((o) kręty)

ここからわかるように、この詩のまさに半分（1-5行目）が第1音列だけで占められている。1-5行はちょうどこの詩の「前進」を示す部分であり、シンメトリックな音程関係を持つ音列の全形が出てくるまで、徐々に音を増やしながらか、「流れ、流れ、走る、走る」波のうねりが大きくなっていく。

ただし前半5行全体がシンメトリックな第1音列（【譜例1】参照）だけで成り立つように、一定の波のうねりはあっても、それに異質な動きが入ったり、急激な変化が起こったりすることはない。後半5行分に残りの第2-10音列を充当しており、この極端なバランスからも、前半5行の「前進」については、ルトスワフスキは安定した穏やかな一定の波をイメージしたことがわかる。

この前半5行はパロノマジアが明確な部分でもあったが、ルトスワフスキのこの部分の書法を見てみると、まず冒頭の“kolei, koleinie”はF-Gis-Aという音型が、そして“puszysty, puszek”ではGis-Aという音型が、“(za) łódeczką, łódeczka”ではA-C-F-Gisという音型が充てられている。

【譜例2】5-11小節

5 *pp*  
W ko - le - - i, ko - le - i - nie pu - szy - - sty pu - szek ply - nie,  
5  
9  
a za nim, jak za łó - de - czką łó - de - - - czka,  
9



5行目までは第1音列の枠内で同じ音が繰り返し使われ、5行目はF-Gis-A-C-Dis-E-C-A-As-F-Gis-A... という音のサイクルの中で、“Tak płyną, płyną, tak biega, biega”を2回繰り返している。もちろんこれは波が絶えず「前進」する描写といえるが、パロノマジア、つまり類似する言葉の繰り返しに対しても、同じ音によるサイクルが作られ応じられたと見做せる。

【譜例3】15-22小節（歌唱旋律のみ）

15 *poco cresc.*  
 Tak płyną, płyną, tak biega, biega, tak płyną, płyną, tak biega, biega

そして6行目の“w dół, w dół（下に、下に）”つまり「落下」に至ると、3拍というそれまでにない長い音で、いずれもF音だけが鳴らされる。

【譜例4】22-27小節

22 *mp*  
 bie - - - ga w dół. w dół.

25  
 do Mo - - rza Śród - zie - mne - - go.

まさに“w dół”は、伴奏では第2音列が開始された直後であることから、少なくとも詩を読む場合と同様に、1-5行目までの場面（「前進」を表す）から6行目以降の場面（「落下」を表す）へと向かう際の分岐点が、この“w dół（下に）”であることがわかる。さらにここから“do Morza Śródziemnego（地中海へ）”まではF音のみを1

音節ずつ連続して響かせており、つまり歌唱旋律としてもここで下に落ち込み、停滞するようになる。

イワコヴィチュヴナの詩の解釈で述べたように、この「前進」場面と「落下」場面のどちらが重要かは、ルトスワフスキのこの部分を確認しただけではまだはっきりしない。ただしF音は、この曲冒頭の歌唱旋律の開始音と同じ音であり、開始から少なくともこの“w dół”までの間、この曲の旋律ではこのF音より低い音は使われず、常にF音より上に向かう波が形成されてきた。その意味では、この“w dół”への到達によって、元の最も低い音まで落下し戻ってきた、ということは確かである。

続いて詩の7-8行目、ここは一時的に音節音調詩のようにリズムが揃うところであったが、ルトスワフスキもやはり類型の2つのフレーズを7,8行各々に付している。特に各行の冒頭にあたる2小節間は全く同じモチーフとなっているが、8行目末尾の語である“ciemne（暗い）”のみが7行目と異なり、先の“w dół（下へ）”のF音よりオクターヴ高いF音が充てられている。

【譜例5】28-34小節（歌唱旋律のみ。（上）7行目、（下）8行目）

この“ciemne”のF音は音価も4拍分と非常に長く、さらに強弱記号もメゾフォルテ（やや強く）が付されている。〈海〉全体を通して、この箇所のメゾフォルテと同等かそれ以上に強く演奏するよう指示されているところはなく、よってこの“ciemne”が、この歌の最高潮に達する地点と見做すことができる。つまり、先の「前進」場面と「落下」場面のどちらが重要かという問題に関連させるならば、「暗い」のはこの流れの最下部にあたる地中海の方であるから、ルトスワフスキ自身は「落下」の方を重要視している可能性がここで考えられるようになる。

最後の9、10行目の歌唱旋律については興味深い現象が見られる。この詩行ではパロノマジアは見られないが、ここは1-8行目と異なり極めて散文的になる箇所であった。ルトスワフスキは9行と10行とで分けて旋律を充てるのではなく、9行目冒頭から10行目途中の“wszystko”までを1本の旋律とした。すなわち詩行の意味としては「眠らぬ野獣のようにそこで潮が動く、そして全てが揺り動く」でひと括りとなるため、韻文ではなく散文の1行としてとらえ旋律を充てた、ということになる。ここ

の旋律は F-D-H-B-A を軸としそれが 3 回繰り返されるものであるが、詩行では同じ単語の繰り返しはない。

【譜例 6】 35-40 小節（歌唱旋律のみ）

35 *p*  
 przy- pływ się w nim po - ru - sza jak zwierz nie - u - śnię - ty i ko - ty - sze się wszy - stko:

ただしこの箇所では、類似する子音が連続している。“przyplyw się w nim porusza jak zwierz nieuśnięty, i kołysze się wszystko.” となっており、“rz” “s” “sz” “ś” といった音の連続が、読み方によっては執拗に聴こえる<sup>43</sup>。他にパロノマジアが多数用いられているこの詩の中で、あえてここだけを取り出して特殊技法（インストルメンテーション）があるとは見做さない解釈も、詩を読むだけではありうるだろう。しかし詩の視覚的解釈だけでは本来切れているはずの、この 9 行目から 10 行目前半までを、ルトスワフスキは 1 つの旋律で括り、さらに同じ F-D-H-B-A というモチーフを繰り返し充てたことによって、この部分ではポーランド語らしい「類似子音の連続」が一層感じ取られやすくなっている。

そして最後の 10 行目後半では、「羽毛」「羽」「小舟」「鳥」という各 2 音節単語のひとつひとつに、長音+短音が充てられている。

【譜例 7】 41-49 小節（歌唱旋律のみ）

41 *dim.*  
 pu - - szki, pió - - rka, łó - - - dki, pta - - - - ki  
 46 *pp*  
 i o - krę - - - - ty.

直前の散文的な一文とは切り離し、地中海の潮に揺り動かされ流れていくひとつひとつの具体的なモノに対して、ルトスワフスキはまず伴奏で、形としては同型である音列をそのまま半音階ずつ下行させながら充てていき（第 5-8 音列、【譜例 1】を参照）、加えて全体の歌唱旋律も半音階的に下行させていく（【譜例 7】上段を参照）。そして最終的な語“okręty（船舶）”では、1 音節ごとに非常に長い音価が充てられ、この曲の歌唱旋律の中でこれまで一度も出てこなかった最低音である Des 音に到達している（【譜例 7】下段を参照）。伴奏の方はここで第 9 音列が始められているものの、そ

の分散和音が中断されるような形で突如休止し（伴奏が完全に休止するのは曲中この第46小節3拍目から第47小節1拍目が初めてである）、第9音列は不完全なまま第10音列に至ることになる。

地中海が「暗い」“ciemne”というところに、この曲のクライマックスがきていることについてはすでに触れたが、さらに今まで登場しなかった最低音で示される“okrety”によってこの曲が終止することも加味すると、やはりルトスワフスキはこの大きな船舶をも揺り動かす海の大きさ、暗さの方に力点を置こうとしたととらえられる。

この“okrety”という語は「船舶」という意味の他に、実は「戦艦」という意味も含みうる。文脈にもよるが、少なくともイワコヴィチュヴナが子供たちに読ませる詩として作った際、ここには「船舶」という意味しかなかっただろう。しかしルトスワフスキがこの詩によって描いた「海」とは、単なる波の揺れや地中海の大きさだけではなく、深く暗い大いなる海が、人間の生んだ凶器であり第二次世界大戦まで主要な海軍力であった「戦艦」をも揺さぶり、飲み込んでいくようなものであり、まさに自身も経験した悲惨な大戦を凌駕するその自然の脅威に力点を置こうとしたという解釈も、可能ではないだろうか。

イワコヴィチュヴナがこの詩を書いた1920年代初頭は、第一次世界大戦後の1918年にポーランドが独立回復を遂げた、その直後の時代であったが、さらに30年後、同国にとってより一層の悲劇であった第二次世界大戦と、続いて社会主義リアリズムをも経験したばかりのルトスワフスキが、1920年代の人々（特に子供たち）と同じ感覚でこの詩を読んだとは、やはり思われぬ。つまりルトスワフスキにとってのこの「海」は、単に異なる複数の場面の並置から成る詩ではなく、最後の言葉「船舶」ないし「戦艦」へと向かって高揚していく詩だったのではないか。そのために、後半に集中した多様な音列変化と、旋律の最低音への到達による、劇的かつ不気味なクライマックスへと向かう歌を書いたのではないだろうか。音楽を単なるテキストの描写とせず、言葉を「加える」という理念を持ち続けたルトスワフスキの音楽に対し、本稿では敢えてそこまで踏み込んだ解釈をしておきたい。

## 5. 分析——《5つの歌曲》より〈正教会の鐘〉

### 5.1. イワコヴィチュヴナ「正教会の鐘」

続いて第5曲に用いられた詩「正教会の鐘 *Dzwony cerkiewne*」を見てみよう（アラビア数字は行数）。この詩は2連から成る。

1. Lubimy dzwony cerkiewne,
2. kiedy są śpiewne,

3. *lubimy jak z krągłej wieży*
4. *radość po dachach bieży.*
  
5. *Ale lubimy także dzwony cerkiewne,*
6. *kiedy są gniewne,*
7. *kiedy ze strachu przed nieznaną nocą,*
8. *głowami po dachach grzmocą.*<sup>44</sup>

(日本語訳)

1. 正教会の鐘の音が好きだ、
2. それらが歌うようなとき、
3. 好きだ、円塔から
4. 屋根を伝って喜びが走り抜けるとき。
  
5. しかしこんな正教会の鐘の音も好きだ、
6. それらが怒るようなとき、
7. 未知の夜を前にして、その恐怖から、
8. 屋根を伝ってその頭を打ちつけるとき。

この詩もやはり音節数やリズムに規則性がないため自由詩に分類されるが、先の詩「海」に比べると、2連あるとはいえこちらの方がはるかに単純な構造となっている。行頭の“*lubimy*（私たちは好きだ）”と“*kiedy*（とき）”の執拗な繰り返し、つまり頭語反復（アナフォラ）が用いられ、それによって1連と2連でそれぞれ「歌う鐘」と「怒る鐘」の対照性を浮き立たせる一方、このような頭語反復がこの詩全体のモノトーンを作り出している。加えて脚韻の踏み方も全行で極めて直接的、単純であり（*cerkiewne, śpiewne, wieży, bieży, cerkiewne, gniewne, nocą, grzmocą*、すなわち AABBAACC で全て女性韻）、まさに一定間隔で鳴り続ける正教会の鐘の音の単調さを表現しているといえる。

## 5.2. ルトスワフスキ〈正教会の鐘〉——《5つの歌曲》第5曲

ルトスワフスキがこの詩「正教会の鐘」をどのように作曲に用いたのか。まず彼が設定した集合的和音構造は以下ようになる。

## 【譜例 8】〈正教会の鐘〉の集会的和音構造

第1連（第1音列）第2連（第2音列）  
 (小節) 200 203 207 212 217 224-

音列の設定は全5曲中最もシンプルで、2種類しかない。それぞれ詩の第1連、第2連に対応して第1音列、第2音列となる。ラエは、第1連と第2連で「イワコヴィチュヴナの描いた鐘の音のコントラストを想起させるため」2種類の「集会的和音」を使っていると述べており<sup>45</sup>、さらに第1連の旋律は半音と全音を結合させながら巻きつくように動き、それが短3度音程を含むまで拡大していき、第2連の旋律でも冒頭では1度、2度や3度音程の組み合わせが使われるが、しかし幅広い角のある跳躍音程へと広がっていくと描写している<sup>46</sup>。

2連のコントラストを2種類の音列（集会的和音）で形成し、さらに旋律も2種類の特徴を作り出しているというのは確かで、強弱面でも第1連がピアノ（弱く）、第2連がフォルテ（強く）と指示されているため、誰が聴いてもはっきり分かるほど単純明快な対照構造を為している。

もちろん詩の内容が「歌う鐘」と「怒る鐘」の対照性を為しており、上記のラエの分析もそれに沿った解釈として成立するが、しかしこの詩には頭語反復（アナフォラ）が用いられていることから、音読する場合はモノトーンであることも同時に重要な特徴であった。その点に注目すれば、第1連1行目の旋律も、第2連1行目（＝全体の5行目）の旋律も同様に、半音と全音関係から作られている点をより強調すべきである。1行目はH音とC音（半音）、C音とCis音（半音）、及びH音とCis音（全音）の関係が成り立つ。他方5行目は、転回音程をも含めて考えれば、Dis音とE音（半音）、Cis音とD音（半音）、Dis音とCis音（全音）、及びE音とD音（全音）の関係が成り立っている（【譜例 9】を参照）。

【譜例 9】 205–210 小節（上段、1 行目）と 228–232 小節（下段、5 行目）

205 *p dolcissimo*  
Lu - bi - my dzwo - - ny ce - rkie - - wne,

228 *f*  
A - le lu - bi - my ta - kże dzwo - ny ce - rkie - wne,

さらに詩の分析で示した“lubimy”と“kiedy”の繰り返しにより注意すると、第1連で頭語として2回登場する“lubimy”はいずれもH-C-Hという音形が充てられ、第2連に1回だけ登場する“lubimy”はE-D-Disという音形が充てられている。第2連の“lubimy”は「怒る鐘」に変化するため大幅に跳躍しているが、しかしいずれも「上行しその後下行」という音形である（【譜例9】の各lubimyを比較参照）。

一方、第1連で1回、第2連で2回、いずれも頭語として登場する“kiedy...”を確認すると、第1連2行目ではC-H-Bという半音階順次下行、第2連では6行目がEs-B-Aという下行音形（完全4度下行－半音下行）、7行目も同じくF-C-Hという下行音形（完全4度下行－半音下行）が充てられている。旋律の向きとしては、全ての“kiedy...”が常に下行するよう設定されており、さらに第2連の2つの“kiedy”は、音程関係としても全く同じ形になっている。“lu-bi-my”はbiにアクセントを置くことから、中央の音が高くなる音形であり、“kie-dy”はkieにアクセントがくるため、下に下がっていく音形が充てられたと考えられるが、こうしてルトスワフスキが繰り返される重要な2つの言葉に、音形としても同種で揃えることで応えようとしたことがわかる。

さらに第1連の3、4行をみると、3行目の“jak z krągłej wieży”と4行目の“po dachach bieży”が一对と見做され、同じモチーフの反行形が使用されている。前者のCis-C-H-Ais-Cis-Dに対し、後者はFis-G-Gis-A-Fis-Fとなっている（【譜例10】を参照）。

【譜例 10】 218-224 小節

218  
jak z krą - giej wie - ży ra - - dość

222  
po da - chach bie - - ży.

これに対し第2連の3、4行（=全体の7、8行）の場合は、休符なく7-8行の全てが一気に歌われる。ここでは“F-C-H-Fis-F-E-F-C-H...”というモチーフ・サイクルが繰り返され、7-8行の言葉はそのサイクルに乗せられており、最後の“grzmocą（打ち付ける）”の直前のみに八分休符が入り、この“grzmocą”が長い音価と最大音量で最も強調されることで、この曲は締め括られる（【譜例 11】を参照）。

【譜例 11】 237-253 小節（7-8 行目）

237  
kie - dy ze stra - chu przed nie zna - ną no - cą gło -

241  
- wa - mi po da - chach grzmo - - cą.

この7-8行以外の部分では、詩行や言葉の意味の切れ目と考えられる箇所に休符が入っていることを考えると、この詩の最後の2行に関しては、ルトスワフスキは特に「ひと続き」のものとしてとらえたのではないだろうか。各詩行の長さを比較すると、5行目を除けば特にこの最後の7-8行は連続して長い行となっており、さらにひと続きで声に出して読むと、母音のoとaがここは特に多く出てくることがわかる。

ここで第1曲〈海〉での分析を思い出したい。〈海〉の場合も最後の2行、すなわち散文的要素と子音の連続が見られる9-10行で、ルトスワフスキは一定のモチーフ・サイクルに乗せながらひと続きの旋律を書いていた。そして最後はひとつひとつの単語に「長音+短音」のモチーフを当て嵌め、最終的に“okrety（船舶・戦艦）”という単語を最も強調して終結していた。

この〈正教会の鐘〉でも同様の手法が採られていることがわかる。〈正教会の鐘〉の場合は、詩の形式も音列設定もよりシンプルであったが、しかしやはり詩の末尾を見ると比較的長い2行が立て続けに置かれており、加えてこちらの場合は同じ母音の



連続が目立った。特に最後の行は、iが一度登場する以外は全てaとoの音が続いている。ルトスワフスキもこれに対し、やはり一定のモチーフ・サイクルに乗せながらひと続きの旋律を書き、最後の“grzmocą (打ち付ける)”を最も強調して終わらせている。つまりこの作品も、単に詩を読むだけであれば「歌う鐘」と「怒る鐘」の対照性という点は重要であるものの、そのどちらがより重要かということはさほど問題ではなく、むしろ全体を通して一貫した鐘の音のモノトーンさが強調される詩であった。しかしルトスワフスキの作曲からすると、明らかに最後の強打される鐘に向かって音楽が構成されており、彼にとっては第2連の「怒る鐘」の方に重要性があったととらえられる。

「海」と「正教会の鐘」の2つの詩が言葉で伝えているものに対し、ルトスワフスキはそれに沿うように作曲するのではなく、詩が言葉で伝える以上のもの、あるいは言葉で伝える以外のものをも音で書こうとした。それは彼が、フランス語による作品発表後の1970年代に語った「音楽が言葉を『加える』のであって、その逆ではない」といった考えにも十分に合致するものである。単なる12音的な技術の応用という音楽的側面のみにとどまらず、彼が抱き続けていた言葉と音楽に対する理念は、自由な創作がようやく可能となり始めた雪解け以降のこのポーランド語声楽作品で、まず実験的に試みられていたということが、以上の分析からも明らかである。

## 6. まとめ——ポーランド語とフランス語の狭間で

本論第2節で示したように、《5つの歌曲》のうち第2-5の4曲は、彼がパリで師事するはずが1939年の大戦勃発で断念せざるをえなくなった<sup>47</sup> ナディア・ブーランジェに献呈されている。ルトスワフスキがフランス人のブーランジェにこのようなポーランド語歌曲集を献呈しようと考えたことは極めて興味深い点であるが、彼女はやはりポーランド語を解するわけではなかった。

イワコヴィチュヴナは、すでに記したようにマルチリンガルの翻訳家でもあった。ルトスワフスキは彼女がフランス語も流暢に使いこなせるということを知り、3曲目を書き終えるところで彼女に次のように書き送っている。

すでに貴女のテキストに対して3番目の歌を書き終えようとしていて、あと2曲(計5曲)書こうと思っています。しかし残念ながら、私の音楽のために女性演奏者を見つけ出すのが私には困難でしょう——今回はかなり難しいです。他方、私にはフランスに知り合いで大変優れた女性歌手がいますが、しかしながら貴女の詩をフランス語に訳す問題が浮上してきます。貴女は、これは可能だと思われませんか。詩のリズム構造を根本的に傷つけないように訳すことは可能でしょうか<sup>48</sup>。

この申し出によってイワコヴィチュヴナはフランス語訳を作成したが、やはりリズム構造が変わり、ルトスワフスキの音楽構造とは合わなくなってしまった。しかし彼は「少なくとも歌のテキストが把握できるようにと思い」<sup>49</sup>、結局この訳されたフランス語テキストも別に添えてブーランジェに献呈している<sup>50</sup>。

声楽作品を書く場合、翻訳によって言語が変われば当然ながら音楽にも影響が及ぶということは、作曲家であればあらかじめ考えるはずだが、予定の半数以上である3曲を書き上げるところでこの問題に気づいたということは、ルトスワフスキはやはり「イワコヴィチュヴナのポーランド語テキスト」による音楽しかイメージしておらず、当初は別の言語による上演や出版は念頭になかったことがわかる。つまり彼にとって、このポーランド語によるテキスト自体がその音楽的理想に適ったものだった。しかしブーランジェへの献呈や、優れた歌手に上演を依頼しなければならないという事態に至って、初めて翻訳の必要性に気がついたことになる。

ルトスワフスキは以降、フランス語のテキストを用いた作品を発表するようになるが、それはポーランド語で作曲してしまった場合、国際的な上演や出版が極めて困難になることをこの時痛感したからだろうことは想像に難くない。しかし本論第2節で彼の言及を引用したように、彼は《5つの歌曲》でも、それ以降のフランス語作品でも、「言葉による具体描写に音楽を付ける」のではなく、彼のイメージする音楽と、言葉の音響、意味、この3つを融合させようとしていた。つまり彼は、ポーランド語テキストを単に「民俗的なもの」や「子供向けのもの」だけに使うつもりはなく、フランス語同様に新たな技術による挑戦的な作品にも用いる意図があり、彼にとってイメージに合う音響を、ポーランド語とフランス語が共通して持っていたことが想像できる。

すでに《織られた言葉》作曲後の1973年、ルトスワフスキは次のように言及している。

これまでのところ、ポーランド語以外に、フランス語のテキストだけを私は自分の作品に使った。音楽との結びつきにおいて、この言語は特別好きだ。その鼻母音、最後の音節にくるアクセント、フランスの性質に典型的な、繊細な官能性<sup>51</sup>。

フランス語は母音の種類が豊かであるが、一方ポーランド語は、子音の種類が豊かである。さらにフランス語は句末アクセントであり、ポーランド語は語末から2音節目にアクセントが打たれるパロクシトンである。いずれも「長短アクセント」とされるがあまり強調されず、打つ必然性の弱い場合も多い。少なくとも本稿で取り上げた2つのイワコヴィチュヴナの詩はすでに自由詩であり、もちろんリズム構造をそのままにフランス語へ翻訳できなかつたとはいえ、そのリズムは19世紀のポーランド詩

に比べるとはるかに感じ取りにくくなっている。その分ポーランド語の音韻面での特徴（パロノマジア、インストルメンテーション、アナフォラなど）が目立ち、ルトスワフスキの書法はそれらにも十分に反応していた。もともとフランス語はポーランド語以上にアクセントの位置が定まらないため、イワコヴィチュヴナのこうした詩は、ルトスワフスキをますますフランス語による声楽作品創作へと推し進める要素を多分に含んでいたことがわかる。

イワコヴィチュヴナの詩自体が、ロマン主義のような前時代的な要素とその革新的な破壊という新・旧の融合によって成り立っていたのに対し、ルトスワフスキも、12音の垂直化、和音化によって旧来の和声感を残しつつ、しかしやはり調性音楽ではなくあくまでもセリーの応用として、新たな音楽を目指した。つまり彼の音楽にも新・旧の融合が成立していたのである。ここを起点に、その音楽がさらなる発展を目指していったのと同時に、テキストも伝統的なポーランド語リズムの制約から一段と離れ、より音韻の豊かさが注目されるフランス語へと切り替わっていった。それを考えると、決して「翻訳できないから」というような単純かつ物理的な理由のみでの、使用言語の転換ではなかったはずだ。

本稿で検証したポーランド語テキストの詩学的特徴とルトスワフスキによる対応が、果たしてその後のフランス語テキストによる声楽作品ではどのように発展したのか、あるいはどういう点で両者には共通性があったのか。ミショー（Henri Michaux, 1899–1984）、シャブラン（Jean-François Chabrun, 1920–1997）、デスノス（Robert Desnos, 1900–1945）らのテキストを用いたフランス語作品群との比較検証は、稿をあらためて行いたい<sup>52</sup>。

## 注

- 1 Witold Lutosławski, *Postscriptum*. Gwizdalanka. Danuta, and Krzysztof Meyer, eds. (Warszawa: Zeszyty Literackie, 1999), p. 6. なお引用文中の (...) は引用元が付している中略であり、[...] の中略は本論筆者による。以下同様。
- 2 例外的に、別の言語のテキストを用いた作品（《ラクリモーサ *Lacrimosa*》（ラテン語、音楽院卒業制作の一部、1937年作曲）や《タランテッラ *Tarantella*》（英語、エイズ患者のための慈善演奏会用、1990年作曲）など）もわずかながら存在する。
- 3 この作品は1956–58年に作曲され、声楽・ピアノ版は57年8月に完成、59年に Krystyna Szostek-Radkowa のメゾソプラノと Alina Liwska のピアノで初演。声楽・室内オーケストラ版は58年3月に完成、60年に同歌手、Jan Krenz 指揮、Wielka Orkiestra Symfoniczna Polskiego Radia（現在のポーランド国立放送交響楽団）で初演された。ただしルトスワフスキの手紙によると、1957年秋か58年初め頃、恐らく私的な形で、全5曲中4曲が Flore Wend によって歌われたようである（Gwizdalanka. Danuta, and Krzysztof Meyer, *Lutosławski*:

- Droga do dojrzałości*, tom 1. (Kraków: Polskie Wydawnictwo Muzyczne SA, 2005), p. 308.)。
- 4 12音技法 [英] the twelve-tone system : 20世紀初頭までには調性システムが和声的解決を避けるようになり、その結果として1920年代に考案されたもの。もともとのA. シェーンベルクによる12音技法では、半音階を形成する全12音で「音列」(セリー [英] series)を設定し、それを楽曲における基本の音程構造とした。さらに、こうしたセリー的な秩序に置かれた要素を並べ替えることで構築される音楽をセリー音楽 ([英] serial music) と呼び、特に12音に限らず、音の持続時間など、音程以外の音楽的要素にまで適用させたものをトータル・セリアリズム (総セリー主義 [英] total serialism) と呼ぶ (参考: Robert P. Morgan, “Twelve-tone music”, “Serial music,” in Don Michael Randel ed., *The Harvard Dictionary of Music*, 4<sup>th</sup> Edition. (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 2003), p. 772, 926.)。
  - 5 Grzegorz Michalski, “Nowa Muzyka,” in Tadeusz Ochlewski, ed., *Dzieje muzyki polskiej*, Wydanie II poprawione i uzupełnione. (Warszawa: Wydawnictwo Interpress, 1983), p. 154.
  - 6 Michalski, “Nowa Muzyka,” p. 154.
  - 7 田村進『ポーランド音楽史』雄山閣、1991年、196頁。
  - 8 Krzysztof Baculewski, *Warszawska Jesień: Kalendarium subiektywne sześćdziesięciu festiwali*. (Warszawa: Warszawska Jesień, 2017), p. 12.
  - 9 Baculewski, *Warszawska Jesień*, pp. 12–16.
  - 10 Iwona Lindstedt, “Konstrukcje dwunastotonowe Witolda Lutosławskiego w kontekście recepcji dodekafonii w powojennej twórczości kompozytorów polskich,” in Jadwiga Paja-Stach ed., *Witold Lutosławski i jego wkład do kultury muzycznej XX wieku*. (Kraków: Musica Iagellonica, 2005), p. 61.
  - 11 Lindstedt, “Konstrukcje dwunastotonowe Witolda Lutosławskiego,” p. 62.
  - 12 Gwizdalanka and Meyer, *Lutosławski: Droga do dojrzałości*, p. 308.
  - 13 公益財団法人稲盛財団「京都賞第9回(1993)受賞: ヴィトルト・ルトスワフスキ」 [[https://www.kyotoprize.org/laureates/witold\\_lutoslawski/](https://www.kyotoprize.org/laureates/witold_lutoslawski/)] (2021年2月12日閲覧)。
  - 14 Gwizdalanka and Meyer, *Lutosławski: Droga do dojrzałości*, p. 318.
  - 15 Gwizdalanka and Meyer, *Lutosławski: Droga do dojrzałości*, p. 322.
  - 16 Witold Lutosławski, “O roli słowa, teatralności i tradycji w muzyce. Z Witoldem Lutosławskim rozmawia Bohdan Pociąg, 1973,” in Lutosławski, *Postscriptum*, pp. 109–110.
  - 17 Witold Lutosławski, “*Paroles tissées* (1965),” in Witold Lutosławski, *O muzyce: Pisma i wypowiedzi*. Zbigniew Skowron, ed. (Gdańsk: wydawnictwo słowo/obraz terytoria, 2011), p. 196.
  - 18 本段落ここまでは、Joanna Kuciel-Frydryszak, *Ilła. Opowieść o Kazimierze Hłakowiczównie*. (Warszawa: Marginesy, 2017), pp. 9–11. および Józef Ratajczak, “wstęp,” in Kazimiera Hłakowiczówna, *Poezje zebrane*, tom 1. Biesiada. Jacek, and Aleksandra Żurawska-Włoszczyńska, eds. (Toruń: Algo, 1999), p. 19. の情報からまとめている。
  - 19 Ryszard Matuszewski, “Hłakowiczówna Kazimiera,” in Krzyżanowski. Julian, and Czesław Hernas, eds., *Literatura Polska: przewodnik encyklopedyczny*, tom 1 (Warszawa: Państwowe Wydawnictwo

- Naukowe, 1984), p. 371.
- 20 Kuciel-Frydryszak, *Illa*, p. 9.
- 21 Matuszewski, “Iłakowiczówna,” p. 371.
- 22 Ratajczak, “wstęp” (Toruń: Algo, 1999), p. 19.
- 23 Matuszewski, “Iłakowiczówna,” p. 371.
- 24 Matuszewski, “Iłakowiczówna,” p. 371.
- 25 Matuszewski, “Iłakowiczówna,” p. 371.
- 26 スカマンデル派 [波] Skamandryci : ワルシャワで 1918 年以降に形成された詩人グループ。当初は学術誌 *Pro Arte et Studio* を、その後月刊誌『スカマンデル *Skamander*』(1920–28、1935–39) を発刊した。5 人の詩人 (J. Tuwim, J. Lechoń, K. Wierzyński, A. Słonimski, J. Iwaszkiewicz) が基本メンバーだが、関連メンバーとしてイワコヴィチュヴナも挙げられる。反象徴主義的傾向から始まり、群衆や新たな都会に魅了され、抒情詩の素材として口語の使用を模索。「詩的」か「非詩的」かの主題区分の否定や、抒情詩と風刺詩の区分をなくすことを目指した (Michał Głowiński, “Skamandryci,” in Janusz Sławiński ed., *Słownik Terminów Literackich*, wydanie drugie poszerzone i poprawione. (Wrocław: Zakład Narodowy imienia Ossolińskich-Wydawnictwo, 1989), p. 469.)。
- 27 Matuszewski, “Iłakowiczówna,” p. 371.
- 28 Kuciel-Frydryszak, *Illa*, p. 141.
- 29 音節詩 [英] syllabic verse : 各行あたりの音節数が一定に決められた詩の形式。
- 30 音節音調詩 [英] accentual-syllabic verse : 音節数とアクセント配置の両方が一定に決められた詩の形式。
- 31 自由詩 [英] free verse : 音節数やアクセントの数について、音節詩や音調詩のような雛型によらない自由なリズムで形成された詩。
- 32 音調詩 [英] accentual verse : 1 詩行の音節数に関係なくアクセントの数が一定化した詩の形式。
- 33 Maria Dziedzic, “Iłakowiczówna Kazimiera,” in Bielatowicz. Maria, and Danuta Borzęcka eds., *Lutosławski: od ogniwa do łańcucha*, Encyklopedia Muzyczna PWM wydanie specjalne 2013. (Kraków: Polskie Wydawnictwo Muzyczne SA, 2013), p. 40.
- 34 Gwizdalanka and Meyer, *Lutosławski: Droga do dojrzałości*, p. 309.
- 35 Gwizdalanka and Meyer, *Lutosławski: Droga do dojrzałości*, p. 309.
- 36 Gwizdalanka and Meyer, *Lutosławski: Droga do dojrzałości*, p. 309.
- 37 例えば Gwizdalanka and Meyer, *Lutosławski: Droga do dojrzałości*. の他、Steven Stucky, *Lutosławski and his music*. (Cambridge: Cambridge University Press, 1981). や Charles Bodman Rae, *The Music of Lutosławski*, expanded third edition. (London: Omnibus Press, 1999). など、ルトスワフスキの作品を網羅的に扱った研究書は複数出ているが、いずれも《5 つの歌曲》では「集合的和音」に注目が集まっており、結果的に音楽学的側面からしか考察されていない。
- 38 ルトスワフスキ最後のフランス語テキストによる声楽作品となった《花の歌と話し歌

*Chantefleurs et chantefables*) (ロベール・デスノス (Robert Desnos, 1900–1945) の詩集『話し歌と花の歌 *Chantefables et chantefleurs*』からテキストを使用) も、やはり子供向けの詩が用いられながら、芸術音楽として 1990 年に作曲、翌 91 年に初演されている。少なくともこの点では《5 つの歌曲》と共通しており、ルトスワフスキが最晩年まで持ち得たひとつのスタンスであったことが考えられる。

- 39 詩は *Źłakowiczówna, Poezje zebrane, tom 1, p. 265.* から引用し、日本語訳は筆者が行った。
- 40 パロノマジア [英] *paronomasia* [波] *paronomazja* : 語源が同じ言葉、あるいは同じ響きの言葉がセットになっていること。その言葉同士の意味の近さを際立たせたり、異質性や対照性を際立たせたりもする。意味論的機能は多様である (Aleksandra Okopień-Sławińska, “Paronomazja,” in Sławiński ed., *Słownik Terminów Literackich*, p. 345.)。日本語では「掛詞」「語呂合わせ」などとも訳されるが、厳密には語義にずれが生じるため、本論ではあえてカタカナで「パロノマジア」と表記した。
- 41 Gwizdalanka and Meyer, *Lutosławski: Droga do dojrzałości*, p. 310. 例えばラエも twelve-note chord-aggregate (12 音の集合的和音) という言葉を用いているが (Rae, *The Music of Lutosławski*, p. 61.)、実際この作品では常に「和音」、つまり音の塊として用いられている訳ではないため、本論では主に「音列」と記すこととする。和声様式の基盤を形成するこの「12 音の集合的和音」の発想は、ルトスワフスキのその後の作品にも様々な役割で表れることとなる (Stucky, *Lutosławski and his music*, p. 114.)。
- 42 本稿の譜例は、出版譜 Witold Lutosławski, *Pięć pieśni • Five songs*. (Kraków: Polskie Wydawnictwo Muzyczne SA, 2002). および文献 Gwizdalanka and Meyer, *Lutosławski: Droga do dojrzałości*. と Rae, *The Music of Lutosławski*. を参考に筆者が作成した。以下全て同様。また小節番号は全 5 曲通しでの数字となっている。
- 43 インストルメンテーション [英] *instrumentation, orchestration* : 通常以上に近接的ないし周期的に一定の音声が続り返されるような発話組成法のこと。
- 44 詩は *Źłakowiczówna, Poezje zebrane, tom 1, p. 274.* から引用し、日本語訳は筆者が行った。
- 45 Rae, *The Music of Lutosławski*, p. 61.
- 46 Rae, *The Music of Lutosławski*, p. 62.
- 47 Paja-Stach. Jadwiga, Zbigniew Skowron and Stanisław Hrabia, “Lutosławski Witold,” in Bielatowicz and Borzęcka eds., *Lutosławski: od ogniwa do łańcucha*, p. 3.
- 48 Gwizdalanka and Meyer, *Lutosławski: Droga do dojrzałości*, p. 319.
- 49 Gwizdalanka and Meyer, *Lutosławski: Droga do dojrzałości*, p. 320.
- 50 Gwizdalanka and Meyer, *Lutosławski: Droga do dojrzałości*, p. 320.
- 51 Lutosławski, *Postscriptum*, p. 110.
- 52 本稿の内容の一部は、日本音楽学会東日本支部第 66 回定例研究会 (2021 年 1 月 9 日 (土) オンライン開催) にて口頭発表を行なった。  
なお本稿のフランス語要旨執筆に際し、Frédéric Perrouin 氏には言語的校閲にあたって頂いた。記して深く感謝申し上げます。

## **Paroles et musique pour Lutosławski : article illustré par des poèmes de Hłakowiczówna**

Risa MATSUO

L'objectif de cet article est de clarifier la pensée de Witold Lutosławski (1913–94) sur la relation entre paroles et musique en analysant ses mélodies composées pour les poèmes polonais de Kazimiera Hłakowiczówna (1892?–1983) à la fois du point de vue de la poésie et de la composition.

Dans les œuvres vocales de Lutosławski, deux langues sont principalement utilisées : le polonais et le français. Il a surtout employé les textes polonais dans les chansons comprenant des éléments folkloriques ou dans les chansons pour enfants alors que les textes français ont été utilisés dans les œuvres vocales adoptant de nouvelles techniques musicales depuis les années 1960. Et juste à leur charnière, il existe l'œuvre *5 pieśni do słów Kazimierzy Hłakowiczówny* (*5 chansons en paroles de Kazimiera Hłakowiczówna*) créée en 1957 après le « dégel » en Pologne.

Les poèmes d'Hłakowiczówna sont caractérisés par les styles de ballades romantiques ou de contes de fées, l'application des thèmes de la littérature fantastique folklorique et simultanément, par l'abandon innovant des formes traditionnelles. Lutosławski a choisi 5 poèmes pour sa composition dans son recueil de poèmes *Rymy dziecięce* (*Rimes pour enfants*). Il a appliqué ici le dodécaphonisme et a introduit les « accords-agrégat » comme sa propre technique. Les études précédentes se sont trop attachées à ces « accords-agrégat », de sorte qu'elles n'ont pas prêté suffisamment attention à la façon dont il traitait le caractère des mots, les textes polonais d'Hłakowiczówna, pour ses mélodies.

Ainsi, cet article fera d'abord référence aux remarques de Lutosławski sur les mots, les textes, les langues et sa musique, puis analysera les poèmes d'Hłakowiczówna *Morze* (*La mer*) et *Dzwony cerkiewne* (*Les cloches de l'église orthodoxe*) utilisés dans ses œuvres vocales d'un point de vue poétique. Ensuite, dans l'analyse de la composition de Lutosławski, nous examinerons comment le compositeur réagit à la technique (paronomase, éléments prosaïques, instrumentation etc.) de ces deux vers libres. Par cette analyse comparative, nous concluons que les particularités partagées de deux langues (le polonais et le français) sont incluses dans l'idéal musical de Lutosławski, et que sa correspondance avec les textes polonais pourrait se connecter avec les œuvres vocales du français après les années 1960.





【特集】

## 中世スラヴ世界における「疫病」の表現と表象

三谷 恵子

## はじめに

2020年新春早々に発生した新型コロナウイルス感染症—COVID-19は瞬く間に世界に拡散した。2021年初頭までの1年間に、米国で40万人、英国で10万人、世界全体では190万人が亡くなるという痛ましい状況に至り、現代人の間に、中世の時代さながらの疫病に対する恐怖をよみがえらせた。社会活動のさまざまな面も多くの直接的、また間接的な被害を受け、思いがけない形で、現代社会の構造的な脆さが露呈されることとなった。とはいえ、現代の医療技術は異例の速さでワクチン開発を可能にし、2021年はじめには欧米や世界各地でワクチン接種が始まるなど、先行きの不透明さへの不安は払拭されないにせよ、コロナ禍であえぐ世界に、いくらかの光明が見えるまでになった。

こうしたコロナ禍の中、人類の過去にどのような疫病がおこり、古い時代の人々がどのようにこれに向き合ったのかを記述した著作——ジョン・ケリーの『黒死病 ペストの中世史』（野中邦子訳、中公文庫、2020年〔原著初版は2005年〕）や、H. シゲリスト『文明と病気』（水上茂樹訳、兼文社、2020年〔原著初版は1943年〕）、あるいはまた疫病を題材とした文学作品——ダニエル・デフォーの『ペスト』やカミュの『ペスト』、また最近阿部賢一訳で日本にも紹介されたチャペックの『白い病』（岩波文庫、2020年）など——があらたに注目されることとなった。

じっさい、疫病の歴史は人類の歴史と同じくらい長いものだろうが、原因が解明され科学的に対策がとられるようになるのは、その長い歴史からすれば“つい最近”のことである。原因も治療法もなかった中世において人々が、個人にとってもまた社会にとっても致命的な病であった疫病をどう受け止め、いかに対応してきたのかを知ること、**「死」という人間にとって根本的な問題を、それぞれの時代の文化がどう解釈し、自らを納得させてきたかを知ること**でもあるだろう。上記にあげた著書や作品はそうした問題への鍵を読者に提供してくれるものだが、これらはおもに西欧や、西欧との関係で捉えられた新大陸の状況に焦点があてられており、近代前の東欧スラヴ世界において疫病がどのように扱われていたかについて、すくなくとも日本語で紹介されたものはほとんどない。

本稿では、こうした事情をふまえ、ごく短く、断片的ながら、中世スラヴ世界とく

に東方教会圏スラヴ地域における疫病の表現と表象を、古スラヴ文献の記述から探っていきたい。

## 1. 最古期の翻訳文献にみる疫病

1.1. 古代から「疫病」——以下ではこの表現を、さまざまなウィルスや細菌が、媒介生物や空気、水、食物などを通して人体を害する感染症の総称とする——は、自然災害や飢饉とともに、天から下される災い、神の罰としてとらえられていた。旧約聖書列王紀Ⅱ（西方教会聖書ではサムエル書下、以下では列王紀Ⅱとする）24章11-15には次のようにある<sup>1</sup>——

ダビデが朝起きると、神の言葉がダビデの預言者であり先見者であるガドに臨んでいた。「行ってダビデに告げよ。主はこう言われる。『わたしはあなたに三つの事を示す。その一つを選ぶがよい。わたしはそれを実行する』と」

ガドはダビデのもとに来て告げた。「七年間の飢饉があなたの国を襲うことか、あなたが三か月間敵に追われて逃げる事か、三日間あなたの国に疫病が起こることか。よく考えて、わたしを遣わされた方にどうお答えすべきか、決めてください」

ダビデはガドに言った。「大変な苦しみだ。主の御手にかかって倒れよう。主の慈悲は大きい。人間の手にはかかりたくない」主は、その朝から定められた日数の間、イスラエルに疫病をもたらされた。ダンからベエル・シェバまでの民のうち七万人が死んだ。

この、疫病を神の罰ととらえるヘブライ的世界観はキリスト教にも引き継がれ、後述するように、キリスト教を受容したスラヴ人にとっての疫病にたいする認識を形成するものにもなった。

さて、ここで「疫病」を表すために使われた表現に注目しよう。ここで使用されている表現は、ヘブライ語が  $\text{שָׁלֹשׁ יָמִים}$ 、これに対応するギリシャ語は LXX で  $\text{\tau\rho\epsilon\iota\varsigma \eta\mu\acute{\epsilon}\rho\alpha\varsigma \theta\acute{\alpha}\nu\alpha\tau\omicron\nu}$  「三日間の死を」と、疫病を「死  $\theta\acute{\alpha}\nu\alpha\tau\omicron\varsigma$ 」としている<sup>2</sup>。では、古いスラヴ語で「疫病」はどのように表現されたのだろうか。

“スラヴ人の使徒” コンスタンティノス=キュリオスの兄メトディオスの生涯を記した聖人伝『メトディオス一代記』では、メトディオスは「マカベア書を除く聖書をすべてギリシャ語からスラヴ語に訳した」と記しているが<sup>3</sup>、じっさいには、東方正教会で礼拝に使用されなかった聖書の部分、とくに旧約聖書の大半については、実際的な需要がなかったためか、14世紀より前のスラヴ語訳写本はほとんど残されていない。1499年にいわゆる『ゲンナジー聖書 (Геннадиевская Библия)』<sup>4</sup> がロシアで作

られるまで、スラヴ語訳が事実上存在しなかった書もある。上記に引用した列王紀Ⅱの箇所も、スラヴ語訳写本は15世紀以降のものしか現存しない。しかしこれら15世紀のもの——代表的には、ゲンナジー聖書の中の列王紀——は、「メトディオス系訳」(околомефодиевский перевод) を伝えるものであると多くの研究者がみなしている<sup>5</sup>。そこでこの箇所を、ゲンナジー聖書と同じ系譜に属する『オストロフ聖書(Острожская библия)』で確認すると

Г, дѣи смерти въ земли твои быти . . . избра себѣ дѣдѣ самъ смерть

「三日間あなたの国に死(疫病)が起こることか……ダヴィデは、自ら死を選んだ」

と現れている<sup>6</sup>。ここに用いられている смерти(<сѣмръзть)は、もちろんスラヴ語で「死」をあらわす語で、ギリシャ語の θάνατος に直接対応している。ここからは、列王紀をギリシャ聖書から訳したスラヴ人が、「疫病」を底本にあるとおりに「死」と直訳したように見える。これと同様の例は、古教会スラヴ語カノン<sup>7</sup>の一つで、グラゴル文字で書かれた現存する最古の詩篇訳である『シナイ詩篇』の77:50にもみられる。ここでは

не пошгиадиа отъ сѣмръзти дѣла ихъ. ꙗко отъ ихъ во сѣмръзти затвори<sup>8</sup>

「彼ら [=家畜] の魂を死に渡して惜しまず、命を疫病に渡し」(新共同訳)

とあり、сѣмръзти が「疫病」を表す語として用いられている。この箇所も、ヘブライ聖書では רָבָה (「疫病に」<רָבָה [pestilence 疫病]) だが、LXX では οὐκ ἐφείσατο ἀποθάνατον τῶν ψυχῶν εἰς θάνατον (「死に」となっており<sup>9</sup>、スラヴ語訳は底本のギリシャ語にあった「死」をそのまま直訳した可能性を示唆している<sup>10</sup>。

しかしながら、сѣмръзть がギリシャ語の「疫病 λοιμός」を表すために用いられた例もある。これは『偽パタラのメトディオスの預言書』(Apocalypse of Pseudo-Methodius [ロシア語で Откровение Мефодия Патарского; ブルガリア語 Откровение на Методий Патарски]) で確認することができる。

『偽パタラのメトディオスの預言書』は、7世紀頃のシリアで、イスラーム勢力の進出に脅かされていたキリスト教徒が創作したとされ、8世紀にはギリシャ語、ラテン語へ訳され、ビザンチウムの8世紀以後の終末論形成に決定的な役割をはたした<sup>11</sup>。スラヴ世界には、第一次ブルガリア帝国時代の10世紀頃にギリシャ語テキストから訳されて知られるところとなったとされる。スラヴ語訳は、この、もっとも古い訳のほか、おそらく第二次ブルガリア帝国時代の14世紀頃に再度作られ、またその間にも、11世紀より前にもう一つの訳、あるいは別のリセンションが存在した可

能性がある<sup>12</sup>。最後のものは、15世紀頃のロシアで「加筆増補版（интерполяционная редакция）」として知られるバージョンの元になった。東方教会圏スラヴ中世の終末論も、『偽パタラのメトディオスの預言書』に大きく影響を受けている。

この『偽パタラのメトディオスの預言書』は、アダムとイブの時から、最後の審判とメシアの到来までの歴史を事後予告の形で伝える物語だが、10世紀頃のものともみなされる最古のスラヴ語訳では、その7番目のミレニアムの章の終末的狀況をこう記している――

НАПЛЬНИТЬ СЕ ЗЕМЛѢ ВѢТЪВОВАНАЯ Ѡ ЧЕТЫРЕХЪ ВѢТРЪ НЕВЕСНЫХЪ И БОУДЕТЬ ПРЮГЪ МНОЖЕСТВО. И СЪВЕРΟΥТЬ СЕ Ѡ ВѢТРЪ И БОУДЕТЬ НА НЕИ ГЛАДЬ И СМРЬТЬ<sup>13</sup>

「そして約束の地は天の4つの風によって現れた人々で満ち、イナゴの大群が出現し風で集められ、そこには飢饉と疫病（“死”）が起こるだろう」

ここに出てくる「飢饉と疫病」は、ギリシャ語写本で λιμός και λοιμός であり、あきらかにスラヴ語訳者が λοιμός にたいして смръть（古教会スラヴ語式には сѣмрътъ）を用いていたことがわかる。

このように сѣмрътъ は古スラヴ語で「疫病」を表すために用いられる語彙の一つであり、つまりスラヴ人は、疫病という現象を、そのもっとも顕著な特徴である「死」と結び付けて言語化していたのである。ただしもちろんこれはスラヴ人に限ったことではなかっただろう。上記の LXX にみられる列王紀や詩篇の θάνατος の例は、ギリシャ語でも「死」という語が疫病を表すために用いられていたことを示しているし、14世紀にヨーロッパを襲ったペストについて *Atra mors*（「大いなる死」）という表現が現れ、これが *Black Death* という、ペストを指す英語表現の発生となったという事実もある。こうしたことを考えると、疫病を「死」としたのは、スラヴ人が住んでいた地域を含む広域的な文化圏で共有されていた、疫病に対する表象の反映であったといえるだろう。

1.2. 文字文化をもったばかりの頃のスラヴ人が сѣмрътъ という語によって「疫病」を表していたことは確かだが、古スラヴ文献を探ると、ほかにも「疫病」を示す語彙があったことがわかる。

新約聖書の福音書にも、終末論的世界観を反映した部分があることはよく知られている。たとえば、ルカによる福音書 21章 10 には「民族は民族に、国は国に敵対してたちあがる。そして、大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる」（新共同訳）とある。これとほぼ同じ表現はマタイ福音書 24:9、マルコ福音書 13:8 にもみられるが、まず、ルカ福音書のこの箇所のスラヴ

語訳を確認してみよう。古教会スラヴ語時代に作られた四福音書の全訳であるマリア写本（Codex Marianus）を見ると、次のように書かれている――

Трѣси же велици по мѣста. и глади и мори вѣдѣтъ.<sup>14</sup>

「至る所で地震、飢餓、疫病が起こるだろう」

ここでわかるように「疫病」（λοιμοί）は мори（<морь）と訳されている<sup>15</sup>。

морь は、ブルガリア語 мор「疫病、ペスト」、セルビア語 мор「疫病」、古チェコ語 mor「ペスト」、古ポーランド語 mór「伝染病」など、スラヴ世界に広く見られる語で、スラヴ祖語の動詞 \*mertī（印欧祖語 \*mr-ti）に対する o 階梯の名詞形である。もちろん、同語根 \*mr-ti に接頭辞 съ- が付加されて作られた形が съмръть となる<sup>16</sup>。古ロシア語でも「疫病」を表すためにこの語は用いられた。このことは次の 2 節に見る年代記の例で示されるが、ここで一例をあげておこう。16 世紀の写本で残されている『トゥヴェリ年代記』1158 年の項では、ノヴゴロドに疫病が拡大した様子を次のように記している――

Въ то же лѣто по грѣхомъ по нашимъ морь бысть много въ Новѣгородѣ въ людехъ и въ конехъ яко не льзѣ быше доити торгъ сквозь городъ...<sup>17</sup>

「この年 [=1158 年]、われらが罪ゆえにノヴゴロドの人々と馬の間に大いなる 疫病 が起きた。人々は町を通過して市場に行くこともできなかった……」

これらの例から、морь が疫病を表す語彙として広く用いられたことが確かめられる。しかし同時に、上で見た、ルカによる福音書 21 章に対応するマタイの福音書 24 章 7 節は、同じマリア写本の中で次のように書かれている――

встанетъ во ѡзѣкъ на ѡзѣкъ. і цѣтво на цѣство. і вѣдѣтъ глади и пагоубы. і трѣси по мѣста.<sup>18</sup>

「民族が民族に、王国は王国に向かい立ち上がり、飢えと 疫病 と地震がいたるところに起こるだろう」

この箇所で使用されているギリシャ語はルカ 21 章と同じ λοιμοί καὶ λοιμοί καὶ σεισμοί で「疫病」は λοιμοί だが、スラヴ語訳は пагоубы となっているのである。

пагоубы（単数は пагоуба）は、古教会スラヴ語では ἀπόλεια「破滅、破壊」の訳語として使われる語で、たとえば『シナイ詩篇』では вѣдѣтъ ѡпаданіе его въ пагоубы: въ родъ единыхъ да потрѣбуютъ сла нимѣ его<sup>19</sup>（「破滅に陥る」（新共同訳では「子孫は断たれ）」と、

ほんらいの「破滅」の意味で用いている。けれども同じ *пагоуба* が、上記のマリア写本マタイ 24 にあるように「疫病」を表す語として用いられたのも事実である。キリル文字で書かれた古教会スラヴ語カノンのスプラシル文集にも「疫病」の意味の用例を見ることができる――

МОЛИТЕ БОГА ОТЪ РАТИИ\* ОТЪ ГЛАДАН ОТЪ ПАГОУБЪИ (έν . . . λοιμῶ) <sup>20</sup>

「戦争、飢え、疫病から（免れるよう）神に祈りなさい」

*пагоуба* は「破滅させる、滅ぼす」を意味する *гоубити*、*гъбнѣти* などと同じ語根から、接頭辞 *pa-* と接尾辞 *-ba* の付加により形成された名詞で、これと並び、同語根から派生した *гъбѣль* や *гоубительство*（いずれも「破滅」）もやはり疫病をさす語として用いられた。それぞれの例を示しておこう。

Ъ ГЛАДА (И) ГОУБИТЕЛЬСТВА\* (И) ТРОУСА ПОТОПА ОГНА (ἀπὸ . . . λοιμοῦ) <sup>21</sup>

「飢えと疫病、地震、洪水、火災で」

БОУДОУТЪ ГЪБѢЛЬ СЕ НЕ ТИХОСТИ НИ ПОКОЯ ТЕЛЕСЕМЪ <sup>22</sup>

「疫病が起り平安も身体の安泰もなくなるだろう」

「死」「破滅」とならび、*язва* や *рана* という、ほんらいは「傷」「(神からの) 打撃、一撃」を表す語彙も、疫病を表すために用いられた。この例にはヨハネの黙示録の古スラヴ語訳をあげることができる。先出の列王紀の場合と同じく、東方正教会では、ヨハネの黙示録は、新約聖書の中でも福音書や使徒行伝のように礼拝に用いられることがなく、そのため 14 世紀より前のスラヴ語訳の黙示録写本はほとんどない。しかしおそらく黙示録も古教会スラヴ語の時代に、新約聖書のほかの書とともに訳されたものと考えられる。このことは、ロシアのゲンナジー聖書と、ボスニアの司祭フヴァルの文集（1404 年）<sup>23</sup> という、直接的接点がありそうにない二つの文書に含まれるスラヴ語訳の黙示録がほぼ一致することから推測される。

ヨハネの黙示録には、終末論のつねとして、天変地異や飢饉、疫病を示す表現が含まれているが、たとえばこの 11-6 では、ゲンナジー聖書もフヴァル文集も「疫病」を示す言葉として *язва* を用いている――

ゲンナジー聖書

. . . ОБЛАСТЬ ИМАТА ИМѢТИ НА ВОДАХ ОБРАЩАТИСИ В КРОВЬ И ПОРАЗИТИ ЗЕМЛЮ ВСАКОЮ ЯЗВОЮ <sup>24</sup>

「(この 2 人は) 水が血に変わるよう働きかける力をもち地にあらゆる災いをもたらす力をもっている」

フヴァルの黙示録

... ОБЛАСТЬ ИМЪТЫ ИМАТА НА ВОДАХЪ ОБРАШТАТЫ Е ВЪ КРЪВЬ И ПОРАЗЫТЫ ЗЕМЛОУ ВСАКОЮ ѢЗВОЮ<sup>25</sup>

この部分のギリシャ聖書は ἐν πάσῃ πληγῇ ὀσάκις ἐάν<sup>26</sup> であり「災い」(＝疫病)には πληγῇ が用いられているのだが、バウアーの『新約聖書ギリシャ語対英辞典』で πληγῇ は「打撃、傷」のほかに「(神による) 突然の災厄 (plague)」の意味があるとし、『黙示録』のこの箇所を挙げている<sup>27</sup>。ここから πληγῇ の訳語として使われた ѢЗВОЮ も疫病の代替表現であったと考えることができる。

1.3. 以上に概観してきたように、古いスラヴ語では、「疫病」を表す言葉として、「死」「破滅」「傷、打撃」といった語が用いられていた。これらはいずれも病気そのものを表すのではなく、その顕著な結果(「死」)や、社会的影響(「破滅」)、あるいはその起こり方(「神の一撃」)といった面からメトニミー的に用いられるようになったといえるかもしれない。

もちろんこれらとならび、病名を表す語彙も存在した。太古から知られていた天然痘を表す осъпы (単数は осъпа) である。この語は、ロシア語 оспа、ウクライナ語 віспа、ブルガリア語 оспа 「発疹」、セルビア語 оспа 「天然痘」などスラヴ語に広く見られ、スラヴ祖語 \*o-sъp- に由来し、古教会スラヴ語カノンのスプラシル文集に осъпами наѣдъ волѣти страна та<sup>28</sup> 「そしてその国は“天然痘”(＝疫病)で病み始めた」という例を見ることができる。

天然痘は、人だけでなく家畜や野生動物にも感染するため、古くより、広く拡大する災厄として知られていた。осъпа は、語根から派生した動詞 съпа-ти 「播く」からも推測されるように、身体的に現れる発疹から付けられた名であろう。しかし、感染力が強く、罹患すればまずは死を避けられない恐ろしい病として、疫病一般を表すためにも用いられたと考えられる。上のスプラシル文集の例も、この疫病がじっさいに天然痘だったのかそれとも別の疫病だったのかは不明である。

以上の、最古期文語文献からみたスラヴ人にとっての「疫病」を、ギリシャ語の類義語との対応もあわせてまとめると、次の表のようになる。疫病の正体がわからなかった中世において、人々はこの災厄を、さまざまな特徴からとらえて命名していたのだった。

疫病 λοιμός			
“死”	“破滅”	“傷、神の一撃”	天然痘
моръ, сѣморътъ θάνατος	пагоуба, гъибель, гоубительство ἀπόλεια	ιαзва, рана πληγή	οὐζπα λοιμική νόσος

моръ と пагоуба がほぼ同義語であったことは、同じ福音書写本に、λοιμός の訳語としてこれらが用いられていたことから推測される。とはいえこれらの語彙の選択に何がか関与的だったのかはいまのところ不明である。これについては、古スラヴ語文献に現れる同義語の分布の議論を参照しながら、また論考を改めて考察すべき問題としたい。

なお、現代スラヴの諸言語には、ロシア語で чума 「ペスト」を表す語彙がある：ウクライナ語 чума, джума, 中期ブルガリア語 чума (できもの、腫れ物)、ブルガリア語 чума, セルビア語 чума, ポーランド語 dzuma<sup>29</sup>。これについてはチュルク語起源説、ギリシャ語 κῦμα (「波」) 起源説などがあるが、後者についてファスマーは懐疑的である。じっさい κῦμα は福音書などでは βλῆνα や βλῆνениε とスラヴ語に訳されており、少なくとも最古期文語のコーパスで、κῦμα を чума と訳するような直接的な関係は検証されない。また以下の章で見るように、чума が現れるのは比較的後の時代であり、スラヴ語がチュルク系言語から借用したという説は有力であるように思われる。

## 2. 歴史記述の中の疫病——ロシア年代記の記述から

2.1. 前節では、古スラヴ文献において「疫病」が、ほんらいは死や破滅、傷などさまざまな喪失や損失を意味した語彙によって表されていたことを確認した。

本節では、疫病という災厄が歴史記述でどう扱われていたのかを、中世スラヴ世界で長い伝統をもち、多くの写本が残されているロシアの年代記の記述から探ってみたい。

スラヴ世界、とくに東方教会スラヴ世界の歴史記述は、ビザンチウムで作られた『修道士ゲオルギオス (Γεώργιος Ἀμαρτωλός [ロシア語で Георгий Амартоλος]) の年代記』(9世紀)や、『イオアン・マララス (Ἰωάννης Μαλάλας [Иоанн Малала]) の年代記』(6世紀)、あるいは少し後年になるが『コンスタンティン・マナセス (Κωνσταντῖνος Μανασσῆς [Константин Манассия]) の年代記』(12世紀)などが下地になって作られた。ロシア語で Летопись と呼ばれる年代記は編年体で書かれているが、完全に史実のみを記しているわけではなく、キリスト教受容以前から存在していた民間伝承や、ビザンツ由来の聖人伝などを取り入れたと思われる記述も含み、ときに史実性が疑わしい場合もある。とはいえ、史料そのものが少ない時代の文献であり、中世スラヴ人の価値観や当時の社会状況を知るための手がかりとして重要視されている。



さて、キエフ・ルーシの主要都市で作られたさまざまな年代記には、たびたび疫病についての記述が見られる。スポトニツキー&スポトニツカヤの『ペストの歴史概説』は、おもな年代記に記された11-14世紀の疫病を一覧にしているが、これを見るとほぼ5-15年に一度、ロシアのどこかで疫病らしき災厄が起きている<sup>30</sup>。

ここに含まれた記述でもっとも古いのは、後に示す1092年のものだが、これに先立って、『原初年代記』（ラヴレンチー写本）<sup>31</sup>の1060年の項に、疫病らしきものについての記述がみられる――

Въ семь же лѣтъъ Изяславъ, и Стославъ и Всеволодъ и Всеславъ совокупиша вои бецислены, и поидоша на конихъ и в лодыахъ бецислено множество, на Торкы. Се слышавше Торци убоахаса провѣгоша и до сего днѣ, и помроша вѣгаючи. Божнымъ гнѣвомъ гоними, вви ѿ зимы, друзии же гладомъ ини же моромъ и судомъ божнымъ<sup>32</sup>

「この年イズィヤスラフ、スヴャトスラフ、フセヴオロト、フセスラフは無数の兵を集め、馬と船の大群で遊牧民（トルキ）に進軍した。これを聞いたトルキたちは恐れ、退散して今に至る。彼らは逃げる途中で死んだが、これは神の怒りによるもので、ある者は寒さで、別の者は飢えで、またあるいは疫病で、神の裁きにあったのである。」

まず言語表現だが、下線をひいた箇所で見られるように、1節でみた「死」に語根をもつ *моръ* が用いられている。*моръ* は、以下でも示すように、ロシア年代記で疫病を表すためにもっともよく使用される語彙である。もちろん病原菌など特定できない時代において *моръ* がどのような種類の疫病だったのか、あるいは本当に疫病だったのかも不明な場合もある。じっさい、上掲の箇所も、ワシーリエフ&シーガルの『ロシアにおける疫病の歴史』では、これに該当する年にロシアで疫病は起きていなかっただろうとしている<sup>33</sup>。とはいえ、疫病が東方の遊牧民との戦いに結び付けられていることや、寒さや飢餓とともに襲ってくる神の怒りとしての「疫病」が描かれている点は、本稿冒頭に引用した『列王紀』の文言にも通ずるものであり、ヘブライズム以来の疫病イメージが、キリスト教を通じてキエフ・ルーシにも浸透していたことが伺い知れる例である。

実質的には、上述したように、1092年に、現ベラルーシに位置するポラツクとその周辺におきた疫病が、ロシアで記録された最古の疫病とみられる<sup>34</sup>。やや長くなるが、この部分を抜き出してみよう。すると、以下のように、疫病の襲来とその被害が恐ろしげに記されていることがわかる――

В лѣто г.г. х. [6600] Предивно вѣсѣ [чюдо] у Полоцьскѣ въ мѣсѣтъ: бываше в ноци тутьнъ,

стонаше по улици, јако члвци рицноше вѣси. аще кто выѣзаше ис хоромны, хотя видѣти, и лбье оуязвенъ будаше невидимо ѿ вѣсовъ ѣзвою, и с того оумираху, и не смаху излазити ис хоромъ. По сѣмъ же наѣаша во дне ѣвлатиса на конихъ, и не вѣ их видѣти самѣх, но конь ихъ видѣти копыта, и тако уязвляху люди плотьскыя и него власть.<sup>35</sup>

「6600 [=1092] 年ポラツクで悪夢のようなことが起きた。夜中に足音が聞こえ人の唸り声のようなものが屋外に響いた。何事かと見ようと思って家から外に出た者は、何もわからないまま悪霊に襲われ、そのために死んだ。それで人々は家から出られなかった。続く日には馬にも現れ始めたが、馬の場合は体には現れず、蹄にそれは現れた。このようにポラツクの町とその領土の人々は災厄にみまわれた」

ここで述べられている病がじっさいどのようなものだったかはもちろん不明だが、疫病であったことは、共同体に急に襲ってきた疾病の記述ばかりでなく、оуязвенъ (<оуязвити)、уязвляху という、1 節で見た язва 「傷、打撃」の派生語が使用されていることから推測される。「馬にも現れ」蹄にそれが顕在化したとあることから、これを文字通りに理解すれば、天然痘の類が起きたのかもしれない。また、この後には続けて、同じ年に日照りが続き、再度ポロヴェツ人の襲来があったと述べられ、さらに次のように続けられている――

Въ си же времена мнози чловци умираху различными недугы, јакоже глху продающе кореты, јако продахомъ кореты ѿ Филипова дне до масопуста .z. тысячь. Се же бы за грѣхы наша, јако оумножишася грѣси наши и неправды. Се же наведе на ны вѣ, вела на имѣти покаяные и вѣстагнутиса ѿ грѣха, и ѿ зависти, и ѿ прогнхъ злыхъ дѣлъ неприазниъ.<sup>36</sup>

「この年多くの人がさまざまな病で死に、墓標を売る者のいうことには、フィリポの日 [正教会では 11 月 14 日] から大齋期の始めまでの間に 7000 の墓標を売った。これは我らが罪と不正が増したためであり、悔い改めて、罪から身を遠ざけるようにという神の思し召しである」

ここでは「さまざまな病 (недугы) で」多くの死者があった、とあり、しかしやはりこの災厄は神の罰であると述べている。そして、疫病の災いを避けるための悔い改めを説く教訓的な文言によって記述は結ばれるのである。このような疫病観はその後も長く続き、「疫病」моръ はしばしば гладъ 「飢餓」や戦乱、大雨や地震などの自然災害とともに言及されていく。1500 年代前半に作られた『ニコン年代記』1230 年の項にも、気候異常と飢饉、そして疫病が起きたと記されている――

... И разгнѣвася Богъ, и опустоши землю, и поиде дождь отъ Благовѣщенія до Ильина дни, день и ноцѣ, и возста студень, и быша мрази велици, и пови всяко жито [...] и бысть моръ въ людехъ отъ глада великъ тако не моши и погребити ихъ<sup>37</sup>

「神は怒り大地を荒れさせ、そして受胎告知の日から聖イリヤの日まで昼も夜も雨が続いた。それから霜が到来し大いなる寒気が起こりあらゆる穀物を枯らした [...] 大いなる飢饉から人々の間に疫病が起こり（死者を）埋葬することもできないほどだった」

飢饉、また異民族の襲来や戦争が疫病とともに記されるというパターン化された年代記の記述の中でも、ときには疫病に対する観察らしきものも見られる。たとえば『ヴォスクレセンスキー修道院年代記』1289年の項目には、次のようにある――

того же лѣта бысть моръ на люди и на кони и на всякии скотъ а жито всякое мышъ поѣла; от того ради дороговъ бысть велика и глад, велик бысть по севеи Земли Русской<sup>38</sup>

「この年、人々と馬とあらゆる家畜に疫病が起こり、穀物はネズミが食い尽くした。このために多くの離散があり、大いなる飢餓が全ロシアに起きた」

ここでも、飢饉とともに起きた疫病が描かれているが、それ以前の年代記の記述のように、たんに「疫病で多くの死者が出た」という事象だけではなく、「穀物はネズミが食い尽くした」とネズミの存在について言及している点が注目される。疫学の発達した現代では、「旱魃、洪水、地震といった環境の激変がペストを誘発することも経験上わかっている。そのような事象は往々にして、遠隔地にいる野生の齧歯類の群れ、すなわちペスト菌の宿主を生息地から追い出し、餌や棲みかのある人里へと追いやるからだ」とシゲリストが『文明と病気』の中で述べているように<sup>39</sup>、飢餓とネズミのような齧歯動物の集団発生と疫病の拡大に因果関係があることが知られている。この年代記の記述では、ごくみじかく、ネズミが食糧を喰い荒らしたと述べているだけだが、ネズミの大量発生と疫病のあいだになんらかの関係があることについて、おぼろげながらも気づいていたのかと思わせるものである。

2.2. 14世紀半ばに全ヨーロッパを襲って歴史に長く記憶されることになったペストの大流行のさまは、ケリー著『黒死病 ペストの中世史』に詳しく描かれている。東方から発したペストは、陸路および海路の通商ルートにのって黒海のクリミアに到達し、そこからいっぽうではコンスタンティノープルへ、さらにダーダネルス海峡を経てギリシャ、バルカン半島からヨーロッパへと北進し、他方では地中海を南下して南ヨーロッパへと広がっていった。ロシア・東欧もまた、この黒死病の波から逃れられ

なかった。

『ロシアにおける疫病の歴史』では、この黒死病の大流行に先立って1320～30年代に世界各地に起きた大雨のことが言及されている<sup>40</sup>。1331年には、南および西ヨーロッパで大雨が降り、キプロスでは20日間雨が降り続けて8000名の死者を出し、また中国では、まず大規模な干ばつが起こった後、大雨が続いた。この本で著者たちは、このような気候異常が14世紀中期の破滅的な黒死病の流行と関係するのかは不明だ、としているが、いっぽうスポトニツキー&スポトニツカヤの『ペストの歴史概説』によれば、ちょうどこの時代すなわち13世紀終わりから14世紀はじめにかけての「小氷河期」の始まりの気候変動が、大規模な疫病の発生の下地を作ったとしている<sup>41</sup>。気温低下のためにヨーロッパでは1270年代と1300～1309年のあいだに干魃が、その後1310年代には大量の降水があった。こうした気候異常と、これに起因する食糧不足は、生態系を変え、動物や人の移動や、あるいは広範囲にわたる栄養不良をもたらし、わずかな感染症でもパンデミックにつながった可能性は十分にありえただろう。

ロシアの年代記でも、「大いなる死」の時代すなわち1340年後半から80年代にかけて各地で黒死病が起きたことが記されている。『ヴォスクレセンスキー修道院年代記』1346年の項では、次のように記されている――

Того же лета казнь бысть от бога на люди под восточную страну на городъ Орнагъ на Хазтороань и на Саран и на Бездежь и на прочие градъы во стараях их бысть моръ силен на Бесермены на Татары и на Ормены и на Обезы и на Жиды и на Фргазы и на Черкассы и всехъ тамо живущихъ яко не ве кому их погребать<sup>42</sup>

「その年 [1346年] 神の罰が東の国の人々、すなわちオルナチ [ドン川河口の町]、アストラハン、サライ、ベズデジ [ヴォルガ河畔の地名] にくんだり、ユダヤ人、イタリア人、チェルカス人、それにその地の住人の間におおいなる疫病がおこり、彼らを埋葬するものさえいないほどだった」

この記述によれば、1346年に黒死病はドン川河口域からヴォルガ流域、カフカース、カスピ海沿岸からアゾフ海、そして黒海に至る範囲に広がったと見られる。14世紀頃のカスピ海から黒海北岸には、ユダヤ人、ジェノヴァやヴェネツァのイタリア商人たちがコロニーを作り商業活動をしていたことが知られているが、こうした人々も、疫病の魔手を逃れられなかったことが、この記述からわかる。

ロシアの黒死病は1350年頃にノヴゴロドやプスコフ、モスクワにも広がったのち、いったん収束する。しかし1360年に新たな波が生じ、北方の商業都市プスコフは大きな被害にあった。『プスコフ第2年代記』では、このことについてごく短く記している――

Быть моръ золъ въ Псковѣ и по селомъ и по всен<sup>43</sup>

「その年プスコフの町と村々に大いなる疫病が起こった」

いっぽう同じ出来事を、この疫病の影響を受けたノヴゴロドの年代記は、追加情報を加えてこう伝える――

Быть моръ въ Псковѣ и владыка Алѣксеи ѣха к нимъ позванъ Посковици и городъ Псковскии съ кресты обходи и .Г. литургии свѣршивъ и приѣха в Новъгородъ; а Псковцемъ оттолѣ нача личши быти милость Божиа преста моръ<sup>44</sup>

「プスコフに疫病が起こり、アレクセイ大主教がプスコフ市民に呼ばれ彼らのもとに赴いた。そして十字架をもってプスコフの町を回り3度礼拝を行ってからノヴゴロドへの帰途についた。そのあとプスコフは神の慈悲により良くなり、疫病は治った」

年代記によると、プスコフはノヴゴロドの大主教のお祈りのおかげで救われたが、救いをもたらしたアレクセイ大主教当人は、ノヴゴロドに帰還する旅の途中でペストのために死去するという、気の毒な運命に見舞われることになったらしい。

ヨーロッパではさらに1360年代から80年代に、何度かペストの流行を見た。ロシアでも、その後もたびたび年代記に疫病の記述が見られる。上述のとおり、年代記の記述では疫病は神の下した罰とされているが、そうした記述の合間にも、病気の症状の観察を示す記述も現れるようになる。1360年にプスコフでペストが発生した時の様子を、『プスコフ第1年代記』の作者はつぎのように記している――

бысть по Псковѣ вротыи моръ лють zelo; вѣаше тогда се знаменина егда кому гдѣ выложитса желѣза то вскорѣ оумираше; мнози же умираху тою болезнию много же время тои въ смерти належаши на людѣх<sup>45</sup>

「プスコフにふたたび大いなる疫病が起きた。この現れはといえば横痃〔リンパ節の浮腫〕が見えれば、すぐ死に至るものだった。この病で多くの者が死んだ。長い間病は人々の間で流行した」

1347年にペスト患者を乗せたジェノヴァのガレー船がメッシーナに到着したときの様子を修道士ピアツァは「腫れ物のような〔…〕レンズ豆くらいの大さのしこりが太股か腕にできた〔…〕もはや治療の手立てはなく、死ぬしかなかった」と描いたというが<sup>46</sup>、おそらく上記のプスコフ第1年代記の作者もこれと似たような症状を見て、

これを記したのだろう。『ヴォスクレセンスキー修道院年代記』1363年の項には、さらに詳細な症状の記述がある――

Бысть моръ великъ в Новѣгородѣ въ Нижнемъ; харкаху людїе кровю а инїи желѣзою болаху и не долго болаху но два дни или три а инїе единъ день болѣвшє умираху [. . .] инїи желѣзою умираху; желѣза не у всакого бывашє въ едином мѣстѣ но одному на шеѣ а иному подъ скулою а иному под пазухою, другому за лопаткою прорѣчим же на стегнех . . .<sup>47</sup>

「ニージニーノヴゴロドに疫病が起きた。ある者は血を吐き別のもは横痃に苦しみ、2、3日の間病むか、あるいは1日病んで死んだ […] ある者は横痃で死んだが、現れ方は誰でも同じ場所ではなかった。人によって首、頬骨、あるいは脇の下、または肩や足の付け根などに現れた……」

このように、リンパ節や関節に腫れ物（年代記ではжѣлєза）ができ、高熱を出して死に至る状況が当時なりの客観的な眼差しで記されており、こうした記述からは、時代とともに疫病に対する観察眼や、疫病の伝播という認識が芽生えてきたことを読み取ることができる。

とはいえ、対処策という点では、中世の人々は古代人とそれほど変わりがなかったように見える。東方教会圏でも、西欧と同様に、中世の医術はおもに修道院によって担われ、薬草による治療が行われた。しかしキエフ・ルーシについてみれば、おそらくビザンツやブルガリアから伝わったはずの医学や薬学に関する知識をまとめた形で記した文書は、残されていない<sup>48</sup>。『古ロシア時代の医術』で著者らは、キエフ・ルーシ時代に作られた様々な文書の中に含まれた病気や怪我についての断片的な記述を列挙して、中世ロシアにおける“医術的文化の水準の高さ”を示そうと躍起になっているようだが<sup>49</sup>、それらのほとんどはビザンツやブルガリアから伝えられた説教集など宗教的な教えの中にエピソード的に織り込まれたものである。確かに、15世紀も末になれば、たとえばキリル・ベロゼルスキー修道院のイエフロシーンが書き残した、治療についての短い文書を見いだすことができる――

аще кто имать у себе миро святыхъ Богородици или стѣго миро димитрія [. . .] и аще получитєа болѣзнь вноутри. да повелить первю литоургию пѣти пресѣви бѣи а миро да воудѣть на стѣви трапєахъ . . .<sup>50</sup>

「もし聖マリアの聖油あるいは聖ドミートリーの聖油があり […] もし体に病を得たなら、司祭が礼拝をとりおこない聖母に祈り、聖なる食卓に聖油を置き……」

これをイエフロシーンがどこから写したのかは不明だが、いずれにしても内容は、病

気になった者には聖油を塗り神に祈るのがよい、目の病なら祈りながら目にこれを塗り、体の病なら体全体に塗るとよい、というもので、基本的には、病を癒すための祈祷の一種の域を出ていない。

16世紀後半のイワン雷帝の時代になると、ドイツのリューベックで1492年に印刷された薬草書 *Hortis Sanitaris* (『薬草の園』) のロシア語訳 (ポーランド語経由の重訳か?) *Благопрохладный цветник. Ветроград здравью* がイワン雷帝のために作られるなど、ロシアにも西欧の医学知識が伝わっていった。とはいえ、個人のかかる疾病についてはともかく、集団的疾患である感染症に対しては、年代記の数々の疫病発生の記述にもあるとおり、神の罰、でなければ「呪い」「邪視」や悪霊、妖術師の仕業とされていた。ロマノフ朝の初代皇帝となったミハイル・フョードルヴィチ・ロマノフ [1596-1645] も1632年、プスコフの司令官たちに宛てて、偵察兵たちの報告として、リトアニアの町では妖術使いの女たちが、ロシアに輸出するホップに呪いをかけ、これによってロシアの人々の間に疫病が流行るよう企んでいると伝える文書を送っている<sup>51</sup>。

西欧でも、本格的な疫学は18世紀によく始まるが、それでも、ミハイル・フョードルヴィチがこの手紙を書いた同じ年、オランダでは、のちに顕微鏡を発明し、微生物の存在を明らかにしてその後の病原菌研究の道を開いたアントニー・ファン・レーウェンフック [1632-1723] が生まれている。ロシア、そして東方教会文化圏で、疫病が伝染性の疾患であるという認識に至るまでには、はるかに長い時間が必要だったのである。

### 3. セルビアの医療文書『ヒランダル医術文集』

中世ロシアの疫病に対する認識や対応のあり方は、疫病が人知を超えた現象で、神に祈るほかはないという正教会の価値観を反映したものと見ることができるだろう。西欧では、下記にもふれるように、10世紀頃から学問としての医学が確立し、12世紀にはイタリアのサレルノなどで大学が設置され、医師が養成されるようになったのに比して、東方教会文化圏スラヴ地域では、そのような制度が構築されなかった。このことも、疾病全般に対する正教圏スラヴ世界の、運命論的価値観をより根強いものとしたといえるかもしれない。とはいえ、正教会文化における疾病対応がどこも一律でなかったことは、ここに紹介する中世セルビアの『ヒランダル医術文書 (Хиландарски медицински кодекс)』が示している。

中世セルビアの繁栄を築いたネマニッチ朝は、ビザンツからキリスト教の教義や文化を吸収した。13世紀後半から14世紀初めにセルビアを治めたステファン・ウロシイ世ミルティン [1253-1321] は、コンスタンティノーブルにセルビア修道院プロドロムを作り、そこに病院を設けるなど、ビザンツ医術の習学に努めた。また、この時

代に領土をバルカン半島南西部に拡大し、アドリア海沿岸までを支配下に収めたことから、対岸イタリアの文化—芸術ではとくに、11世紀すでに芸術の先進地としてヨーロッパに知られていたサレルノ学派や、13世紀から発展したモンペリエ医学の知識も得るに至った。こうした地政学的条件を背景に『ホドシ修道院医薬書 *Ходошов сборник*』<sup>52</sup>などの芸術文書が現れたと考えられる。『ホドシ医薬書』は1380年頃にセルビアのどこかで作られ、ハンガリーの古都セーケシュフェヘルヴァールからペシュトの修道院を経てホドシ修道院に19世紀に渡り、そこでシャファーリクによって発見された。天文学や博物誌など、さまざまなテーマの文書に加え、芸術や薬草についての文書が含まれている。これら芸術的内容のテキストの底本には、サレルノ学派のヨハネス・プラテアリウス (Platearius, Joannes I [生没年不詳]) と息子のヨハネス・プラテアリウス (Platearius, Joannes II [1120–1150?]) の『実地要綱 (Practica brevis)』があるとされている<sup>53</sup>。

しかしながら、疫病という点で興味深いのは『ヒランダル芸術文集』である。この文書は、1951年にギリシャの聖山アトスのセルビア修道院ヒランダルで発見されたもので、13～15世紀にかけて作られた医療文書の写本を、最終的に16世紀頃にコーデクスとしてまとめたものである<sup>54</sup>。中にはさまざまな病気の症状や原因と対処法、また薬草の効用と治療法が記されており、ギリシャ語やラテン語で伝えられたサレルノ学派やモンペリエ学派の医学文書の翻訳に基づいていると考えられる。言語はセルビアリセンションの教会スラヴ語だが、写本には、おそらくここにいたるまでに生じた書き換えや書き足し、また誤記によると思われる意味不明の箇所も少なからずあり、形成の経緯には不明なところが多々残されている。

このヒランダル芸術文書には、疫病、すなわちさまざまな伝染性の病気、天然痘、マラリアに関する記述があり、ここでは疫病全般にはもっぱら *чума, чумни род* という言葉が用いられている。*чума* は、1節にふれたように、現代ロシア語やブルガリア語で「ペスト」を表す語彙だが、ヒランダル文書の記述をみると、おそらく現代では腸チフスやパラチフスとして知られる伝染病や、なんらかの細菌や微生物による発熱性の感染症についてもこの言葉を用いている。1節でみたような、古スラヴ文献に用いられた *морь* や *гибель, пагуба* などは用いられていない。また、現代セルビア語で「ペスト」やパンデミックをあらわすためには *куга* が用いられるが、これも現れていない。

疫病の原因についてのこの芸術書の記述は、あきらかにミアズマ説に依拠したものといえる。ミアズマ説 (miasma theory) は、古代ギリシャのヒポクラテスや、その後の古代ローマ時代のガレノスに端をもち、19世紀にいたるまで広くヨーロッパで信じられた考えで、腐敗した空気すなわち瘴気 (*μίασμα*) と、これが引き起こすあらゆる生活環境の汚染が疫病をもたらすというものである。19世紀以後の細菌の発見以



後は廃れたが、多くの研究者は、この考え方を、神の罰や呪詛のせいとする古代以来の疫病観に比べれば、はるかに科学的であり、近代以後の疫学の原点となったと考えている<sup>55</sup>。

ヒランダル医術文書の疫病に関する記述を、少し追ってみよう。ここでは、アリストテレスのことばを引用しながら、それ自体は汚れることのない四元素すなわち水、地、火、風、とりわけ水や風が汚される場合に疫病がおこるとし、これを二つの場合に分けている。そのうちの一つは、人為的に、つまり「戦争で死んだ兵士の遺体を水に投げる、家畜の死骸を放置して腐敗させる」などによって空気や水が毒されることにより、疫病が発生する、というもので、もう一つの場合は、небесни бълъзнь [болъзнь の間違い? ] 「天空の病」の場合である。後者の説明にはこうある――

МОКРИНА ВЕЛИКА КОЮ ПРИМА ВЪЗДУХЪ ВЪ СЕВЪ И СЪ ВНИМЪ ВЕЛИКОМЪ МОКРИННМЪ ВМЕКСИ ПАРЕ И ДИМВЪ ВСТРЕ И ЧИНИТЪ ИХЪ ГНИТИ И ЗЕМЛЯ СЕ ТРЪПИ И ТРЪПЪНА РАДИ ГНИВЪ ЗЕМЛЯ И НЕ ТЪКМЪ ЗЕМЛЯ НЪ И ВЪДА<sup>56</sup>

「空気が湿気を吸収し、この湿気が水蒸気と濃霧を飽和させこれらを汚染する。それにより大地もまた影響され、そのために、大地のみならず水も腐る」

前者の瘴気との違いは、前者が人為的な要因で空気や水が汚されるのに対し、後者では湿度が原因で瘴気が発生するとみなす点にあるように読める。じっさい、この後には、春に南風が吹き続け、そのために空気が湿る場合、または、夏に夜の冷え込みが強く昼は曇りがちで暖かい場合、あるいは酷暑や冷夏で天候が変わりやすく、風向きが始終変わる場合などに空気の腐敗が起こり、この毒された空気を肺に入れた人間、生き物は力が弱り高熱を発するに至る、と空気中の湿度の高まりと疫病の流行を結びつける記述がある<sup>57</sup>。

湿気と伝染病の因果関係はともかく、ここに記されている「この悪しき空気は、人を内から支配するが、身を遠ざけることができない者以外には、また健全な体を持つ者には、移らない」(СЪИ ВЪЗДУХЪ ВЪСЕГДА ВЪДЕТЪ ВЪ ЧЛОВЪКА И СПРАВАРЪ. И НЕ ИДЕТЪ У ДРУЗЪХЪ ТЪКМО ВЪ ВНЪХЪ КОИ СЕ НЕ УМЪЮ ЧУВАТИ ИЗ ДАЛЕКА И НИМАЮ И ПЛЪНО ТЪВЛО) は注意を引く。この部分を、カティチの現代セルビア語翻訳は「あらかじめ予防措置を講じることができない者」と訳し、из далека を時間的な意味で解釈しているが、単純に「距離をおいて」とも読める。そのように読めば、感染予防に、今でいうところの「社会的距離」が重要であることを経験から知っていたことを思わせる一文である。

この文書では、疫病の対処法も記されているが、その筆頭に挙げられているのは、古代ギリシャのヒポクラテス以来ヨーロッパで長く、さまざまな病の治療法として用いられてきた瀉血であり、とくに高熱を発する疫病患者にはこれが有効であるとして

いる。また、疫病は空気が汚染され腐敗する瘴気〔ヒランダル文集では、гнилость воздушная「空気の腐敗」、очемерение「毒されること」といった表現が使用されている〕で起こるとみなされているわけだが、このことに呼応するように、患者の治療にも空気が重要視されている。つまり患者を風通しのよい空気の清浄なところに寝かせ、空気を喚起することが重要で、空気の浄化のためには、香りのよい植物やリンゴ、オレンジなどを部屋におくのも良い効果が得られる手段である、と説くのである。さらには症状によって、なるべく大量の冷水を飲ませる、あるいは逆に水分を取らせない、といった手当ての方法も示されている。もちろん近代前の知識に基づいて書かれており、混乱した部分も多くはあるが、空気感染への警戒や、今で言えばアロマセラピーとでもいえるような治療の方法は、現代人が読んでも理にかなったものと読める内容である。

ヒランダル医術文集に記されたような医術がじっさいどの程度セルビアの修道院で実施されていたかは不明だが、西欧地中海で発達した医術が東方教会圏にこのような形で伝播していたことを示すという点で、この文書は貴重なものであり、さらなる研究を要する資料であるといえるだろう。

#### 4. おわりに

本稿で紹介したように、文献を通時的に見ると、神の罰として恐れるだけの時代から、疫病を観察し記述することを覚え、やがて治療ということを知るにいたったように、中世のスラヴ人たちの疫病に対する態度が、時とともに変化していったことがわかる。しかしながら、修道院による薬草治療などがあったとはいえ、医療の恩恵にあずかる機会がほとんどなかったと思われる中世の一般民衆にとって、疫病は、どこからか現れて人々に害をなす悪魔的な存在であり続けたのだろう。疫病の、民衆における表象については、栗原成郎著『スラヴ吸血鬼伝説考』に述べられている<sup>58</sup>。ここに記されているのは主に18世紀以後の記録された民間伝承に現れる、魔女や吸血鬼と同一化された存在だが、こうした悪魔的な疫病の表象は、太古からさまざまな地域の民衆の間で作られ作り出されてきたものでもあるように見える。『黒死病 ペストの中世史』では、アメリカの先住民ピマ族の「オイメダム」という「さまよう病」の伝説が紹介されている——「……『どちらからおいでですか』1人の先住民が黒い帽子をかぶった背の高いよそ者に訊ねる。『はるか遠くから……東の海を渡って』とよそ者は答える。『何を運んできたのですか』『死を』と、よそ者は答える」<sup>59</sup>。スラヴの民衆の間に伝えられ、擬人化された疫病の姿は、このオイメダムに通じる。

セルビア語で疫病とくにペストは *куга* だが、これはセルビアの民衆の間で、やはり疫病を表す女性名詞 *чума* と同じように、女性の魔物に擬人化されて疫病の表象となった。これについて、セルビアのヴァーク・カラジッチは、つぎのように記述してい

る——人々が信じるころでは、クーガは女の姿をしていて、おもに屋外で人をつかまえるか、人家にやってきて、私を言うとおりの場所に背負って運んで行け、と命じる。クーガは海のむこうに祖国があり、人々が罪を犯すようになると、神に命じられてその地にやってきて、神が命じただけの数の人々を殺すのだ、と<sup>60</sup>。

ここからは、いっぽうでアメリカの先住民のオイメダムと共通する、さまよう疫病の化身の姿を、またいっぽうではヘブライズム以来の神の罰としての疫病の表象を見ることができる。しかしまた、ヴークは、クーガが猛威を奮っている時には、家の食器をきれいに洗っておかないとクーガに狙われる、という言い伝えも紹介しており、ここからは、衛生の重要性を経験知として人々が知っていたことも窺わせる。

21世紀にはいつて起きたコロナ・パンデミックで世界はパニックに陥り、陰謀説をふくむさまざまな偽情報が、情報化時代のツールである SNS によって世界に拡散した。ウシなど動物の排泄物を飲むとよい、とか、ニンニクを食べると予防になる、とか、中世さながらの“治療法”が世界各地に飛び交い、某大国の大統領はアルコール消毒液を注射するといいらしいと、公の場で口にした。日本でもアマビエがにわかには脚光をあび、さまざまなアマビエグッズが売り出され話題となった。科学技術は中世の頃にくらべ飛躍的に進歩したとはいえ、こうした現実を見る限り、予期せぬ死や病の恐怖に直面したときの人間の本质は、中世の時代から現代に至るまで、さして変わっていないようにも思われる。

## 注

- 1 日本聖書協会新共同訳による。
- 2 Alfred Rahlfs, Robert Hanhart, *Septuaginta: id est Vetus Testamentum Graece iuxta LXX interpretes* (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2006), Vol. I. p.621.
- 3 *Лавров П. А. Материалы по истории возникновения древнейшей славянской письменности. Л., 1930. С.77.*
- 4 ゲンナジー聖書は、ノヴゴロドの大主教ゲンナジーの指導下にノヴゴロドで作成された。正教圏スラヴ世界ではじめて、新約・旧約聖書の諸書を一つのコーデクスにまとめた。いくつかの書は既存の教会スラヴ語訳の写しだが、歴代志、エズラ記、エステル記などスラヴ語訳が存在しなかった書は、ウルガタから訳されてここに含まれた。
- 5 たとえば *Алексеев А. А. Текстология славянской Библии. СПб., 1999. С.282.* なお旧約聖書の一連の東方教会圏スラヴ語訳はギリシャ語聖書、基本的には LXX に依拠している。
- 6 ロシア語式には『オストロク聖書』。イワン・フョードロフ（1520 頃–1583）により 1581 年に作られた、ロシア最初の活字印刷された聖書。現ウクライナのオストロフで作られた。大部分をゲンナジー聖書と同系譜の写本に依拠している。引用箇所は *Острожская Библия*

1581. Переиздание. С.323.
- 7 スラヴ文献学の伝統で、1100年頃までにマケドニア、ブルガリアで作られた古スラヴ語文書を、古教会スラヴ語の「カノン」=規範書とよぶ。
- 8 *Северьянов С. Н.* Синайская Псалтырь. Глаголический памятник XI века. Петроград. 1922. С.103.
- 9 Rahlfs, *Septuaginta*, Vol.II. p.85.
- 10 とはいえ、古ブルガリア語辞書ではこの箇所を *сѣмрътъ* を *моръ* の意味と定義している：*Иванова Мирчева Д.* ред. Старобългарски речник. Т.2. София. 1999. С.833.
- 11 Benjamin Garstad, *Apocalypse. An Alexandrian World Chronicle*, ed. and transl. by Benjamin Garstad (Cambridge Mass : Harvard University Press, 2012), vii-x.
- 12 *Истрин В. М.* Откровение Мефодия патарского и апокрифические видения Даниила в византийской и славяно-русской литературах. М., 1897; Francis Thomson, “The Slavonic translations of Pseudo-Methodius of Olympus. Apocalypse,” *Търновска книжовна школа. Т.4. Културно развитие на българската държава края на XII - XIV век.* София. 1985, pp.143–165; Keiko Mitani, “Intertextuality in Medieval Slavonic Literature: Apocalypse of Pseudo-Methodius and the Legend of the Twelve Fridays,” *Scripta & e-Scripta*, No.19 (2019), pp.145–164.
- 13 *Истрин*, Откровение Мефодия патарского. Тексты, С.94.
- 14 Vatroslav Jagić, *Quattuor Evangeliorum versionis palaeoslovenicae codex Marianus Glagoliticus characteribus Cyrillicis transcriptum*. СПб., 1883. pp.293–294. なおギリシャ聖書でこの箇所は *σεισμοί τε μεγάλοι κατὰ τόπους καὶ λιμοὶ καὶ λοιμοὶ ἔσονται*.
- 15 おなじく古教会スラヴ語カノンのゾグラフ写本でも *І ВЪ ГЛАДИ І ВЪ МОРІ ВЪДЖЪТЪ* とある：*Vatroslav Jagić, Quattuor evangeliorum Codex Glagoliticus olim Zographensis nunc Petropolitanus* (Berolini, 1879), p.126.
- 16 *Этимологический словарь славянских языков : праславянский лексический фонд / Под ред. О.Н. Турбачев. М., Т.18. 1992. С 101; Т. 19. 1994. С.250–251.*
- 17 *Полное собрание русских летописей. Т.15. Лѣтописный сборник именуемый тверскую летописью.* СПб., 1863. С.226.
- 18 Jagić, *Quattuor Evangeliorum versionis palaeoslovenicae codex Marianus*. p.87. ゾグラフ写本もマリア写本と同じく *ГЛАДИ* と *ПАГОУБЫ* である：*Jagić, Quattuor evangeliorum Codex Glagoliticus olim Zographensis*, p.34.
- 19 詩篇 108: 13；シナイ詩篇の引用元は *Северьянов*, Синайская Псалтырь. С.145. 同じ箇所の LXX は *εις ἐξολέθρευσιν*: Rahlfs, *Septuaginta*, Vol.II. p.122.
- 20 *Codex Suprasliensis*, f.34r. [原本は <http://suprasliensis.obdurodon.org/>].
- 21 *Орлов М. И.* Литургия святого Василия Великого. Вводные сведения. 1. Греческий и славянский тексты. СПб., 1909. С.243.
- 22 *Беседы на Евангелия. РНБ. Погод. 70.* [Josef Kurz (ed.) *Slovník jazyka staroslověnského*. I. (Prague: Československá akademie věd, 1966), p.448.]
- 23 *Hvalov zbornik 『フヴァール文集』*として知られるもので、新約聖書や詩篇、そのほかいく

- つかの文書が含まれている。文集の冒頭にはグラゴル文字の書き付けがありダルマチアのグラゴル派からもたらされたものと推測される。*Hrvatska enciklopedija* [<http://www.enciklopedija.hr/Natuknica.aspx?ID=26771>]; Đuro Daničić, “Apokalipsa iz Hvalova rukopisa,” *Starine*, 4 (1872), pp.86–118.
- 24 Библия 1499 года и Библия в синодальном переводе. М.: Мизей Библии. Т. 8. 1992. С.459.
- 25 Daničić, “Apokalipsa,” p.98.
- 26 KJB (欽定訳聖書) では “with all plagues” としている [<https://www.kingjamesbibleonline.org/Revelation-11-6/>].
- 27 Frederick Danker, Walter Bauer, *A Greek-English lexicon of the New Testament and other early Christian literature* (Chicago: University of Chicago Press, 2000), p.825.
- 28 Иванова Мирчева (ред.) Старобългарски речник. Т.2. С.111.
- 29 Фасмер М. Этимологический словарь русского языка. Т.4. М., 1987. С.382.
- 30 Супотницкий М.В. Супотницкая Н.С. Очерки истории чумы. Кн. I. Чума добактериологического периода. М., 2006. С.61–64.
- 31 Повесть временных лет. ロシア最古の年代記で、天地創造から 1110 年代までのキエフ・ルーシの歴史を記したもの。14 世紀のラヴレンチー写本と 15 世紀のイパーチー写本知られる。
- 32 Васильев К. Г. Сегал А.Е. (ред. Метелкин А.И.) История эпидемий в России. Материалы и очерки. М., 1960. С.22; 原文引用元は Полное собрание русских летописей. Т.1. Лаврентьевская летопись. Вып.1. Повесть временных лет. Л., 1926. С.163.
- 33 Васильев К. Г. Сегал А.Е. История эпидемий. С.22.
- 34 Ibid. С.22.
- 35 Лаврентьевская летопись. Вып.1. С.214–215.
- 36 Ibid. С.215.
- 37 Полное собрание русских летописей. Т. 10. Никоновская летопись. СПб., 1885. С.101–102.
- 38 『ヴォскресенский монастырь-修道院年代記』は 16 世紀のモスクワでつくられたもので、9 世紀から 1541 年までを記述している。引用箇所は Полное собрание русских летописей. Т. 7. Воскресенская летопись. СПб., 1856. С.185.
- 39 シゲリスト 『文明と病気』、第 5 章。
- 40 Васильев К. Г. Сегал А.Е. История эпидемий. С.26.
- 41 Супотницкий М.В. Супотницкая Н.С. Очерки истории чумы. С.84.
- 42 Воскресенская летопись. С. 210.
- 43 Полное Собрание русских летописей. Т. 5. Псковская II летопись. СПб., 1851. С.14.
- 44 Полное Собрание русских летописей. Т. 4. вып. 1. Новгородская IV летопись. СПб., 1915. С.289.
- 45 Псковские летописи. Под ред. А. Н. Насонов. М., 1955. С.103.
- 46 ケリー 『黒死病 ペストの中世史』第 4 章を参照。
- 47 Полное собрание русских летописей. Т.8. Продолжение летописи по Воскресенскому списку. СПб., 1859. С.12.

- 48 *Змеев Л.Ф.* Русские врачевники. Памятники древней письменности. СХІІ. СПб., 1895. С.2.
- 49 *Минский М. Богоявленский Н.А.* Медицина древней Руси. М.: Родина. 2018. 6ff.
- 50 Кирилл Белозерский 22/1099. f.227v-228. このテキストは Памятники старинной русской литературы / Под ред. А.Г. Кушелев-Безвородко. Вып.4. СПб., 1862. С.216 に刊行されている。
- 51 *Соловьев С. М.* История России с древнейших времен. М., 1859. Т.9. Гл. 3 [*Минский М. Богоявленский Н.А.* Медицина древней Руси. С.40]
- 52 プラハ国立博物館シャプアーリクコレクション VV 110-IX F 10 Ш. ホドシ修道院は現在のルーマニア西端に位置するアラドに 11 世紀頃作られた正教会修道院で、19 世紀までセルビア修道院であった。
- 53 *Бреберина М.* Историја хирургије на територији данашње Војводине //Свеске матице српске. Грађа и прилози за културну и друштвену историју. Серија природних наука. Св. 16. Нови Сад. 2014. С.30–31.
- 54 *Катић Р.* Порекло и време настанка хиландарског медицинског кодекса / Р. Катић ред. Хиландарски медицински кодекс N. 517. Перевод. Београд .1989. XXXIII ff.
- 55 たとえば Ajesh Kannadan, “History of the Miasma Theory of Disease,” ESSAI. Vol. 16 (2018), Article 18 [<https://dc.cod.edu/essai/vol16/iss1/18>].
- 56 *Р. Катић.* Хиландарски медицински кодекс N. 517. Приложение, С.262.
- 57 *Ibid.* С.69; Приложение, С.262–263.
- 58 栗原成郎『スラヴ吸血鬼伝説考』、河出書房新社、1991年、141–157頁。
- 59 ジョン・ケリー『黒死病 ペストの中世史』、第1章を参照。
- 60 *Караџић В.С.* Живот и обичаји народа српскога. Беч. 1867. С.219.

【特集】

## ロシア帝国のポーランド人と 1830-31 年のコレラ

越野 剛

## はじめに

1831年夏のペテルブルクはコレラが猛威を振るい、都市の住民は恐慌状態にあった。首都に住んでいたポーランド人作家のオシプ・ブシェツワフスキは次のように当時を振り返っている。

ペテルブルクでコレラが発生したのがちょうど最初のポーランド反乱の時だったので、首都の住民の大多数は、ありもしない毒殺はポーランド人が買収してやらせたものか、あるいは直接に手をくださったものだと迷いもせず決めつけた。夜になるとポーランド人が菜園に分散して野菜に毒を撒いているとか、こっそりと建物の門をくぐって中庭に置いてある水桶に毒を入れるとか、叛徒が雇った船に砒素を一杯に積みこんでネヴァ川に流しているというような馬鹿げた話が町中に広がって繰り返し語られた。いろんな工房の見習の少年や工場労働者が先頭に立ち、興奮した平民たちが徒党を組んで街路を行き来し、どういうわけだか「コレラ犯 холерщики」だと思われた人はだれでも殴って、ときには責めさいなどで殺してしまうこともあった。(…) ペテルブルクのポーランド人は悲しむべき立場に置かれていた。彼らはロシア人の家庭に行くことを止めてしまった。主婦が大テーブルに茶を出す際に、ポーランド人から目を離さず、砂糖壺、クリーム、クッキーを離れたところに置くようになったからだ<sup>1</sup>。

19世紀においてコレラは未知の現象だった。その実体が目に見えないにも関わらず、死を招く危険な症状だけが目の前に存在するという状況は、その正体をめぐる実は根拠のない言葉だけを増殖させる。メディアを通して拡散される言説が強いリアリティを持つとも言い換えられる。症状をもたらずコレラ菌はまだ発見されておらず、身体接触によって病気が感染するのか、瘴気(ミアズマ)が空気を伝わって症状を引き起こすのかをめぐって結論の出ない論争が続いた。人や物の移動を止めるのが有効かどうか、論証もできないうちに厳格な検疫のシステムが導入された。神による罰というような超越的な領域に原因を求めることもできたが、何らかの特定の社会集団が毒を撒いているという説明の方がはるかに合理的であり、近代的であったとさえいえ

る。医師、警察、外国人など、様々な集団に疑いがかけられたが、ロシアでは支配下にあったポーランドで1830年末に大規模な反乱が発生したこともあり、住民の大量死はポーランド人の陰謀によるものだという妄想が現実味を帯びてしまった。

ロシアにおける伝染病やコレラの歴史には多くの先行研究がある。1830年代のコレラ禍についてはマックグリュウの社会史的な研究が今日においても価値が高い<sup>2</sup>。文化史の観点ではボグダノフが疫病と戦争の言説の類似性を指摘し、コレラをめぐるテキストの交差の中で敵・英雄・犠牲者などのイメージが生み出されるプロセスを分析している<sup>3</sup>。ポーランド人が毒殺者だという流言が存在したことはよく知られているが、専門的に研究したものは管見の限りではマルティノヴァの小論だけであり、噂を語る主体（農民、兵士、都市民）と語られる客体（外国人、貴族、医師）の関係がよく整理されている<sup>4</sup>。本論ではコレラ禍とポーランド11月蜂起を通して、ロシアにおけるポーランド人のイメージがどのように変化したかを考察する。同時代人の書簡や回想記の言説を題材にして分析するが、その他にアダム・ミツケーヴィチとファデーイ・ブルガーリンというロシアで活躍した2人のポーランド人作家に焦点を当てる。ミツケーヴィチの『コンラット・ヴァレンロット』が描く正体を隠したアンチヒーロー像が重要な役割を果たすことになる。

## 1. ロシアにおけるコレラ禍の概況

コレラはインドの風土病として存在していたものが、19世紀に入って初めてグローバルな感染症になった。本論で扱うのは第2次パンデミーとよばれる時期のもので、ヨーロッパの人々にとっては初めてのコレラ流行である<sup>5</sup>。中東からたびたびロシア帝国内に浸透した伝染病は1829年8月にオレンブルクまで到達し、30年から31年にかけてモスクワとペテルブルクを含むロシア帝国の中央部分を荒らして回り、さらにポーランドを介して西欧に拡大していった。ロシア全体では50万人以上の感染者を出し、その半数近くが死亡したとされる。両首都でもそれぞれ5000人に近い死者を出した。

詩人のプーシキンのこのときの体験をみると、1830年9月1日<sup>6</sup>に領地の管理のためモスクワからニジノヴゴロド県のボルジノ村に移動している。ニジノヴゴロドでは8月にコレラが発生し、ちょうどプーシキンと入れ違うように、コレラは東から西に移動してモスクワに到達した。コレラについて貴重な記録を残しているモスクワの貴族クリスチンによれば、9月初めにニジノヴゴロドからモスクワにきた商人が、その道中で二人の息子をコレラでなくしたという<sup>7</sup>。9月18日にモスクワは閉鎖され、年末にいたるまで感染者が出続けた。感染を妨げるための検疫線が引かれたせいで、プーシキンはボルジノ村に長期滞在を余儀なくされる<sup>8</sup>。いわゆる「ボルジノの秋」といわれる創作の波はこの時期に訪れた。村で書かれた多くの作品の中でも、詩劇『ペ



『スト流行時の酒盛り』は、当時の詩人の心境を映し出しているようで興味深い。

コレラは冬季にいったん収束するかに見えたが、1831年の夏に今度はペテルブルクを恐怖に陥れる。コレラなどという病気は存在せず、何者かが毒を撒いているという根拠のない噂が広まり、「犯人」の制裁を求める住民の暴動が発生した。これは前年のモスクワでは起きなかった事態である。民衆の暴力には様々な要因が考えられるが、ここでは30年末から始まったポーランド反乱とコレラの関係に焦点をあてて考察したい。

1830年11月のワルシャワでの蜂起に対抗して、翌年1月にはディビチ将軍の率いる軍が鎮圧に向かう。夏までには反乱は収束するが、その過程でコレラがポーランドでも猛威をふるうようになった。東方に由来する未知の疫病の脅威は残虐な専制ロシアのイメージと容易に結びつき、ポーランド側や西欧の一部では、感染源としてロシア軍を批判する動きが見られたが、実際には交易などの複数の経路を介して病気が広まったようだ。4月10日のイガニエの戦いに際して、両軍に多くの患者が発生した<sup>9</sup>。5月にはワルシャワに疫病が到達している。

5月末にはロシア軍のディビチ将軍が急死するというショッキングな出来事が起こる。公式発表では死因はコレラとされたものの、興味深いことに、その死因が実は毒だったという噂がこのとき囁かれたことが知られている。誰も見たことのない伝染病よりも、分かりやすい説明が求められたといえる。もともとこの時点では敵（ポーランドの反乱者）に毒を盛られた可能性よりも、ニコライ1世の不興を買ったディビチが自ら毒をあおったと考える人の方が多かった<sup>10</sup>。マックグリュウはディビチの死をめぐる議論が、毒殺説のひとつの枠組みを作ったと推察している<sup>11</sup>。

ペテルブルクでは最初のコレラ患者が6月15日に見つかったから、7月にかけて疫病が猛威をふるった。北方の首都での感染対策は前年のモスクワよりも厳しく、患者への対応も医療従事者ではない警察官に依拠するところが大きかった<sup>12</sup>。健康な人間までも強制的に病院に連れていかれるのではという恐怖と不信感が都市民の間に高まっていく。コレラなどという病気は嘘であり、水や食物に毒が入れられているという噂は早くから囁かれていたようだ。ペテルブルク大学教授ニキチェンコの6月20日の日記には、人々がそうした「馬鹿げた噂」を信じていると早くも記されている。「ドイツ人医師やポーランド人に対して罵り、皆殺しにしてやると脅す」ような者までいたという<sup>13</sup>。

流言と並行して都市民のふるまいも殺気を帯びてくる。6月21日は日曜日にあたり、未曾有の危機に怯える人々のため特別な祈禱と十字架行列が教会によって組織された。しかし集まった群衆は儀礼が終わっても解散せず、存在しないはずの病気のせいで収監された患者を「解放」するため、市の東側にあるロジェストヴェンスカヤ区の病院を襲撃した。この企ては失敗に終わるが、人々の興奮は鎮まらず、暴動の中心は

都心部のセンナヤ広場に移る。22日には広場に近い病院に群衆が突入して、ドイツ人の医師が殺害された。患者を運ぶ馬車も市内の各地で行く手を阻まれた。事態を重く見たニコライ1世はペテルゴフの離宮から急きょ首都に駆け付け、23日には暴徒の集まるセンナヤ広場に乗り込んだ。皇帝は民衆に対してカリスマ的な権威を発揮する。最初の一喝で人々は跪き、おとなしく皇帝の演説に耳を傾けたという。いくぶんかの脚色はあるだろうが、皇帝その人は善良であり、そのとりまきの高官たちが腐敗しているという民衆のツァーリ幻想が機能したと考えることもできる。

センナヤ広場の騒乱は収まったものの、緊張感を孕んだ首都の雰囲気はしばらく残存した。6月29日はペテロ・パウロの祭日だったこともあり、酔っぱらった農奴身分の職人が、歩哨中の退役下士官がポーランド人から勲章をもらって人々を毒殺しようとしていると因縁をつけ、暴れまわった挙句に逮捕されるという事件が起きている<sup>14</sup>。

7月末にはノヴゴロド県のスターラヤ・ルッサを中心とした屯田兵地で大規模な暴動が起きた。このときも何者かが毒を撒いているという噂が、民衆の暴力の引き金となった。アレクサンドル1世期の高官アラクチャーエフによって創設された屯田兵制度は、入植させられた兵士たちに過酷な負担を強いるものであり、彼らの間で不満が蓄積されていたことも背景にある。貴族身分である将校の多くが、毒殺者として疑われ、リンチや拷問を受けた。騒動は10日近くにわたって続き、軍隊の出動によってようやく鎮圧された。

## 2. ミツキューヴィチ『コンラット・ヴァレンロット』の疫病と反乱

アダム・ミツキューヴィチはロシア統治下の故郷リトアニアを追放されてから、1820年代の後半をロシアの各地で暮らし、プーシキン、ルイレーエフ、そして後に詳しく触れるブルガーリンなど多くの作家・知識人と交流し、バイロンのような反逆あるいは悲劇のヒーローとして社交界に受け入れられた。ミツキューヴィチがロシア国内で刊行した叙事詩『コンラット・ヴァレンロット』（1828年）は、ドイツ騎士団の侵略にあらがうリトアニアの物語だが、ロシアをはじめとする列強の支配下にあるポーランドを意識して書かれている。「奴隷の武器は裏切り」という有名な台詞に示されるように、主人公コンラットは崇高な目的のためには卑怯な手段を取ることをためらわない。リトアニア人という正体を隠してドイツ騎士団の指導者に選ばれ、自軍を故意に敗北へと導くという主人公のふるまいは、後には「ヴァレンロット主義 wallenrodyzm」として賛否両論を呼び、愛国的ポーランド人のジレンマをよく表現する概念となった。

検閲を無事に通過してペテルブルクで出版された『コンラット・ヴァレンロット』はすぐにロシア語に翻訳され、ポーランド人社会だけでなくロシアの文壇でも好意的

に評価される<sup>15</sup>。しかし 1830 年にワルシャワの士官学校の生徒たちがポーランド総督コンスタンチン大公のいるベルヴェデル宮殿を襲撃して、いわゆる 11 月蜂起が起きると、「言葉は身体となり、ヴァレンロットはベルヴェデルになった」という標語が広まったことからわかるように、ミツキューヴィチの作品が反徒の心情を形成した要因のひとつであったことは疑いえない。ドイツ騎士団への反逆の意図を隠した主人公、そして専制ロシアへの反逆の意図を隠した作品とその出版という二重の面従腹背の構図が後付けで明らかになった。ロシアにとってヴァレンロット主義は、うわべは服従をとりつくろっても、内心では裏切りをたくらむポーランド人という危険なイメージを指すものとなっていったのである。

『コンラット・ヴァレンロット』の第 4 章に挿入された「吟遊詩人の歌」には、ペストをもたらす「疫病の乙女 *morowa dziewczica*」が登場する。白装束に燃え盛る花冠をかぶった乙女がリトアニアの地に出現して、血まみれのハンカチを振ると、町は次々に墓場に変ってしまう。『コンラット・ヴァレンロット』の原注によれば、ミツキューヴィチ自身がかつてリトアニアで疫病の乙女についての伝承を採集したという<sup>16</sup>。ロシア語の *чума* やポーランド語の *dżuma* のように、スラヴ語ではペストを示す単語は女性名詞であり、フォークロアでは伝染病が女性の姿をした怪異としてしばしば表現される。ペストに比べると新しい病気である「コレラ *холера, cholera*」は外来語とはいえやはり女性名詞であり、同じようなイメージで想像された。ミツキューヴィチが作品を構想した段階では、近い将来においてポーランドの反乱が起きると同時にコレラが恐怖の的になることは予想できなかったはずである。しかし結果として「疫病の乙女」の描写は、疫病と革命を結びつける不吉な予言となった。

ミツキューヴィチに傾倒していた若いレールモントフは<sup>17</sup>、1830 年のモスクワで体験したコレラ禍をふまえて『予言』という短い詩を書いた。「腐臭漂う屍から現れた疫病 *чума* は／悲惨な村々をさまよい歩き／陋屋からハンカチを振って誘う」<sup>18</sup>。疫病が不吉な女性の姿で表現されること自体は、上述したようにスラヴの民間伝承では珍しくない。しかし病気を体現する女性の魔物がハンカチ *платок* を振るというモチーフは、ミツキューヴィチが記録したリトアニアのフォークロアに特徴的なものであり、『コンラット・ヴァレンロット』に直接の影響を受けたと考えられる<sup>19</sup>。レールモントフはこの作品で民衆の暴動や革命、専制者の処刑を幻視しており、疫病のイメージはその予兆として位置づけられる。リトアニアの地のペストと戦乱を重ね合わせるミツキューヴィチの「疫病の乙女」と同じ役割を果たしているといえよう。

### 3. 毒殺者の噂とコレラ暴動

コレラそのものが感染するだけではなく、むしろ疫病にまつわる噂話が広く伝播することで、民衆の暴動が誘発される構図が見られる。センナヤ広場での騒乱は、ペテ

ルブルクでの感染がピークに達するよりも早く、根拠のない流言の方がコレラよりも先に拡散した初期の段階で起こった。一方で6月末から連日200人を超える死者が記録されるようになると、もはや暴動どころではなくなってしまう。6月28日のニキチェンコの日記には次のように記されている。「病気が地獄の力でもって荒れ狂う。ちょっと通りを出歩くだけで、何十もの棺が墓地に運ばれていくのに遭遇する。民衆は暴動を起こすのではなく、無言の深い悲嘆にくれるようになった。一切合切が破壊される時が来たかのようで、人々は死刑を宣告されたかのごとく、すでに最期の時が告げられたのかどうか分からないまま、棺の間をさまよい歩いている」<sup>20</sup>。

スターラヤ・ルッサでは本当の患者は一人も見つかっていないのにも関わらず、大規模な反乱だけが引き起こされた。事件の目撃者の多くがコレラ患者を見ていなくても、人々の間で語られていた毒殺者についての噂には言及している。同じ時期のモスクワではコレラはすでに収束していたが、不穏な言葉だけが確実に伝わってきている。モスクワの郵便を管轄していたアレクサンドル・ブルガーコフは、6月29日付の手紙で市内の噴水で毒の入った袋が発見されたというニュースを伝えている<sup>21</sup>。7月21日のクリスチンの手紙によれば、人々は17世紀の有名な連続毒殺犯である「ブランヴィリエ侯爵夫人の精神」に煽られ、「毒を盛られた人、毒を盛る人、そして毒殺の話ばかりしている」。このとき、売り物のほうきに毒が仕込まれているのではないかと疑われたドイツ人の行商人の一家が、群衆の暴力を逃れてクリスチンの住む建物に逃げ込むという出来事も起きた<sup>22</sup>。

毒殺者についての不合理な噂は専ら無知な民衆が信じるものとされている。7月6日付のチャアダエフ宛の手紙でプーシキンは次のように書いている。「民衆 *people* の想像によるとペテルブルクでは毒殺が行われている。新聞は躍起になって脅したり叱りつけたりしているが、残念ながら民衆は読み書きができないので、流血の事態がいつ繰り返されるか分からない」<sup>23</sup>。当時はまだ10代の少女だった作家アヴドチャ・パナエヴァの回想によれば、「民衆 *народ* の間には、ポーランド人や彼らに買収された医者が毒を撒いて、病院で人々を殺そうとしているというような愚かな噂が広まっていた」という。彼女はペテルブルクの通りに面したバルコニーから、毒殺犯であることを疑われた男が群衆に暴行を受けるところを目撃している。それは子供にキセーリをご馳走してやろうと材料を買い求めていた貧しい役人で、ポケットに入れたジャガイモの粉が屋台の店先でこぼれ出してしまう、毒薬を持っていると疑われたのだった。役人は危ういところで通りに駆け出してきたアヴドチャの父親に救出された<sup>24</sup>。

当時の出来事を記録したり回想したりする人々の多くは、コレラの正体は毒であるという噂を信じてはいない。読み書きのできない下層階級の人々、農民、兵士、都市民などの間で虚偽の情報がもっぱら口伝えで広まり、外国人、役人、地主貴族に対して従来から抱かれてきた不信感や嫌悪を増幅させたと考えられる<sup>25</sup>。しかし貴族や知

識人の間でも独自の噂話のネットワークは形成されていた。ペテルブルクの疫病や暴動の話聞いたモスクワのクリスチンは、毎日のようにそれらをトゥーラに滞在中のボプリンスカヤ伯爵夫人に知らせている。ペテルブルクとモスクワの郵政局にそれぞれ務めていたコンスタンチンとアレクサンドルのブルガーコフ兄弟はコレラについて盛んに情報のやりとりをしている。

ノヴゴロド県でのコレラ暴動の目撃者である役人ソコロフは、貴族身分の地主や将校がポーランド人に買収されて、井戸や川、森の野イチゴやキノコにまで毒を撒いているという噂について、「理解しがたい精神異常 непостижимое умопомрачение」や「奇天烈な考え химерная мысль」だと形容している。その一方で民衆に対して地主や将校を抹殺せよという偽の布告を出して暴動を扇動した人々のふるまいは「ポーランド人の加担なしではありえない」と推察されている<sup>26</sup>。モスクワのアレクサンドル・ブルガーコフは、ワルシャワで反乱が起きて以降、ポーランド人への敵意をしばしば吐露しており、6月23日付の手紙ではモスクワ市内で陰謀を企むポーランド人が摘発されたという知人から伝え聞いた怪しげな話を記している<sup>27</sup>。恐らく同じ類の話聞いたと思われるクリスチンは、6月30日付の手紙で、ペテルブルクのコレラ暴動と並行してモスクワでも市内に放火して混乱を引き起こす陰謀があり、ポーランド人が関与しているという噂を伝えている<sup>28</sup>。

6月23日にセンナヤ広場の暴徒を前に立ったニコライ1世は、「私が来たのはおまえたちの罪に対して神の慈悲を請うためである。神に許しを祈りなさい。おまえたちは神をひどく侮辱したのだから。おまえたちは本当にロシア人といえるのか？おまえたちのしていることはフランス人やポーランド人の真似だ」という言葉を述べたとされる<sup>29</sup>。念頭に置かれているのは前年に起きたフランスの7月革命とポーランドの11月蜂起である。ニコライ1世も民衆の暴動の背後にポーランド人の存在を意識していた可能性がある。作家デニス・ダヴィドフによると、このとき広場についてきた平民の人々を皇帝は怪しんで逮捕させ、「こいつらはみんな卑劣なポーランド人で、おまえたちを唆したのだ」と決めつけたせいで、せっかくの皇帝の偉業も台無しになったという<sup>30</sup>。又聞きのアネクドット風の語りなので信ぴょう性は低いですが、センナヤ広場の事件をポーランド人の扇動に結びつける発想それ自体が噂話のように広まっていたことを裏付けている。同日のニキチェンコの記事には、農民風の格好に変装して民衆に金を配り、暴力を煽ったポーランド人が警察に捕まったという噂話が記されている。

1831年のコレラ禍の時期にポーランド人は水源や食物に毒を盛り、さらには役人（医者・警察）や貴族（地主・将校）を買収して毒を撒かせる役割を担ったと想像された。さすがにこの話をまともな受け入れる知識人は少なかったが、ポーランドの反乱に関連して民衆の暴動の背後にはそれを扇動するポーランド人の陰謀があるのでは

ないかという疑いは真剣に受け取られている。ポーランド人＝毒殺者（買収者）という誤った認識が主として民衆のものであるのに対して、ポーランド人＝扇動者という根拠の乏しい言説が民衆とは異なる社会層に広まっていたのである<sup>31</sup>。前者においてポーランド人に買収されるのが役人や貴族などの支配階層であり、後者においてポーランド人に扇動されるのが非支配層の民衆であることを考慮すると、ポーランド人という外部の要因を介することによって、むしろロシア社会内部の断絶があらわにされたと考えることもできる。

#### 4. ブルガーリンとコレラと裏切者の形象

ミツキューヴィチの『コンラット・ヴァレンロット』の刊行が実現したのには、ペテルブルクの文壇で活躍していたポーランド系作家ファデイ・ブルガーリンの力添えがあったことも大きい。二人はともに旧リトアニア大公国の領域（現ベラルーシ）の出身で、1827年から28年にかけてミツキューヴィチがペテルブルクに滞在していた間に両者は親交を深めた。『コンラット』の原稿が気に入ったブルガーリンは、出版のための費用を引き受けることさえ提案している<sup>32</sup>。1828年初めにミツキューヴィチの作品がポーランド語で出版されるとすぐ、ブルガーリンが刊行していたロシア語の新聞『北方の蜜蜂』で「スラヴ諸民族の文学において第一位の座を占める作品のひとつ」として宣伝されている<sup>33</sup>。

コンスタンチン大公の側近としてポーランド統治に参加していたニコライ・ノヴォシリツェフは、『コンラット』がポーランド愛国者のロシアへの密かな反乱を意図していることを見抜いていた。ノヴォシリツェフは早くも1828年4月に、ミツキューヴィチとその作品を支持するブルガーリンの危険性を訴える上申書を出しており、政府機関による調査が行われることになった<sup>34</sup>。一方で皇帝官房第三部（秘密警察）の協力者でもあったブルガーリンは、『コンラット』が中世のリトアニアとドイツ騎士団の戦いを題材にしており、現代のポーランド問題には何の関係もないと反駁する報告書を提出している<sup>35</sup>。今日の視点から両者を比較してみれば、ノヴォシリツェフの方が『コンラット』の解釈として正確であり<sup>36</sup>、ブルガーリンの主張が一種の政治的な方便であることは明らかだが、ロシア帝国内に暮らすポーランド人の微妙な立ち位置をよくうかがわせるエピソードだといえる。当局による新たな訴追を恐れたミツキューヴィチは翌1829年5月に出国、二度とロシアに戻ることはなかった。時を経て1855年に、クリミア戦争でロシアに対抗する軍団を組織するためトルコに向かい、その地でコレラに倒れるが、これは第3次パンデミーの時期にあたる。

ポーランドの反乱の鎮圧が大詰めに入り、ペテルブルクではコレラが蔓延していた1831年の夏、ブルガーリンの新聞『北方の蜜蜂』は毎号のように首都の感染者と死者の統計を掲載していた。ポーランド人やその他の外国人がロシア人を毒殺しようと

しているという噂は、ポーランド人であるブルガーリンにとって他人事ではなかったはずだ。7月22日付の紙面にはコレラについての根拠のない流言を否定する記事が掲載されている。もしもポーランドの反乱軍がペテルブルクに毒殺者を送り込んでいたのだとしたら、まず狙われるのは軍隊のはずだが、規律正しい生活を送っている兵士の間では感染者はむしろ少ないという統計的事実があるという。そもそも反乱を起こしたポーランドでもコレラが発生しているのだ。「いったい連中のところでは誰が人々に毒を盛っているというのか。まさか自分たちでというわけもないだろう」<sup>37</sup>。

10月初めには、教養のある地主貴族が無知な農民を啓蒙するという対話形式の読み物が掲載されている。1770年代にモスクワでペストが流行したときには、露土戦争の最中であったこともあり、トルコ人が毒を撒いているという噂が流れたという故事を引いて、同じ過ちを繰り返さないよう訴えている。しばしば聖書の一節を論拠として引用したり、疫病の原因は人々が神に対して犯した罪のせいだと説いたりしており、農民の宗教観に配慮したように見える論の展開は、ノヴゴロド県の屯田兵地で起きた民衆の暴動を念頭に置いたものと考えられる。地主貴族の話を最後まで聞いた農民の長老は、「世の中のあらゆるところに毒を盛るなんて出来ないのは明らかだし、誰がそれで得をするというんだろう。異教徒もキリスト教徒も、ロシア人もポーランド人もコレラで死ぬわけだから、誰が誰を毒殺するんだって話だね。旦那さん、あんたが正しいよ！」と言って納得する様子だ<sup>38</sup>。どちらの記事もブルガーリンの意図に沿ったものと考えられるが、少なくとも後者には本人のものと思しき署名があり、読者もそのように理解しただろう<sup>39</sup>。

ブルガーリンはもともとはルイレーエフなどデカブリストの作家と親しく、プーシキンとも良好な関係にあったが、次第に専制政府寄りの立場を明らかにして、リベラルな知識人の反感を買うようになった。一方で長編小説『イヴァン・ヴイジギン』(1829年)の大成功で、作家としての名声はピークに達している。しかしロシアとポーランドの狭間で政治的な綱渡りを試みてきたブルガーリンの文学的な評価は、1830-31年のポーランド反乱とコレラ禍を契機として、大きくバランスを崩したように思われる。レイトブラットを始めとする近年の研究によって是正されつつあるとはいえ、秘密警察への密告者という20世紀のロシア文学史では通説となっていたブルガーリンの否定的な人物像はこのとき生まれたのである。ブルガーリンが当局に内通していることは、第三部長官ベンケンドルフがその手紙を政府高官の作家ドミトリイ・ダシコフに見せたことがきっかけとなり、1829年末には文壇の多くが知るところとなった<sup>40</sup>。プーシキンが1830年に『文学新聞』(4月6日20号)に載せた記事「ヴィドックの手記について」は、フランスの有名な密偵フランソワ・ヴィドックについてと思わせておいて、実際には文学上の競争相手を当局に密告するブルガーリンを風刺した文章である<sup>41</sup>。同じころ、「君がポーランド人なのは大したことじゃない／コシチューシコも

ミツキューヴィチもポーランド人だ！／…／いけすかないのは君がヴィドック・フィグリーリンだってこと」という寸鉄詩を創作して、ヴィドックというあだ名を定着させてしまった<sup>42</sup>。

ポーランド人としてのブルガーリンの出自や経歴をめぐる当てこすりが、両者の論争を感情的に加熱させた側面もある。1830年3月7日の『文学新聞』14号に、刊行されたばかりのブルガーリンの歴史小説『僭称者ドミトリイ』を酷評する匿名の文章が掲載される。歴史的人物の造形の弱さを指摘するのが主たる論点だが、17世紀のロシアが西欧文明から隔てられた野蛮な異郷として描かれることに不満が隠されていない<sup>43</sup>。「ロシア人に比べてポーランド人への不公平なえこひいきが随所に見られる」ことは仕方がないとしても、「愛国心は感染するものであり、我々はロシア人作家によって書かれた同じ時代の物語ならばもっと満足して読んだであろう」と断じている<sup>44</sup>。著者はプーシキンの盟友デリヴィグだが、ブルガーリンはプーシキン本人が書いたものだと思ひ込み、数日後の3月11日の『北方の蜜蜂』に反撃の文章を載せた。「文明国フランスでは文学に携わる外国人は当地の人々に特別な敬意を受けている」のであり、「ミューズよりも酒と豊穡の神々に献身するような生粋のフランス人」と「フランスに併合されるまでは自分の祖国を愛し、併合後はフランスも同じように愛した異国人」とを比較して、どちらの作家の方が尊敬に値するだろうかと問いかけている<sup>45</sup>。フランスの文壇の話をしているようで、実際にはプーシキンとブルガーリンを示唆しているのは明らかである<sup>46</sup>。プーシキンがヴィドックのあだ名で密告者としてのブルガーリンを非難するのはこのすぐ後のことである。コレラがモスクワに到達する一か月前の8月7日の『北方の蜜蜂』には、バイロンの模倣者である詩人の誰それが「先祖のひとりが黒人の王子だった」のを証明しようとして、ラム酒ひと瓶で買われたという当時の記録を発見したという一文が現れる<sup>47</sup>。今度はプーシキンの母方のハンニバル家の祖先がアフリカ出身であることが揶揄されており、ポーランド人という出自を非難されたことへの意趣返しともいえる。

翌1831年の夏、ちょうどペテルブルクでのコレラ流行の最中、モスクワの雑誌『テレスコープ』にまたもやプーシキンのブルガーリン批判の文章が掲載される。そこにはブルガーリンとその盟友のニコライ・グレチといったペテルブルクの非ロシア系作家たちがモスクワを軽視する姿勢を非難する一節がある。「モスクワで生まれ育ったのは大部分が生粋のロシア人であり、フランスの軍旗と共に敗走しようが、ロシア語を用いてロシア的なものを汚そうが、どうでもよい、どこだろうと住めば都というような余所者や裏切者はお呼びでない」<sup>48</sup>。1612年や1812年の戦争でモスクワが外国の軍隊に蹂躪された記憶にも言及されており、ナポレオン配下のポーランド軍団に加わり、モスクワ遠征にも参加した過去のあるブルガーリンは、ロシアに対する「裏切者」ということになる。



ここまでの論争を整理してみると、単純にポーランド人であるということがブルガーリンに否定的なイメージをもたらしているわけではないことも分かる。ミツキューヴィチはロシアの敵であるとしても、ポーランドの愛国的な詩人として敬意を払われていた。むしろロシアとポーランドという複数の帰属性を持ち、状況によって立場を変えるようなブルガーリンの姿勢が嫌われた。ノヴォシリツェフがロシア帝国の臣民となったポーランド人の面従腹背を常に疑ったように、それはミツキューヴィチが『コンラット・ヴァレンロット』で作り出したバイロンの裏切者のイメージにつながる<sup>49</sup>。1830年から31年にかけてのポーランド反乱とコレラ禍という危機において、目に見えない敵、ひそかに毒をまくポーランド人という妄想が生み出されたが、それと軌を一にするようにして変節者ブルガーリンという文学史の評価も定まったのである。

### まとめ

ミツキューヴィチの『コンラット・ヴァレンロット』の矛盾を抱えた主人公のふるまいは、ポーランドでは賛否両論ありながらもロマン主義の英雄像として受け入れられた。しかしロシアでは1828年の刊行時にはバイロンの反逆者を描いたとして人気を博したにも関わらず、ポーランド反乱とコレラ疫の時期を経て、次第に「裏切者」という否定的な評価がなされるようになる。とりわけ1863年の二度目の大規模なポーランド反乱（1月蜂起）を経ると、ヴァレンロット主義 *валленродизм* という言葉は正体を隠した内通者や裏切者を指すようになる。目的は手段を正当化するというイエズス会士のイメージもしばしば重ねられた。ドストエフスキーやカトコフのイデオロギイ的著作では、ミツキューヴィチの主人公が狡猾で信用ならないポーランドというステレオタイプを示すのに用いられる<sup>50</sup>。

最後にコレラと毒殺者をめぐる噂のテーマに戻ろう。1831年7月の日記にプーシキンは次のように書いている。

去年は検疫のせいで、あらゆる産業が停止させられ、運送路が閉ざされ、仲介業者や御者たちが貧困に追いやられ、農民や地主の収入が減少したので、16の県で危うく暴動が起きるところだった。検疫の指令などというものは、それに携わる人たちにも民衆にも理解できないものであり、悪用されるのは避けられない。検疫を廃止すれば、民衆は疫病の存在を否定するのをやめて、予防措置を受け入れ、医者や政府に頼るようになるだろう。けれど検疫があるかぎり、大きな悪よりも小さな悪を選ぶことになり、民衆は日々の糧や、せまりくる貧困と飢餓について、見たことのない病気なんかよりずっと心配するだろう。その病気の症状は毒によるものにととてもよく似ているのだ<sup>51</sup>。

プーシキン自身が検疫のためボルジノ村に閉じ込められた前年の苦い体験を踏まえて書かれていることもあり、実際以上に検疫措置の弊害が強調されているくらいはある。しかし詩人の目は毒殺者という民衆の想像力の背後にある社会矛盾に向けられている。その矛盾はペテルブルクのセンナヤ広場やノヴゴロド県の屯田兵地において、暴力という最も極端な形で露わになったといえる。コレラという病気も毒を撒く未知の犯罪者も、その姿を目に見ることはできない。都市富裕層と貧民、将校と兵士、地主貴族と農奴、そしてロシアとポーランドという様々な分断はコレラの前にもすでに存在していた。目に見えない病気の到来によって、隠されていた抑圧や亀裂が人々の前に視覚化されたのである。

#### 注

- 1 *Пржецлавский О.А.* Воспоминания // Русская старина. 1874. Т. 11 С. 695–698.
- 2 Roderick E. McGrew, *Russia and the Cholera, 1823–1832* (Madison: Wisconsin UP, 1965)
- 3 *Богданов К.А.* Врачи, Пациенты, Читатели: Патологические тексты русской культуры XVIII – XIX веков, М.: О.Г.И., 2005.
- 4 *Мартьянова Л.* “Польские отравители” в 1830–1831 гг. // Русская филология 9. Сборник научных работ молодых филологов. ТАРТУ, 1998. С.41–50.
- 5 ロンドン、パリ、ベルリンなどの事例については、以下のように日本語の先行研究も多い。見市雅俊『コレラの世界史』晶文社、1994年。喜安朗『パリの聖月曜日——19世紀都市騒乱の舞台裏』平凡社、1982年。川越修『ベルリン：王都の近代』ミネルヴァ書房、1988年。
- 6 本論での日付はすべて旧暦（ユリウス暦）であり、新暦とは12日の差がある。
- 7 *Холера в Москве (1830)*. Из писем Кристины к графине С. А. Бобринской // Русский Архив. 1884. Вып. 5–6. С.137.
- 8 *Громбах С. М.*, Пушкин и медицина его времени. М.: Медицина, 1989. С.199–216.
- 9 McGrew, *Russia and the Cholera...*, p.103.
- 10 モスクワにいたクリスチンがペテルブルクの消息筋の話を伝える6月11日付の手紙によると、敵の仕業にせよ自殺にせよ、ディビチの死はコレラではなく毒によるものだと噂されている。コンスタンチン大公は6月3日付の弟のニコライ1世への手紙で、コレラ、毒殺、自殺、卒中の4つの死因説を挙げつつ、毒による自殺だと信じている者が多いと述べる。なお、この手紙のすぐ後でコンスタンチン自身もコレラで死去している。 *Lettres de Ferdinand Christin à une dame de sa connaissance, 1830–1831*. // Русский архив, вып. 5–6 (приложение), 1884. С. 148; *Correspondance de l’empereur Nicolas I et du grand duc Constantin*. // Сборник императорского русского исторического общества. Вып. 132. 1911. С.224.
- 11 McGrew, *Russia and the Cholera...*, p.106.

- 12 McGrew, *Russia and the Cholera...*, p.109.
- 13 Никитено А. А. Дневник в трех томах. Государственное издательство художественной литературы, 1955. Т.1. С. 107.
- 14 Пунарев А. Г. Холерный месяц в С.-Петербурге, июнь 1831 г. // Русская старина. 1885. Т. 47. С. 85.
- 15 Хорев В.А. Польша и поляки глазами русских литераторов. М.: Индрик, 2005. С.64.
- 16 Adam Mickiewicz, *Konrad Wallenrod* // *Dzieła*, Т. 3. (Warszawa: Czytelnik, 1949), s.100, 141–142; 『コンラット・ヴァレンロット』久山宏一訳、未知谷、2018年、74–75頁。栗原成郎『吸血鬼伝説』河出書房新社、1995年、157–160頁。久山は「幽霊女」、栗原は「死の乙女」という訳語を用いている。
- 17 Вацуро В. Э. Мицкевич в стихах Лермонтова // О Лермонтове: Работы разных лет. М: Новое издательство, 2008. С. 180–203.
- 18 Лермонтов М. Ю. Предсказание // Собрание сочинений в 4 томах. СПб.: Пушкинский дом, 2014. Т.1. С. 109. 『コンラット』との関係は注釈でも触れられている。
- 19 ミツキューヴィチの原作では *chustka* となっており、レールモンツフが読んだ可能性の高い『モスクワ通報』誌に掲載されたロシア語散文訳（1828年）では *платок* と同義の *плат* が使われている。Конрад Валленрод. Историческая повесть, взятая из Летописей Литовских и Прусских. Соч. Адама Мицкевича. Перевод С. П. Шеверева // Московский вестник 1828. Ч. 8, №8. С.387.
- 20 Никитено. Дневник в трех томах. Т.1. С.109.
- 21 Братья Булгаковы. Том 3. Письма 1827–1834 гг. М.: Захаров, 2010. С.190.
- 22 *Lettres de Ferdinand Christin...* С.157, 159.
- 23 Пушкин А. С. Собрание сочинений в 10 томах. Т.10. 1962. С.48.
- 24 Панаева (Головачева) А. Я. Воспоминания. М.: Правда, 1986. С.40–41.
- 25 ペテルブルクでポーランド人が医師を買収して人々を毒殺しているという噂を真に受けて書かれた屯田地の退役将校の手紙も見つかっており、民衆の間のデマの拡散は口伝によるものだけではない可能性もある。Егоров А. К. “Это, видно, Польша подкупила докторов так морить...”: к вопросу об источниках возникновения агрессивных слухов во время эпидемии холеры 1830/1831 гг. В России. // Научный журнал, 2016, №8 (9). С.32–34.
- 26 Бунт военных поселян в 1831 году: рассказы и воспоминания очевидцев. СПб., 1870. С.172–173.
- 27 Братья Булгаковы. Письма 1827–1834 гг. С.188–189.
- 28 *Lettres de Ferdinand Christin...* С.150–151.
- 29 皇帝官房第三部長官だったベンкенドルフの回想。Щильдер Н. Император Николай I в 1830–1831 гг. (из записок графа А.Х. Бенкендорфа) // Русская старина. 1896. Т. 88. С.88–89.
- 30 Давыдов Д. В. Анекдоты о разных лицах, преимущественно об Алексее Петровиче Ермолове // Сочинения. М., 1962. С. 509.
- 31 Мартыянова. “Польские отравители” в 1830–1831 гг.. С.47.

- 32 Мочалова В.В. Петербургские поляки (Сенковский, Булгарин) и Мицкевич // *Хорев В.А. Филатова Н.М. Цыбенко Е.З.* (ред.) Адам Мицкевич и польский романтизм в русской культуре. М.: Наука, 2007. С.118.
- 33 Смесь // Северная пчела, 21 февраля 1828, №22. С.3.
- 34 ノヴォシリツェフはそもそも 1823 年にヴィリニウスで知識人の団体フィロマチとフィラレチの摘発を実施して、ミツキエーヴィチの逮捕とロシア国内への追放をもたらした人物である。ブルガーリンについても 1824 年末にポーランドの反体制派に通じた作家として報告している。Дубровин Н. Н.И. Греч, Ф.В. Булгарин и А. Мицкевич // *Русская старина*. 1903. №11. С.334–337.
- 35 Дубровин. Н.И. Греч, Ф.В. Булгарин и А. Мицкевич. С.337–351. 報告書は第三部の次官フォン＝フォークの名で出されているが、実際に文書を作成したのはブルガーリンだと考えられている。Рейтблат А. И. Видок Фиглярин: письма и агентурные записки Ф. В. Булгарина в III отделение. М.: НЛЮ, 1998. С. 16–18, 311–318.
- 36 ミウオシュはノヴォシリツェフの上申書を「すべての批評家がうらやむようなみごとな分析」だとして、若干の皮肉を込めながらも評価している。チェスワフ・ミウオシュ『ポーランド文学史』未知谷、2006 年、関口時正他訳、368 頁。
- 37 Петербургские записки о холере. // Северная пчела. №165, 25 июля 1831. С.3–4.
- 38 Беседа с крестьянами о нынешних обстоятельствах (Письмо к сельскому священнику). // Северная пчела. №222, 2 октября 1831. С.3–4; №223, 3 октября 1831. С.3–4.
- 39 Рейтблат А. И. Библиографический список прижизненных публикации Ф. В. Булгарина в периодических изданиях и сборниках. // НЛЮ, №135, 2015. С.392–417.
- 40 Рейтблат. Видок Фигулярин... С. 36.
- 41 Пушкин. О записках Видока // *Собрание сочинений...* Т.6. С.63–65.
- 42 Пушкин. «Не то беда, что ты поляк...» // *Собрание сочинений...* Т.2. С.334. Фигляринは 1825 年に詩人ヴァゼムスキーがブルガーリンにつけたあだ名で、フィгулярは「奇術師」の意味。Рейтблат. Видок Фигулярин... С. 37.
- 43 『僭称者ドミトリー』の「序文」ではヨーロッパに由来する自由恋愛の概念は、中世キリスト教的なモラルが支配的な当時のロシアにはまだ存在しないと言明されており、そうした設定がポーランドとロシアの境界線を行き来する主人公が体験する複数のロマンスを複雑なものにしている。ブルガーリンは道徳的にはむしろ後者のほうが優位にあるとしているが、ロシアの「愛国的」な読者を苛立たせる要因となったことは想像できる。Булгарин Ф. В. Предисловие. Дмитрий Самозванец // *Полное собрание сочинений*. Спб., 1842. Т.2. С.10–11.
- 44 Дельвиц А. А. «Дмитрий Самозванец». Исторический роман. Сочинение Фаддея Булгарина. // *Сочинения*. Л.: Художественная литература, 1986.
- 45 Анекдот // Северная пчела, 11 марта 1830, №30. С.1–2.
- 46 ブルガーリンはロシア帝国を離れて、一時期ナポレオンのフランス軍に勤務していたこともあるので、フランスへの帰属は単なる言い換え以上のニュアンスを含んでいる。
- 47 Второе письмо из Карлова на Каменный остров. // Северная пчела, 7 августа 1830, №94. С.4

- 48 *Пушкин*. Торжество дружбы, или оправданный Александр Анафимович Орлов. // *Собрание сочинений...* Т.6. С.79.
- 49 プーシキンが『ポルタワ』で描いたウクライナ・コサックの主人公マゼッパは、裏切者の形象としてミツキューヴィチの『コンラット』と対話的關係にあるとされる。*Ивинский Д. П.* Пушкин и Мицкевич: история литературных отношений. М.: Языки славянской культуры, 2003. С.187-207. ブルガーリンの『僭称者ドミトリイ』を比較に加えて考察することもできるだろう。
- 50 *Хвин С.* Уязвленная совесть. // *Новая Польша*, 2001, №5. С.52.
- 51 *Пушкин*. Из дневника 1831 года. // *Собрание сочинений...* Т.7. С.308-309.



【報告】

## 「スタシス・エイドリゲヴィチウス イメージ——記憶の表象」展<sup>1</sup>

貞包 和寛

### 1. はじめに

去る 2019 年、日本・ポーランド国交樹立 100 周年（1919～2019 年）記念事業の一環として、「スタシス・エイドリゲヴィチウス イメージ——記憶の表象」展が武蔵野美術大学にて開催された（挿図 1）。展覧会の情報を以下に示す。

主 催：武蔵野美術大学 美術館・図書館  
会 期：2019 年 9 月 2 日～2019 年 11 月 9 日  
特別協力：駐日ポーランド共和国大使館、ポーランド広報文化センター  
後 援：駐日リトアニア共和国大使館  
監 修：今井良朗（武蔵野美術大学 名誉教授）  
寺山祐策（武蔵野美術大学 視覚伝達デザイン学科主任教授）

本展覧会は、リトアニア出身で 1980 年代よりポーランドに居住するスタシス・エイドリゲヴィチウス氏の作品群（蔵書票、絵画、ポスター、舞台映像など）を展示したものである。

### 2. スタシス・エイドリゲヴィチウスについて

本展覧会でその作品群が展示されたスタシス・エイドリゲヴィチウス Stasys Eidrigėvičius 氏の略歴について記す。なお、こうした文書で人物を名指す際は姓を用いるのが一般的であるが、氏に関してはほとんどの資料、学術書、報道記事などで名（ファーストネーム）を用いることが習慣化している。筆者もこれに従い、氏に言及する際は「スタシス」とする。

スタシスは 1949 年にリトアニアに生まれた。ヴィリニユスの美術アカデミー在学中より蔵書票（エクス・リブリス）や絵画作品を積極的に発表し、1973 年の卒業後より本格的に芸術家としての活動を開始した。蔵書票作家、絵本の挿絵画家として名を馳せ、その後 1980 年代初頭に活動拠点をポーランドに移した。移住後は、当時ポーランドの芸術界で一大潮流となっていた「ポスターのポーランド派 Polish School of

Posters / Polska szkoła plakatu」の作家らと交わり、自身も多数のポスター作品を世に送り出している。また、リトアニア時代より絵本の挿絵画家としても高い評価を得ており、『ながいおはなのハンス』<sup>2</sup>や『ながぐつをはいたねこ』<sup>3</sup>の挿絵はよく知られている。キャリアの当初は細密画を中心とする創作を行っていたが、パステル画、彫刻、インスタレーション、映像なども手がけ、その表現方法は多岐に渡る。

スタシスの作品はニューヨーク現代美術館やポーランドの各国立美術館のコレクションにも加えられており、国際的に高い評価を得ている。また、1987年にNDA画廊（札幌）で初めて日本での個展を開催し、その後もギンザ・グラフィック・ギャラリー（GGG）やクリエイションギャラリー（銀座）など、日本の有名ギャラリーでも個展を成功させている。新潟の越後妻有アートトリエンナーレ（通称「大地の芸術祭」）や富山の世界ポスタートリエンナーレトヤマなどにも複数回出品しており、特に後者のイベントでは1994年に金賞、2009年に銅賞に輝いている。日本とも縁の深い作家であると言えるだろう。

日本語の書籍としては、GGGから出版された「世界のグラフィックデザインシリーズ」の1冊<sup>4</sup>が比較的入手しやすく、かつスタシスの作品群を包括的に論じて分かりやすい。

### 3. 展覧会の概要

展覧会は武蔵野美術大学美術館の展示室3・4・5およびアトリウム2にて、以下の5部から構成された。

1. 窓の向こう Beyond the Window
2. 紙の上の対話 Conversation on Paper
3. フェイスあるいはマスク Faces or Masks
4. イメージと言葉 Images and Words
5. 遍歴する身体 Wandering Bodies

第1部「窓の向こう」では、写真と細密画を中心に展示された。写真の大部分はスタシスのルーツに関連するものである。14歳の頃にゼニットのカメラを手に入れたスタシスは、自身の故郷であるリトアニアのレプシャイ村の風景、両親、隣人たちの姿を好んで撮影するようになった（挿図2）。現在でもフォトモンタージュなどを駆使した作品制作を続けている。一方の細密画は、スタシスがカーリーニングラードで兵役生活（1974年）を体験したころから描かれ始めた（挿図3、挿図4）。スタシスは、思うように芸術活動が続けられない不満により「形而上学とメタファーの世界に導かれていった」と述べている<sup>5</sup>。



第2部「紙の上の対話」では、スタシスがこれまで自身の記録用に描きためてきた日記帳、スケッチブックなどが展示された。スタシスはカウナスの応用美術学校在学中に皮革デザインを専攻していたこともあり、現在でも特注の革製本のメモ帳を持ち歩くなど、革製品に強いこだわりがある。今回の展覧会では、スタシスがこれらのメモ帳に書き溜めていたデッサンなど、公開を前提とはしていなかったごく私的な作品群も公開された（挿図5）。

第3部「フェイスあるいはマスク」では、スタシスの作品群のなかで頻繁に現れる「顔」を描いた絵画と仮面の作品が展示された（挿図6）。特にパステル画の技法を習得した1984年以降、スタシスは「顔」を描いた絵画作品を多く発表してきた。それらの中には映画や舞台公演のポスターとして採用されたものも多い。一方、スタシスは2003年から2004年のパリ滞在中に仮面の制作をはじめた。パンの包み紙など身近な素材で作られた仮面は、スタシスが監督したその後の舞台作品でも使用されている。

第4部「イメージと言葉」では、リトアニア時代から手がけてきた絵本の挿絵および蔵書票が多数展示された（挿図7）。挿絵画家としてのスタシスにいち早く注目したのは日本の美術関係者である。1984年には、書籍『絵本の世界 110人のイラストレーター』<sup>6</sup>においてスタシスが紹介されている。また、リノカット、エッチング、アクアチントなど、様々な技法で制作された蔵書票はヴィリニユスの美術アカデミー在学中より評価が高く、後にスタシスが国際的に活躍する足がかりとなった。

第5部「遍歴する身体」では、特に2000年代前半にスタシスが撮影した写真作品が展示されると共に、スタシスの舞台作品の映像が上映された。前者の写真作品の特徴は、モデルがすべて仮面を被っている点にある（挿図8、挿図9）。これらの写真作品と通底するのが、1990年代にスタシスが手がけた演劇『白い鹿 Biały jelen』(1993年)と『木の人間 Drewniany człowiek』(2007年)である。スタシスが「両親に捧げた」と語る両作品は、自身の故郷や子供時代をイメージした自伝的なものである（挿図10、挿図11）。特に『白い鹿』の劇中では、スタシスが観客の前で作品を制作する場面もあるというユニークなものである。

#### 4. 総評

2019年は日本・ポーランド国交樹立100周年ということもあり、ポーランドの芸術に関心のある者には嬉しいイベントが多かった。本展覧会の他にも、「ポーランドの映画ポスター」（2019年12月13日～2020年3月8日、国立映画アーカイブ）や「しなやかな闘い——ポーランド女性作家と映像：1970年代から現在へ」（2019年8月14日～2019年10月14日、東京都写真美術館）などの展覧会が開催されている。

本展覧会の特徴は、スタシスというひとりの作家に着目した点にあると言えるだろう。スタシスはすでに国際的な知名度を得ている作家であり、その作品数も膨大なも

のであるが、蔵書票をはじめとして個人所有となっている作品も多い。そのなかで777点の作品群を一挙に鑑賞できる機会は極めて貴重なものであったと言える。

グラフィックデザイナーの田中一光はかつて、スタシスの作風を「リトアニアの土、ワルシャワの風」と評した<sup>7</sup>。この言葉が表すスタシスの二重のアイデンティティもさることながら、新しい表現方法に絶えず意欲的に取り組む点も、スタシスの重要な特徴と言えよう。ヴィリニウスでの学生時代に制作した蔵書票で注目を集めはじめたスタシスであったが、その後のカーニングラードでの兵役生活の中で、細密画の技法とメタファーを駆使した表現を磨いた。初めての来日を果たした1978年以来、筆と墨を使用した絵画も手がけており、2003年から2004年のパリ時代には仮面制作にも着手している。スタシスは旅行鞆を自身の「アイコン」として愛用しているが、自身の人生における変化と技法的なヴァリエーションが融合している点こそ、スタシスの表現の最大の特徴と言えるだろう。

このような表現方法の変遷は決して流行を追いかけたものではなく、創作活動のなかで変化してきたものであり、有機的に結びついている。とはいえ先述のとおり、スタシスは多作な作家であるために、作品群をただ眺めていてもこの結びつきに気づくのは困難である。本展覧会は、スタシスが個人的に書き溜めていたスケッチなども含め、膨大な作品群がスタシスのライフヒストリーと関連付けられながら機能的に整理・解説されていた。スタシスの個展としては、規模はもとより、質としても最上のものであったと言えるだろう。

## 5. 謝辞

本展評の執筆を快諾して下さったスタシス・エイドリゲヴィチウス氏および武蔵野美術大学美術館・図書館の関係者の皆さまに深甚の謝意を表します。ありがとうございました。

## 注

- 1 展覧会公式ウェブサイト:<<https://mauml.musabi.ac.jp/museum/events/15937/>> [最終アクセス: 2020/10/03]
- 2 ジェームス・クリュス (あまぬま はるき [訳]) (1991) 『ながいおはなのハンス』ほるぷ出版
- 3 クルト・バウマン (斉藤洋 [訳]) (1991) 『ながぐつをはいたねこ』ほるぷ出版
- 4 スタシス・エイドリゲヴィチウス、田中一光 (1998) 『スタシス・エイドリゲヴィチウス』(スリージブックス 世界のグラフィックデザインシリーズ 34) トランスアート
- 5 Kuc, Monika (2010) *Stasys 60*. Warszawa: ABE Dom wydawniczy, p. 109.
- 6 堀内誠一 [編] (1984) 『絵本の世界 110人のイラストレーター』福音館書店

「スタシス・エイドリゲヴィチウス イメージ——記憶の表象」展



【挿図 1】

展覧会公式ポスター

展覧会公式ウェブサイトより



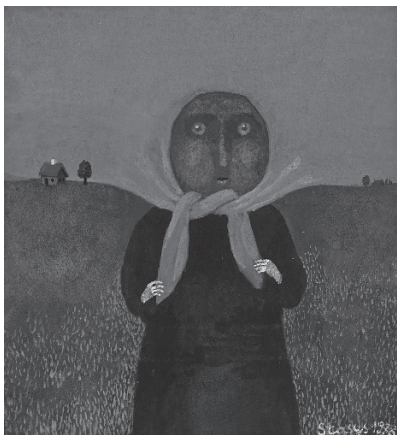
【挿図 2】

「父と母」1970年

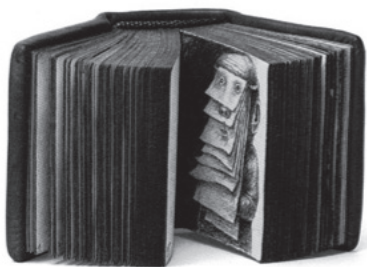
展覧会図録 p. 42



【挿図 3】  
「鞆」 1977 年  
展覧会図録 p. 86



【挿図 4】  
「空」 1978 年  
展覧会図録 p. 89



【挿図 5】  
スケッチブック 1978-79 年  
展覧会図録 p. 174



【挿図 6】

左上「詩人の眠り」2003年  
左下「ヤドヴィガ」2003年  
右上「コーヒー」2003年  
右下「分かれ道」2003年  
展覧会図録 p. 255



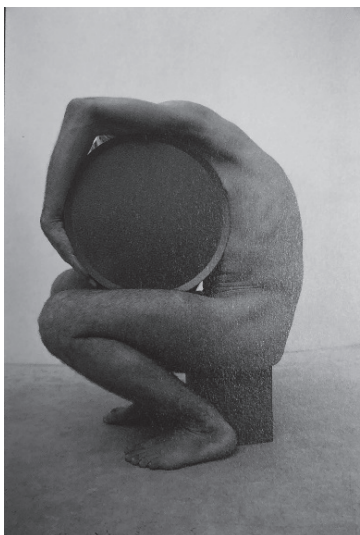
【挿図 7】

「Ex libris Genutes Eidrigevičiūtes」1976年  
展覧会図録 p. 372



【挿図 8】

「ダブルブラック」2002年  
展覧会図録 p. 441



【挿図 9】

「金属の太陽」2006年  
展覧会図録 p. 443



【挿図 10】

『白い鹿』の舞台上でスタシスが描いた作品  
Kuc, Monika (2010) *Stasys 60*. Warszawa: ABE  
Dom wydawniczy, p. 30.



【挿図 11】

『木の人間』の一場面  
Kuc, Monika (2010) *Stasys 60*. Warszawa: ABE  
Dom wydawniczy, p. 31.

【報告】

## 2018/2019 年度日本スラヴ学研究会 奨励賞選考結果についての報告

日本スラヴ学研究会奨励賞選考委員会を代表して、2018/2019 年度年度の同賞の選考過程および選考結果について、以下の通り、報告する。

### 〔選考過程〕

選考に先立ち、選考委員会が結成された。内規第5条に基づき、会長（長興進）、企画編集委員長（三谷恵子）、編集委員長（ヨフコバ四位エレオノラ）、および企画編集委員会によって指名された者（阿部賢一）によって構成され、指名により、阿部賢一が選考委員長を務めることになった。

選考にあたっては、今回の奨励賞の対象は、「2018年、2019年に刊行された単著の研究書」であることを確認した上で、2020年3月7日を期限として、会員による自薦、他薦をメールおよびHP上で呼びかけを行った。その結果、会員からの推薦があったものに加えて、選考委員会からの推薦を加え、候補作は以下の四点（著者名順）であることを確認した。

1. 岡本佳子『神秘劇をオペラ座へ バルトークとバラージュの共同作品としての《青ひげ公の城》』松籟社、2019年。
2. 菅原祥『ユートピアの記憶と今：映画・都市・ポスト社会主義』京都大学学術出版会、2018年。
3. 松尾梨沙『ショパンの詩学 ピアノ曲《バラード》という詩の誕生』みすず書房、2019年。
4. ローベル柊子『ミラン・クンデラにおけるナルシスの悲喜劇』成文社、2018年。

その後、4名の選考委員が、上記4点の候補作すべてを読み、奨励賞としてふさわしい作品について、メールで審議を行った。

複数回にわたるメールでの意見交換の結果、本年度の奨励賞は、下記の著作とすることで選考委員会は一致したことを報告する。

阿部賢一

2020年度日本スラヴ学研究会奨励賞：

松尾梨沙『ショパンの詩学 ピアノ曲《バラード》という詩の誕生』みすず書房、  
2019年。

選考委員長

阿部賢一

2020年6月12日

### 〔所見〕

松尾梨沙著『ショパンの詩学 ピアノ曲《バラード》という詩の誕生』（みすず書房、2019年）は、同氏の博士論文「ショパンの詩学 楽曲構造とポーランド文学構造の比較分析」（東京大学総合文化研究科、2018年3月、学位授与）を改訂したものである。

全13章からなる同書は、「第1部 6人の詩人から読み解くショパンの歌曲 その詩の構造と作曲技法との関わり」、「第2部 《バラード》の条件 ショパンが生んだ新ジャンルをめぐって」の二部構成となっている。第1部では、ショパン自身のポーランド語文体を参照しながら、ポーランド詩人たちの詩に作曲した歌曲を、詩と音楽の両面から分析がなされる。第2部では、文学ジャンル名にも共通する《バラード》というピアノ独奏曲について、ポーランド文学の「バラード」との比較分析が行なわれている。

本書が選考委員会によって高く評価された第一点は、19世紀ポーランドの文学研究と音楽学の成果が結実した学際的な論考となっている点である。本来は詩のジャンルであった「バラード」が、ピアノ独奏曲の名称へと変容していく様相が、オシンスキ、ミツケヴィチ、ヴィトフツキら数多くの文学者、音楽者の作品を下敷きにして、明かされていくプロセスは、知的な興奮をもたらすものであり、委員全員から高く評価された。「バラード」というジャンルに着目することで、隣接する学問分野でありながら十分に検討されてこなかった、文学研究と音楽学の共同研究の可能性を示したものと言えるだろう。

次いで評価されたのは、研究手法である。ポーランド語のみならず、リトアニア語やウクライナ語などの民謡も射程に入れ、ポーランド語の詩および歌の重層的な広がりを持示することに成功している。また実証的で緻密な文体・楽曲分析を行いながら、議論を重ねていく手法は、堅実でありながらも、学術的な野心に満ちたものであり、選考委員会からも高く評された。

以上の二点において、他の候補作よりも若干抜き出していたという判断に至り、松尾氏の著作を奨励賞として推薦することにした。

なお、他の候補作もいずれも博士論文を下敷きにした論考であり、様々な刺激をも



## 2018/2019年度日本スラヴ学研究会奨励賞選考結果についての報告

たらず、学術的にもレベルの高い著作であり、選考は極めて難航した。ディシプリンやアプローチがそれぞれ異なるため、候補作四点すべてを奨励賞としてもよいのではないかという意見もあったが、最終的には、松尾氏の論考が上記の点において傑出しているという点で一致を見た。全体として、本会の研究レベルの向上が窺える選考であったことを言添えておく。

## 執筆者一覧

ABE, Kenichi / 阿部賢一

Associate Professor, Graduate School of Humanities and Sociology and Faculty of Letters, University of Tokyo / 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

GREENBERG, Mark L.

Professor, Department of Slavic & Eurasian Languages & Literatures, University of Kansas

HUNDOROVA, Tamara

Professor, Shevchenko Institute of Literature

ISHIKAWA, Tatsuo / 石川達夫

Professor, School of International Communication, Senshu University / 専修大学国際コミュニケーション学部教授

KOSHINO, Go / 越野剛

Associate Professor, Faculty of Letters, Keio University / 慶應義塾大学文学部准教授

MATSUO, Risa / 松尾梨沙

Research Fellow, Japan Society for the Promotion of Science / 日本学術振興会特別研究員 PD

MITANI, Keiko / 三谷恵子

Professor, Graduate School of Humanities and Sociology and Faculty of Letters, The University of Tokyo / 東京大学大学院人文社会系研究科教授

NAGAYO, Susumu / 長與進

Professor Emeritus, Waseda University / 早稲田大学名誉教授

OHIRA, Yoichi / 大平陽一

Professor, Faculty of International Studies, Tenri University / 天理大学国際学部教授

SADAKANE, Kazuhiro / 貞包和寛

Lecturer, Tokai University / 東海大学非常勤講師

## 活動記録（2020年3月～2021年2月）

### 2019年度日本スラヴ学研究会研究発表会

日時：2020年3月29日（日）14：00～18：30

会場：東京大学本郷キャンパス

3月29日は研究発表会の開催が予定されていたが、新型コロナウイルス感染症の拡大のため中止となった。

### 2020年度日本スラヴ学研究会総会

6月に開催が予定されていた2020年度日本スラヴ学研究会総会は、新型コロナウイルス感染症の拡大のため、メール審議となった。

### 2018/2019年度日本スラヴ学研究会奨励賞選考結果についての報告

6月12日に、日本スラヴ学研究会奨励賞選考結果が発表された。

2020年度日本スラヴ学研究会奨励賞：

松尾梨沙『ショパンの詩学 ピアノ曲《バラード》という詩の誕生』みすず書房、2019年。

### 飯島周先生追悼シンポジウム

日時：2020年12月5日（土）14：00～17：20

開催方法：ZOOMによるオンライン開催

主催：日本スラヴ学研究会

後援：駐日チェコ共和国大使館、チェコセンター東京、日本チェコ協会・日本スロバキア協会

### プログラム

日本スラヴ学研究会 2018/2019年度奨励賞表彰式

開会の辞 三谷恵子（本会企画編集委員長）

冒頭挨拶 ミラン・スラネツ（駐日チェコ共和国大使館次席参事官）

石川晃弘（日本チェコ協会 / 日本スロバキア協会会長）

石川達夫（専修大学）

「飯島周先生のお人柄とお仕事」

長興進（本会会長）

「チェコスロヴァキア軍団側から見たヤロスラフ・ハシェク」

ブルナ・ルカーシュ（実践女子大学）

「厳重に監視された人間——O・シャインプフルゴヴァー『隔離』をめぐって」

大平陽一（天理大学）

「プラハ学派の戦後——ボガトウィリヨフとヤコブソンの場合」

閉会の辞 長興進（本会会長）

司会 三谷恵子（本会企画編集委員長）

### 『スラヴ学論集』の編集

第23号は、2020年4月に発行された。第24号（本号）は、2020年10月に会員からの投稿を締め切り、投稿論文の査読結果を経て採否を決定し、最終的な編集作業を行った。

### 会員異動

入会

なし

退会

なし

## 編集後記

『スラヴ学論集』24号をお届けします。

昨年度は、新型コロナウイルスの感染拡大で研究活動にも支障が生じ十分に研究ができない状況の中、多くの方々からご投稿・ご協力をいただき、無事、24号が刊行できました。

本号には、飯島周先生追悼記事5本、過去の講演の記録2本、投稿論文1本、パンデミックにちなんだ特集の論文2本、報告2本を掲載いたしました。

刊行にあたり、多くの方々に査読者・校閲者としてご負担をおかけいたしました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

本編集委員会は、2019年から現在のメンバーで始動し、編集作業に携わりました。至らないところもあり多方面にご迷惑をおかけしました。三谷恵子企画編集委員長ならびに小椋彩副編集委員長、編集委員の皆さまのご協力なくしては、この論集の順調な発行はありえなかったということの特筆して、感謝の言葉とさせていただきます。

今回も成文社の南里功氏には編集作業で多大なご協力をいただきました。記して感謝の意を表します。

ヨフコバ四位エレオノラ（編集委員長）

## 日本スラヴ学研究会会則

- 第1条 (名称) 本会は、日本スラヴ学研究会 (the Japan Society for the Study of Slavic Languages and Literatures) と称する。
- 第2条 (目的) 本会は、日本におけるスラヴの言語、文学、文化の研究発展に寄与し、研究者間の交流を促進することを目的とする。
- 第3条 (活動) 本会は、その目的達成のため、次の事業を行なう。  
(1) 研究発表会、講演会、シンポジウム等の開催。  
(2) 論集の発行。  
(3) その他本会が必要と認める事業。
- 第4条 (会員) 本会は、スラヴの言語、文学、文化の研究に携わる会員によって構成される。
- 第5条 (会員資格) 入会を希望する者は会員2名の推薦を受け、総会の承認を得るものとする。
- 第6条 (組織) 本会に次の機関を置く。  
総会 企画編集委員会 事務局
- 第7条 (総会) 総会は、毎年1回開催する。ただし、必要に応じて、臨時総会を開くことができる。
- 第8条 (役員) 本会に次の役員を置く。役員を選出は総会で行ない、任期は2年とする。再任を妨げないが、引き続いての再任は4年までとする (ただし他の役職から会長に就任する場合は除く)。  
会長 (1名) 企画編集委員長 (1名) 及び委員 (若干名)  
事務局長 (1名) 会計監査 (2名)
- 第9条 (会長) 会長は本会を代表し、総会を招集し、会務を統括する。
- 第10条 (企画編集委員長および委員会) 企画編集委員長は企画編集委員会を主宰する。企画編集委員会は、研究発表会等の企画および論集の編集を行なう。
- 第11条 (事務局) 事務局は、事務局長および事務局長が委嘱する事務局員から構成される。事務局は、研究発表会等の実施、論集の発行、会計および会の運営全般に関わる事務を行なう。
- 第12条 (事務局の所在地) 本会の事務局は、企画編集委員長が指定する場所に置く。
- 第13条 (会費) 会費は年額8千円とする。ただし、常勤職に就いていない者については年額6千円、院生および学部生は年額5千円とする。また、会費を2年間滞納した者は休会扱いとし、滞納分の支払いが確認できた段階で休会を解除する。
- 第14条 (会計年度) 本会の会計年度は5月1日に始まり、翌年4月30日をもって終わる。
- 第15条 (会則の変更) 本会の会則は、総会の決議によって変更される。

付記 本会則は2000年7月1日から施行される。

2003年6月28日一部改正。2010年6月19日一部改正。2012年6月23日一部改正。2016年6月11日一部改正。2017年6月17日一部改正。

(事務局の所在地) 2017年6月17日より

〒150-8538 東京都渋谷区東 1-1-49

実践女子大学文学部国文学科 ブルナ ルカーシュ 日本スラヴ学研究会事務局

## 『スラヴ学論集』 投稿規程

- 第1条 本誌は『スラヴ学論集』と称する。
- 第2条 本誌の投稿者は日本スラヴ学研究会の会員とする。
- 第3条 本誌の発行は原則として年1回とする。
- 第4条 本誌の編集は企画編集委員長の主宰する企画編集委員会が行なう。
- 第5条 企画編集委員会は原稿の採否についての審査を複数の会員に委嘱する。また必要があれば、会員以外にも審査を委嘱することができる。
- 第6条 本誌に掲載する原稿は以下のもので、いずれも未発表のものに限る。  
1) 研究論文 2) 研究ノート 3) 書評 4) その他(資料紹介、研究論文等の翻訳など)。
- 第7条 研究論文等の翻訳に関わる翻訳権等の手続きは原則として投稿者本人が行なう。
- 第8条 投稿原稿の分量は、研究論文3万字、研究ノート1万5千字、書評6千字を上限とし、外国語での原稿はそれに準じるものとする。なお、図表・写真を含む原稿、第6条4項に属する原稿の分量については、編集委員会が別に指示する。
- 第9条 研究論文には、言語的な校閲を経た論文執筆言語とは異なる言語の要旨を付す。

(2016年6月11日改訂)

## 日本スラヴ学研究会奨励賞に関する内規

- 第1条 (趣旨) 日本スラヴ学研究会は、若手と中堅の会員による研究を奨励するために、優れた学術書を受賞対象として、日本スラヴ学研究会奨励賞を設ける。
- 第2条 (対象) 毎年12月末日を基準日とし、原則としてこの基準日以前2年以内に刊行された研究書を対象とする。
- 第3条 (受賞者) 受賞者は原則として毎年1名以内とする。
- 第4条 (推薦) 会員は対象期間内に刊行された著書について、1人1点を推薦することができる。自薦、他薦いずれも可とする。推薦に当たっては400字程度の推薦理由を提出することとする。
- 第5条 (選考委員会) 選考は、日本スラヴ学研究会賞選考委員会（以下選考委員会と略記する）が行う。選考委員会は会長、企画編集委員長、編集委員長、他若干名で構成し、うち一名を委員長とする。
- 2 会長、企画編集委員長、編集委員長以外の委員および選考委員長は企画編集委員会が指名する。
- 3 委員の任期は2年間とする。ただし会則第8条にある役員の再任に関する規定に従うものとする。
- 第6条 (選考方法) 選考委員会は推薦された著書の中から受賞候補を決定し、企画編集委員会に報告する。企画編集委員会はこの結果を承けて受賞著書を決定する。
- 第7条 (表彰) 総会において授賞式を行い、受賞著書の著者に表彰状を授与する。また選考委員会による講評を当該年度の『スラヴ学論集』およびホームページに掲載する。

2014年6月14日制定  
2018年6月30日一部改訂



日本スラヴ学研究会役員

(2019年6月改選、任期2年)

会長： 長與進

企画編集委員長：三谷恵子

企画編集委員：○岡本佳子      ○小椋彩      ○越野剛      ○菅井健太

○ヨフコバ四位エレオノラ      松前もゆる

(○は編集委員)

事務局： ブルナルカーシュ

会計： 松前もゆる

会計監査： 石川達夫      木村英明

スラヴ学論集（旧：西スラヴ学論集）——第24号——

2021年5月31日発行

発行人 長興進  
発行 日本スラヴ学研究会  
制作 成文社

事務局：実践女子大学文学部国文学科  
ブルナ ルカーシュ研究室  
日本スラヴ学研究会事務局  
〒150-8538 東京都渋谷区東 1-1-49  
Address: The Japan Society for the Study of Slavic  
Languages and Literatures c/o BRUNA Lukas  
Faculty of Literature, Department of Japanese Literature  
Jissen Women's University  
1-1-49 Higashi, Shibuya Tokyo 150-8538, Japan  
E-mail: slav@jssll.org